

ぶどうの木

第 34 号 (2009年 3月発行)

目次

巻頭言	榎本和義牧師	1
信仰告白	長田 正幸	2
わたしの祈り	崔 銀 珠	3
詩集「鰥夫の日々」から	伊規須太郎	4
御言雑感	首藤 正	9
思い出すこと	長田 正幸	20
妻を天に送って	原田駒一郎	22
手術を決断して	貞 サユリ	23
生活雑感	首藤 正	26
川 柳	原田駒一郎	34
聖書の世界を訪ねて	正野 眞宏	36
イスラエル旅行記	正野百合子	38
見えざる御手に導かれて	金生 栄子	40
福岡大濠公園教会の記録 (補遺・改訂版)	編集後記	106

八幡前田教会
基督伝道隊
福岡大濠公園教会
戸畑教会

巻頭言

榎本和義 牧師

「主よ、あなたはみわざをもってわたしを楽しませられました。わたしはあなたのみ手のわざを喜び歌います。」

詩篇九二篇四節

私たちの人生を舞台で演じられるドラマに譬えるなら、台本作家は神様であり、演出家もまた神様です。私たちは脚本家やディレクターの意図にしたがって演じている役者であり、そのドラマを見ている観客でもあります。

創造者でいらつしやる神様は、喜び、感謝、平安、望みに満ちた輝く生涯を生きるようにと願って、私たちを造られたのです。人を苦しめるために造られたものではありません。神様のご愛の意図を生かすことが出来ないのは、人生の脚本・演出が神様であると認めないからです。人は自分が主となり、全てを取り仕切っているかのようになっています。その結果、人生は思い通りに行かず、苦しみや悩み、悲しみと失望、つぶやきと憤りの連続です。

そこで、私たちが謙遜になって、人生の脚本・演出家である神様の指図どおりに従うなら、アカデミー賞主演男優・女優賞ならぬ、永遠のいのちの冠をいただく名優として、命の書に名を残すことでしょうか。それは神様にとっても大いなる誉れです。

今年も、「ぶどうの木」三四号を発行することができました。これは信仰の「あかし」を集めたものです。神様のドラマを記録したものとも言えます。神様が他に比べようのない名脚本家であり、名演出家であることを証明するものです。同時に、観客である私たちを笑いと涙で楽しませ、神様をほめたたえさせるためです。ここに集められたものだけではなく、あなたの人生もこの方によって演じられているのです。そのドラマはまだ完結していません。今は第何幕目でしょうか、これからどのように話が展開していくのか、大いに楽しみます。

次回にはぜひあなたの証言を聞かせてください。主のみわざを楽しもうではありませんか。神様を喜び、ほめたたえるのは私たちの力ですから。

信仰告白

長 田 正 幸（前田）

十年前に、私は定年退職しましたが、それを機に、それ以前の事は整理されて、晴れやかな年金生活を送ることができると思っていました。

ところが、暇な時間が多くなり、かえって自分の犯した恥ずかしい愚かな行為——虚言、暴言により、他人にひどく迷惑をかけたことが、次々に思い起こされることになりました。それも、波のように周期的に襲ってくるような状態で、そのたびに自責の念に悩まされました。

一、二歳の頃、中耳炎を患い、両耳とも鼓膜を失って耳の聞こえが悪く、その影響で引つ込み思案、それでいて頑なで、意地っ張りの頑固者となりました。素直でない人間となり、これが種々の愚かな行為につながったものと、自分では思っております。

このような状況のとき、京都府下の次兄から、基督伝道隊八幡前田教会（榎本和義牧師、金生一郎伝道師）と記され、所在地、電話番号の書かれた手紙が届きました。

「お前の所から、そう遠くない所と思うから、一度訪ねてみ

たらどうか」とありました。

兄は以前、教会の仕事に携わっていたこともあり、夫婦と子供四人ともキリスト者であります。私が二十歳代の頃から、聖書をはじめ書物・雑誌などを送付してくれていました。私はそれに深い関心を持たず、時に拾い読みする程度で、基本的には放り出していました。

前述の通り、私は悩みを抱えておりましたので、教会にはそれを軽減する何かがあるかもしれないと思い、しかし一方では、そんなに深く考えもしないで、八幡前田教会にお伺いした次第です。

はじめに、礼拝式の雰囲気、讚美歌、信者の祈り、説教など、すっかり圧倒されてしまいました。もうすぐにも逃げ出そうと思いましたが、そう思いながらも、逃げ出すことができず、通つてまいりました。

榎本、金生両先生の説教をおうかがいしていますと、通り一遍の私の聖書の読み方では、到底理解し得ないことが分かるようになり、納得することが度々ありました。その程度ではまだ十分とは言えないかも知れませんが、「自ら熱心に神に寄り頼み、信じることが大切である」と、確信するようになりました。

榎本先生から個人伝道を受けておりますが、「長田さんがこ

ここに来るようになったのは、神様の計り事で、以前からそのように計画されていたのです」とお話がありました。何か有り難い事のように、私には響きました。

「恐れるな、わたしはあなたをあがなった。わたしはあなたの名を呼んだ、あなたはわたしのものだ。あなたが水の中を過ぎるとき、わたしはあなたと共にいる」(イザヤ四三・一二)と、榎本先生はご指導くださいました。

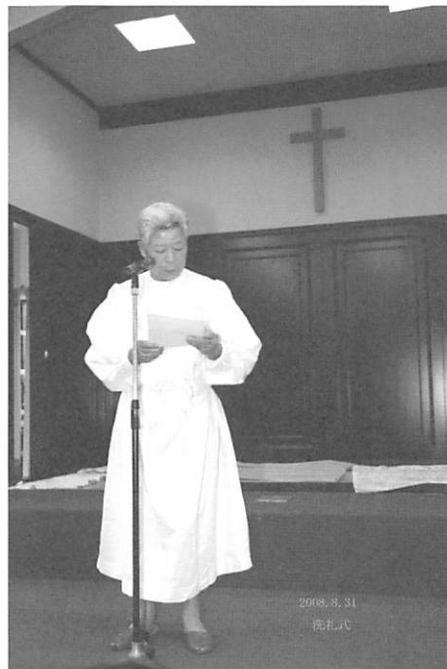
さらに、個人伝道の際、ローマ人への手紙第六章を示されました。

「キリスト・イエスにあずかるバプテスマを受けたわたしは、彼は、彼の死にあずかるバプテスマを受けたのである。すなわち、わたしたちは、その死にあずかるバプテスマによって、彼と共に葬られたのである。それは、キリストが父の栄光によって、死人の中からよみがえらされたように、わたしたちもまた、新しいいのちに生きるためである」。

そして言われたことは、「パウロも、イエス・キリストとは同じ時代の人ではありません。違う時代に生きたパウロですから、キリストの死にあずかるバプテスマを受けたと言っているのです。長田さんも、同じなのです」と、教えてくださいました。心から感謝して、信ずる次第であります。

— いと高き天の神様、なにとぞ私の諸々の犯した罪を洗

い流してください。尊き主イエス・キリストの御名に感謝してお願いいたします。アーメン —



2008年8月31日 洗礼式にて

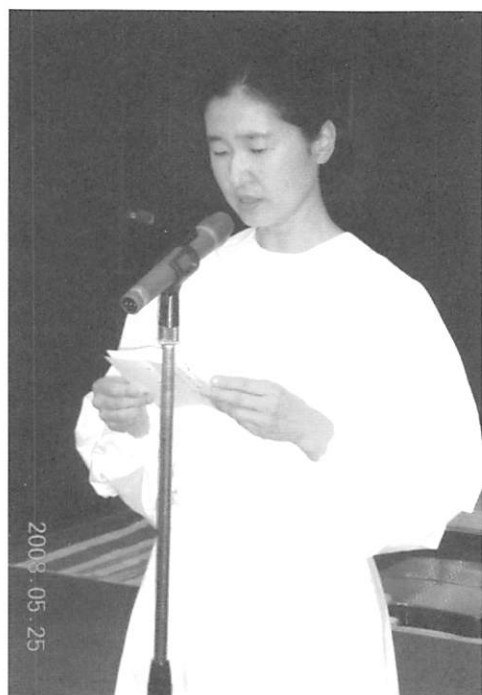
わたしの祈り

崔 銀 珠 (大濠)

天のお父さま、

今、私は感謝の気持ちでいっぱいです。

長い間、罪の奴隷として、この世をさまよいましたが、イエス・キリストの十字架によって、罪のからだが減びて、



2008年5月25日洗礼式にて

キリストとともに生きることを感謝します。
 今までの古い私はキリストの死に与かるバプテスマによって
 キリストとともに葬ります。

罪から解放された私が神様のはしためとして
 生まれ変わることを信じます。

これからはイエスさまの聖なる霊が支配する
 新しい人生をあゆみます。

どうぞ、私をいつも導いてくださいませ。

イエス・キリストの尊き御名によってお祈りします。

アーメン

詩集「鰐夫(やもお)の日々」から

(勝利を目指す最終戦争)

伊 規 須 太 郎 (戸畑)

珍 友 (ゆう||馳)

「ゆう」は馳(イタチ)である

蒸し暑い夜のこと 勝手口を透かしているが風は動かない

と 視界の隅で何かが動いた フト見ると

猫の顔をつまんだような小顔 あイタチだ!

だが えらく落ち着いているな

何やら私に呼びかけたいような顔?

「暑いですね おじちゃん一人ですか」

「うん そうだよ 君珍しいね 近くに住んでいるのかい」

「ヒ・ミ・ツ うっかり教えたら 猫にやられるからね」

「この辺はネコ地帯だって知ってたかい この裏のうちには

二十四匹以上いたよ」

「もちろん知ってるさ ネコ好きの子が進学してから

もういないんだ」

「そうか よく知ってるね まあ 気をつけろよ」

その間何秒くらいだったろうか もう一声「おいで」と
声をかけたら 長い尻尾がスーッと
入ってきそうな感じだった

そばに来たら 何を話そうかな と考えてると
ひとり暮らしも捨てたものではない と思った

蚊

「今日はずいぶん気温が上がったな」と思っていると
蚊の尖兵に襲われた やぶの中ではない
窓を閉め切った家の中 間仕切りの奥にある書斎である

いくつものバリアを突破し 階段を上がり 足の踏み場もな
い書斎を笑い 熱線(私のからだ)を感じて前に回り
眼鏡の下 目のフチにサッと突撃 迷わず吸い付く
ハハーこいつ飢えたメスだな

それにしても どこで冬を過ごし

どこの水溜りでボウフラ(ピコピコ)時代を過ごし

日に日に上がる平均気温を見極めて 「ヨシ」と飛び立つ

どこで話し合ったのか 誰が教えたのか?

野生にはかなわない 彼らの脳は十億分の一グラムも

あるまいが ソフトが凄いのだ

いま仕事なのであっちに行つといて(フワーツと払う)
いずれ血をあげてもいいが (産卵する)水溜りはないよ
廃車したからタイヤもないし…………

君たち一度(吸血)満腹すると 卵の成熟から産卵まで
すんでしまうんだってね すごいね

「蚤の四月に蚊の六月(旧暦)」なんて言うから

何回も出て来るらしいね じゃあまた会おう バイ

歩道はシャドウ

ある朝 かりつけ医院から 車椅子で帰宅しようと考えた
そよ風は良いし 二、三十分は良い運動と思ったから

ところが　すぐ間違いに気付いた　商店や事務所の
一軒ごとに　目まぐるしいほどのアップダウン！

これはたいへん　車椅子はとても傾斜に弱い

私の車椅子で実測すると　前後輪の荷重比は三対四だから
前輪の負荷は三十kg　もし(横方向の)傾斜が六度あれば
横から押す力は　三kgとなる(注に計算式)
この力に抗して直進するには　片手ばかり漕がねばならない

こういう歩道は　まさに

※シャドウⅡ斜道(ななめのかたむいた道)

※シャドウⅡ遮道(車椅子をさえぎる道)

英語にひっかけ

※シャドウⅡShadow Sidewalk(暗がりの歩道)

こんな道しか作れない社会は

※シャドウソサイエティShadow SocietyⅡ(暗い社会)?

そういうえば　車椅子の人の行きあつたことがない

〈注〉計算式(三十kg×Sin θ 六度Ⅱ三kg)

折り込み「はじめに神」

はじめのないものは一つもない　終りの良いもの多からず
じつと考えりやすぐ分かること　考えなしに世に流される
めの構造は完璧でも　見ようとしなけりや見えぬ不思議
にく体は土の塵だが　人間ソフトが組み込まれてこの傑作
かみの存在を疑う人は多いが　胸の鼓動を何と聴くか?
みのほど知らずの人間は　全体知の前に謙虚にならねば
はつと気付きが第一歩　無知を知るのが真の知者
てん国Ⅱ入れないはずと感激してゐる所　地獄Ⅱその反対
とびらの前で思案せず天国門をまつしぐら　予払カード有
ちか道　抜け道　探すは無駄　通行カードは×印ただ一つ
とびらが閉まつて地団太踏むも　この時ばかりは猶予なし
をえつの満ちる永遠地獄　こんな所に絶対来るな
それなら善根功德積むべきか　それができれば苦勞はない
うそは盗みと心を見られ　罪のない人　誰もない
ぞつとするよな自分の心　どうにもできぬ口惜しさ
うれしいことにこんな者を　新(再)創造する道開き
さいこうさいの判決よりも　ずつと高次の決定ください
れきしのアルファ・オメガの創造主こそ　誉むべきかな
たいへんたいへん　時は満ち過ぎ去ろうとして急いでる

折り込み「嘲る者の座」

あさから晩まで励みに励み 物作ったり勉強したり
ざっと見渡す世の中広い かごに乗る人かつぐ人
けっしょく変えて： そのまたワラジを作る人

ももしお尋ねします 「そしてどうする」ってこと

のぞみ叶ってお金もたまり 名譽も地位も家族もできた
のぞみが全部叶ったその日 あなたは一体どうします？

ざぶとん十枚 俺には無縁と思うあきらめ多かるが
にんげん手柄は 金額・形式・量・程度によりません

すこしの望みも持てないままで 生きることは堪らない
わらいさざめく栄耀栄華 重い問い掛けを秘めている

らッパが終りに鳴ったとき あなたは一体どうします？
ぬえのままでは生きられぬ その先 死線も越えられぬ

ひとはどうでもよい事ばかりとソフィーの嘆きを何と聞く
ところで哲学は難しくない 愛智だ 虚心な生そのものだ

はかない人と思うなよ 尊く生きよと造られている

さあもつと天国について食欲に 高く生きよう輝いて

いま生きる質良くないで 勝利死できるはずがない

わが人生に悔いはなし 終りも喜び迎えられたい
いかがでしたか 感じて下さい 求めて下さい

生きて下さい

折り込み「はじめに言葉」

はじめは どんなものにもある

じつと思えば そのまた前も

めに見えんでも あるはずだ

にんげん説明 もつともらしい

ことばたくみに 説き伏せられて

とうとう納得 するにはするが

ばん(=ビッグバン)の前にはどうなつたの？

がラガラポンは どつから来るの？

あなたの学説尊びますが 「じゃないか」論はもう結構

つきつめた 本当の所が聞きたいのです

たれしも真理の大海のぞみ 謙虚になりましょ

もろともに！

折り込み「平和を作り出す人」

へいわの反対 戦争だけど ほんとの出どころ欲の玉
いかに控え目だったとしても 欲のない人見たことない
わへいなんて夢の夢？ 人対人ならそのとおり
をつと待て も一つ大事な方がある

つくえ作った建具師と 机の関係考えよう
くぬぎ櫛ブナ杉檜 素材はいろいろあるけれど
りっぱな製品作るのには 術者の頭と手の技術
だれでも打つてるハートの鼓動 当たり前だと思えるか
するとあんたは 油さし分解掃除してきたか
ひとの生命維持装置 誰かに付けてもらったか
とびとびドッキン不整脈 ブルブル震える心房細動
たまったユラリの血栓が フワリと飛んだら脳梗塞
ちの管すり抜けトロリツルリ やつとこさの血のめぐり
ばランス微妙に生きている 怖がることはいらないが
さてもか弱生き物よ も少し謙虚になるべきだ
いっぽう命の営みは か弱く見えてたくましい
わが手で命を締めぬ限り 死にそで死なないターミナル
いしがどつかで働いてると 考えない方が不自然だ
であれば真相弱々しくも 動かず安らかそはそれなりに

あらん限りの力を振るい 使命の道行くこの生きがい
るアーに釣られる魚と違ふ 本物に賭けるは最賢人

折り込み「主はわたしの牧者」

しつかり 気分はもつてるつもり
ゆう暮れせまれば ソコハ力不安
はたして これでよいのやら
わしがわしがと 頑張つてたが
たいしたことは やつてない
しんだら すべてはおしまいか
のべのおくりで きえるだけ
ぼんやりでもいい 頼りたい
くるしいときの 神だのみ
しかられたつて しかたない
やつぱり 前から考えて
できなくならぬ その前に
あしたじゃ遅い 今のうち
るーる学んで 勝ち終りたい

御言雑感

首 藤 正(前田)

(一) 端役

皆さん、ポテバルさんを気の毒とお思いになりませんか。妻の申し立てを信じたばかりに一転して家運が傾き、やがて勤めも拙い事になり、あげく妻の事も信じられなくなつたのですから、これはもう、言うなれば悲劇ですよ。

俗に、「可愛さ余つて、憎さ百倍」と言いますよね。妻は要求を拒んだヨセフを憎い、おとしめてやれと、幸いむしり取つたこの上着を、この際何よりの証拠と、咄嗟の悪知恵が働いて、折柄帰宅した連れ合いへ上着をかざして訴える。

実に名演技ですよ。手もなく騙された夫のポテバルさん、烈火の如く怒つて、これまた可愛さ余つて憎さ百倍の道理で、即刻、問答無用とばかりにヨセフを牢獄へ投げ込んだわけ。

細工は粒々、まんまと図に當つて、ざまあ見やがれ、いい気味さと、ほくそ笑んだことでしょうね、ポテバル夫人は。

第一場は、夫人の完全勝利。でも、神様の祝福つきのヨセフを手放すとは、かえすがえすもポテバルさん、あなたはつ

いてませんでしたよね。

それに引き換えて、牢屋番さんは棚からぼた餅式に祝福を頂戴して、何もかもヨセフに任せつ切りでいける得な役回りを引き継いだ。次いで夢解き能力の確かさを証明する事件が伏線として用意されて、次の段階に移るのは、誰も彼もがヨセフの事をすっかり忘れた頃にやってくる。

俄然、パロがある夜、夢を見る。その次の夜も夢を見る。立て続けに、鮮やかな夢を見る。あまりに鮮やかな映像なので、頭はその事で一杯になつてしまった。早速、エキスパート達を招集して諮問するが、一向に埒が明かない。

その様子を見ていた献酌官がハツと気づく。慌てて自分の体験を披瀝してヨセフの事を申し上げる。なにになに、そういう耳寄りな有能人がこの国に隠れていたのか、早速連れてまいれというわけで、事態は急転直下、地下から天上へと大転回する。

トントントン拍子にヨセフの天与の能力が証明され、得がたき人材と見たパロさんは、即刻統治の実務一切をヨセフに委任する決定を下す。ポテバルが捨てた神の祝福を、飛び石伝いにパロが拾い上げた図式。その条件は、ヨセフを信頼して何もかも任せること。

ポテバルさんにしてみれば、助け手のはずの妻から足を掬

われて、でんぐり返つて宝を投げ捨てたようなもの。さあ、元わが奴隷で、今上司の下で公的生活がおめおめと勤まるものかどうか。国中の全権力を委任されたヨセフに対して、どのみち頭が上がるわけがない。会わず顔もあるめえ。

ヨセフにしてみれば、神様の御手で自分の身の潔白が公公然と証明されたようなものだから、今更元の主人に昔の事を持ち出す気はサラサラない。それもこれも神様のご摂理の一端だったという認識があるので、一切口をつむぐ。いまや与えられた新しい業に渾身精を出すのみ。

そういうヨセフを見てると、ポテバルさんは一点の疑いを差し挟む余地もなく、ヨセフの人格が高潔で、自分の信頼を裏切る所業はなかったとの確信が否応なく生まれて、引き換えて妻への疑惑が芽生えて悩む。かと言って、今さら問い詰めたからといって、前言を翻すような女性ではないことも十分察しがつく。夫婦関係にも鬨り(かげり)がさし、家産もほとんどん傾いていく。社会的生命も失う。人生の急坂を転がり落ちて行く彼の暗澹はいかばかりだっただろうか。

思えば、彼が迫られた選択は厳しかった。妻を採れば社会的生命を失い、家運も傾く、奴隷を採れば家庭生活は破綻する。

岡目八目的に言えば、一度信頼して任すことに決めた相手

を、何があつてもトコトン信じ切るべきだった。たとい妻に出てゆかれても、少なくとも神の祝福は去らず、そしてその事が全てなのだった。

瀬戸際の危うい所まで行つたのに、信頼を失わずに取り戻せたかのヨブのその後の繁栄は、その事を裏書して余りある。もつとも、ポテバルさんの知るところではない後年他国の出来事ではあつたけれど。

常識的に見れば、まことに気の毒な役回りを演じさせられた「端役」、いや「脇役」だったポテバルさんよ、まことにご愁傷様でした。反面教師さんよ、瞑して他山の石に、安らかに眠れ。

(二) 決算

ヨナタンさんくらい頼み甲斐のある友人は、めつたにおるものではない。身は次期王位を約束されたも同然の王子でありながら、絶対ライバルになるダビデを無二の親友扱いをし、父親の命令をも無視して、助命のために奔走し、ひたすらダビデをかばった。

彼は父親の暗い行き先を予感して父親に殉ずる覚悟を決め、親友の将来を確信して、敢えて身を引いたのである。父と友のために無私を貫いた。

ヨナタンの死を知った時、哀悼痛切の詩を作らざるを得なかつたダビデは、友の犠牲の上に自分の人生はあると痛感したのかも知れない。この後、彼にはヨナタンに比すべき友は一人も与えられなかつた。彼を支持する人は少なからず出たが、多かれ少なかれ、自己愛を残した人達ばかりであつた。従兄弟のヨアブ將軍は自己の立場を重視する方だつたし、ゲリラ隊三百人の部下達も家族をさらわれた際には、ダビデのせいにして撃ち殺そうとした。

議官に取り立てたアヒトベルでさえ、政治的に立ち回つてクーデター側に加担した。目をかけた実の息子のアブサロムに至つては王位の横取りを企てて、王国を二分して内乱に追い込んだ。その家庭はお義理にも円満順調和氣藹々とは言えず、不祥事が生起した。しかし愚痴は一切言わず、神の御手に委ね、その中で精一杯の才覚を働かした。

彼が人生の切所切所(峠)で讀んだ数々の詩を読めば、神への満空の信頼と讃仰を知ることができ、外の形を早計に判断してはならぬことを痛感させられるのである。

彼は一介の羊飼の子供として人生をスタートしながら、自分がどのような負託を盛られた器であつたかを知れば知るほど、平蜘蛛のごとく神の前にへりくだつたに違いない。詩篇二三篇は、彼の人生の総決算であつた。神の負託に十分に応

えた証しでもあつた。この信仰の詩を生み出すために、彼の人生はあつたと言つても過言ではない。

(三) 推察

復活後、ガリラヤ湖畔に現れたイエス様から、三度までも「ヨハネの子シモンよ、わたしを愛するか」と訊かれて心を痛め、悲しくなつて「そんなこと、良くご存知ではありませんか」と申し上げたい氣持で一杯になつたに違いないけれど、この時のペテロに果たして、数日前のピラトの法廷の庭で問詰されて、そんな人の事は知らんよと主を否む自分の心ばえと言葉に、主がどんなに傷つき、心を痛め、悲しく思われたかを思いやれる想像力があつたかどうか。

後年、心をこめて教え導き心を許した者から、すげなく人前で袖にされて受けたショックと悲しみで、自分がかつて主に与えた悲しみの深さを思い知つたのである。なぜ三度も、「私を愛するか」と迫らずにはおれなかつたか、主の切迫した心情の一端を窺い知れた氣がしたのである。そして三度を三十倍してもなお足りない程の愛の告白を捧げたに違いない。

(四) 波長(うま)

聖徒パウロが、第一回の伝道旅行に連れて行つたマルコ青

年の途中落伍に幻滅して、二度目には頑として同行を拒んだところを見ると、相当な頑固者の気配が感じられるけれども、ヤコブ書のヤコブに比べると、まだしも可愛げがありそう。

ガラテヤ人への手紙では、そんなに割礼割礼と割礼にこだわりたいのなら、いっそ切り落としてみえと、えらく激しい物言いをなさっておられる。しかし、全体の感じからいけば、パウロに輪をかけてヤコブの方が全然上手の癩癩持ちではある。

パウロならもっとやさしく事分けて説いてくれそうなところを、頭ごなしにどやしつけるような気味で言ってくれている感じがある。気の弱い者は、あの物の言い様に接するだけで縮み上がって、その裏側に隠れた心情に届かぬ恐れがある。かく言う私も、波長が適わぬとばかり、長い間反発が先立って落ち着いて聞けなかったものである。

(五) 落差

出エジプト記の中で、八十歳になったモーセが思いがけなく召命に遭い、尻込みして「私は舌が重いですから、とても御用には向きません」とごねる所がある。

こここの所を読んで、私は悪いけれども大笑いしてしまった。不承不承、承知してからの四十年間の彼の言動を見るに、こ

れ以上の雄弁はまたとあるまいと思えるくらい、委細を尽くして、引率の同国民に語りかけているし、また国民を代表して、言葉巧みに神様とも折衝して、度々方針変更を勝ち取っている。

取えて言うなら、「雄弁術」の粹所持者の資格十分である。誤解しようのないまでに意を尽くし、情意兼ね備わった言説をもつて、終始民衆をリードしてきたし、神様へも執り成している。この後、彼のような預言者は二度と出なかつたと証言されたほど、ダントツだった。

彼のどこを押せば「訥(とつ)弁」が飛び出すのか、自意識と神様のご認識の落差に、つい笑ってしまうのである。

(六) ライバル?

「パリサイ人やサドカイ人のパン種に警戒せよ」という御言に接すると、ギョツとする。どうかすると、自分自身の内にそのパン種が相当量ある気がして、警戒せねばならんのは、自分自身に対してと指摘されるようで、心が動揺するのである。

そうすると、こちら側にいらつしやるはずの御方が、あちら側にお移りになっていられるようで、お目がきらりと光っている。「理屈っぽいよ、お前は。重箱の隅をほじくるのは止め

て、もつと素直になれ。肝心要に目を注げ」とおっしゃっていいようでもある。

顧みて他の言うのは、いつでも二心がある証拠。ペテロさんの二番目のお手紙のおしまいの所に、僚友のパウロさんの難解な手紙への感想が書いてある。無理な解釈を施して、滅亡を招く危険を言うとは、かなり思い切ったアドバイス。これを知ったらきつとパウロさん、「霊の言葉は、よろしく霊によつて読むべし」とおっしゃるでしょうよ。

(七) 一会

たった一度の背きが、どんなに後々まで災いを残すか。ちよつと挙げるだけでも、モーセのそれがある。

口で命じよと言われたのに、率いる民衆の余りの不信心さへの腹立ち紛れに、えい、こなくそつと持った杖で岩を思い切り叩いたため、水はほとぼり出たが、モーセ自身の前途は閉ざされて、目指すヨルダン渡河はまかりならぬとなつてしまった。後にも先にもそれ一回の失敗で、九仞？の功を一簣？に欠いてしまったわけだ。

もつと大きなのは、人祖のそれ。「取つて食つてはならぬ。

食えば必ず死ぬ」と、間違ひようもなく止められていたのに、「知恵＝善悪を知る木の実」を浅はかにも忘れて、いや不信心

から食つたため、楽園追放ばかりか、食うために額に汗する一生を課せられてしまった。その上、神無視の恐ろしい性質が癌のように子孫へ殖え広がり、被造物の世話どころか圧迫掠取が常となり、全世界を呻きの海へ投げ込んでしまった。

これに対し、たった一度の完全無欠の従順が、それまで犯された罪責の全てを帳消しにしたばかりか、新しい「永遠の命」の恵みを世界に來たらせ、天地再創造の計画実現の元となつた壮大無比の功業の主が、我らの主イエス様であるのは、福音書にあるとおり。世に「二期一会」とあるが、これくらい恵みに満ちた一会はまたとあるまい。

そして、これもまた劣らず重要な事だが、我らの主との邂逅もまた、実に一期一会の恵みの好機であり、これを取り逃がしたら、又の機会はないのも事実。さらに言うなら、時々刻々、日々毎日が繰り返しの利かぬ一期一会の主との巡り合いにほかならぬと肝に銘じて、何かにつけて言うと言わぬとに関わりなく、祈りをもって心を主に向ける生き方こそ願わしく、また好ましく、主の御旨が自分の全てとなつてこそ、主に受け容れられるに違いないとの信仰と欣喜が湧然と起るのである。

一期一会とは、主のためにあるメッセージと言っても、決して過言ではないと信じるのである。

(八) うらやまし

クリスチャンは、イエス様の花嫁となるべき婚約者に例えられている。例えとは言つても、酷似の立場はこれ以外にはないから、この形容を引き合いにしたに違いない。

男女の違いを超えて、ひつくるめて花嫁予定者と自覚せよと呼び掛けられているとすれば、女性は同姓だからすんなり納得できるとしても、逆立ちしても花嫁の身分になれるわけもなく、想像もリアルにはできぬ男性族としては、なにがなし一種途方に暮れるのである。

どう転んでもなれない者になって見せる実際の例として、歌舞伎の女形があるが、これなどは演じて見せる芸に過ぎない。

一般的通念のつもりで福音書は花嫁の理想を前提に、この言葉を掲げたのであろうが、実際の心持や心掛けとするに当たって、やはりためらいがあり、男族としては、例の「総論賛成、各論反対」の後半分に似た及び腰とついなりそうになって、その点ストリートで言いきける女性がうらやましいのである。

(九) トルコ地帯

現在のアナトリア高原を含むトルコ国の領域は、二千年前

は今とはすっかり有様が違っていて、使徒行伝に描かれた聖パウロの伝道の重要な地帯であり、またヨハネ黙示録のはじめにある七つの教会の所在地でもあった。

パウロ書簡の宛先のエペソもガラテヤもそうだったし、第一に外国伝道旅行の出発地のアンテオケもそう。パウロの生地タルソも同じ。ここで移住してきたユダヤ人商人として、裕福な暮らしの家に育ち、エルサレムへ勉強研鑽へ赴いて、碩(せき)学の下で将来を嘱望された学徒だった前半生は、彼の弁明に明らかなこと。

現在、世界の文進からいうと、後進地に見られているが、パウロの時代は言うに及ばず、つい数年前までは文明の交流の要衝として先進地と視られ、力関係からも恐れられていた。今のルーマニヤその他の東欧を領有していた強大国でもあった。キリスト信徒団の地下礼拝堂や居住抗域は、今も残存しているが。

(十) 同根

福音書のどこにも、お笑いになるイエス様のご様子が書かれていないが、折に触れて口にされる奇抜な例え話から察すると、極め付きのユーモリストだったに違いない。人の行状のちぐはぐな所を鋭く衝いておられるお言葉の裏に、心から

の哄笑が伺えるのである。

強盗の災難に遭った者へ通りかかった祭司とレビ人と、異邦のサマリヤ人の有り様の違いを読んで、あえて見て見ぬ振りをする前二者に、信心深いはずの祭司とレビ人を当てたところに巧まざるユーモアを認めて、つい笑ってしまうのである。イエス様も隅に置きぬわいと人間観察の皮肉な正確さに、同意と脱帽と哄笑を覚えるのである。

アブラハムの懐に抱き取られたラザロと火炎に苦しむ金持の話など、対比の妙に真実に裏づけされたユーモアがこもっており、取りようでは、ブラックユーモアの最たるものだ。笑いと涙とは、たいてい同居しているものようである。

(十一) 自山の石

スポーツマンにはスポーツが大きく見えるし、商人には商売が大きく見えるに違いない。その伝で行けば、キリスト信者にはキリストが大きく見えて当然である。明けても暮れでもキリストしか見えず、キリスト以外には目もくれない、とあつてもおかしくはない。

若い時、好きな異性ができる、寝ても覚めてもその人のことを想い、見るもの聞くもの全てが、その人に結びついて、行住坐臥その人のことを考えるし、その人を中心に進退する

按配となる、と極端に言えば、そういう様相を呈する。

肉のエロスの次元でも突き詰めればそこまで行くのに、靈の次元で、それ以上行かぬという手はない。現に聖書で見限り、明らかにパウロはそうだった。そして自分に倣えと確信をもって後進に呼びかけている。行住坐臥、「キリストにある」恵みを説いてやまなかつた。

他山の石どころではなく、正に自山の石と言うに相応しい。

(十二) 鼓

聖徒パウロの教会や信者への手紙を読むと、至極真面目な記述に満ちていて、冗談のかけらもない。その印象からすると、ご本人に会つても笑い顔一つ見せぬ、謹厳そのものではあるまいかと案じられるほどである。

ところが実際お目にかかつてみると、よく笑い、よくしゃべり、談論風発、エスプリあり、ユーモアあり、それが深い学殖に支えられていて、いくら話を聞いても飽きない、実に魅力ある人物と分かるといったことになったかもしれない。

事実、彼について「その手紙は重々しいが、会つてみると、案に相違してつまらない」という風評も立った。面と向かつてみて、手紙以上の内容ある会話を引き出せないのは、会う側の責任も半分あるのであつて、面会の仕方が悪いのである。

大きく叩けば大きく鳴り、小さく叩けば、小さく鳴るといふ太鼓と同じ原理があることを忘れた意見なのだ。パウロくらい含蓄に富んだ人物は、そうたんとはあるまい。

(十三) 常備品

聖徒パウロの生家は、今でいう貿易商だったといわれる。東西通商・貿易の要の位置、小アジアの地中海岸のタルソで物資流通業を営むには、当然、当時の国際語であったギリシヤ語が常套語であったに違ひなく、内ではヘブル語、外ではギリシヤ語の使い分けの暮らしのバイリンガルに育つたことが、後年、異邦伝道に起用された因子の一つと見て差し支えない。本人の自覚では、生まれる前からとくに選ばれてきたとあるからには、バイリンガルの家庭に生を受けたこと自体、計画内だったわけだ。

異言を語る他の聖徒達が聖霊降臨後のいわば中途能力獲得者だったのに比べ、パウロはローマ市民権同様、生まれながらの能力、生得の技能だった。

自国語・母語並みの駆使で福音を宣べ伝え、当時のローマ版図内の各種民族に語り掛け、また文書を起草できたギリシヤ語は、まったく彼にあつては自家薬籠中の常備品であつた観がある。

(十四) どちらかという

イエス様の有り様は、半分は復活後の人のあるべき姿を前もつてお示しになつているところがある。

たとえば対女性で言つと、「復活に相応しい者は娶つたり、嫁いだりはせず、天の御使のようになる」と、サドカイ人にお答えになつたお言葉のとおり、結婚の対象として見たり扱つたりは全くなかつた。イエス様を取り巻く女性側も誰一人結婚のことが念頭にあつて接したりはしなかつた。呼びかけが常に、「主よ」か「ラビ(先生)」かであつた事からも分かる。

その点、同姓の男性は生臭いところがあつて、政治的に支配者のローマから自国を解放して独立を勝ち取つてくれる地上的救済者とする視点が確かにあつて、その面の失望から離れて行つた者も少なくなかつた。純粹さの点、少なくとも本性的に主を見る視力のよさでは、むしろ女性側の方が優れているように思え、復活直後、いの一番にマグダラのマリヤにお会いになつたのも、肯けるのである。

(十五) 今さらに

さらさらさらつと、何十年にも亘る事を、かいつまんで書いた感じのせぬではないルカの手になる「使徒行伝」では、伝

道先で生まれた信者個人の家が右から左へ教会となった感じのある記述では、信と個人の内面についての深い描写は文章の性質上ほとんど取り上げられてないところから、人を見た目で印象を持つ浅さをどうしても免れない憾みがある。

そこへ持つてきて、使徒パウロが教会信徒に宛てた手紙で述べるレベルの高さに接すると、それに相応しい信仰の持ち主だったに違いないことが偲ばれて、シヨックに近い驚きと見直しを余儀なくされる。

見ると聞くとの大違い。会って話してみると遠くから漠然と見ていたのとは大違いの、じつに深く味のある人柄なので、愕然とさせられるというのに近い感じがある。パウロの書簡という鏡に映して、当時の初代教会の信徒の姿がありありと見えてくるのである。今さらに、外と内の両方で人は出上来上がるもののようにだ。

(十六) 岡目八目

モーセの従者ヨシユア、エリヤの従者エリシヤ、共に師の霊を受け継ぐことを熱望し、望みどおり手にできた。けれども、二流の印象を免れないのは、どうしたわけか。

世に、「出藍の功」ということがある。「青は藍より出でて、藍より青し」という師勝りの姿を言う。師を凌駕しなければ、

亜流の評価を免れない。変貌山で主に顕来したのはモーセであり、エリヤであって、ヨシユアでもエリシヤでもなかった。

この信仰の流れを打ち立てた柘植先生を仰慕して、近い、あるいは近くなることをひたすら念願してやまなかった、いわゆる直弟子の群れよりか、同先生の信仰を信仰とする「聖書の信仰」をひたすら追い求めた先生の方が、「衣鉢を受け継ぐ」に相応しい働きをしえた「出藍の功」の誉れ、獲得者となった事実は何を意味するか。

師を追い求めずに、師の追い求めたものを追い求めよという核心事を示しているのではあるまいか。

(十七) The Holy Event (聖業)

「はじめに、神、天地を造り給えり」

でスタートしたこの世界は、遂にはどういふことになるのか、おしまいを決めるキーポイントはただ一つ、つまりその神を信じて受け入れるか、締め出すか、の二者択一しかない。

認める者は受け入れられ、認めない者は締め出されて完成。その図式は、聖書が一貫して示している通奏低音でもあり、メロディでもあって、苞大交響曲の観がある。六六章からなる巨大な交響曲で、インターバルもあり、後半は一転して歓喜、愛、希望の序奏から始まって、苦痛を乗り越えて尽きる

ことのない命と慰めと栄光と頌榮に至る。

このような交響詩はかつてなく、今後もあり得ない。この演奏会場は万人に開かれていて、聴衆席から立って演奏側に参加することも拒まれないどころか、諸手を挙げて迎え入れられる。実に開かれた、途方もない宇宙的イベントの名に相応しい聖業なのである。

(十八) 敵と寛と

「戸を閉じて、隠れた所を見給う神に祈れ」というイエス様の勧めは、とかく人を視界に入れたがる虚栄を捨てて、神と一対一で向かえという、人としてのあり方の基本事項を指摘したものだ。

神の栄光ある御業の顕現という意図のあるとき以外は、イエス様はいつも一人で退いて、神に向かい、祈りによって親しい交わりを持たれた。ただし、ただ一回だけ例外がある。それはゲッセマネの最高に苦しい訴えの祈りの時だけは、親しい二、三の弟子を一緒に伴い、祈りを共にすることを期待されたのである。往年、アマレクと戦う際のモーセの両側から、従者達が腕を支えて祈りを助けたあのパターンの踏襲を、弟子達に望まれたのかもしれない。

しかし、最も手助けの必要だったこの時に、眠りこけて何

の役にも立たなかった弟子達に対して、「心は熱しても体は弱いから、止むを得ない」と理解を示して、ちっとも苦情らしい事を仰らなかつた底知れぬ寛大さを見るがよい。

(十九) a Short Prayer (短く祈り)

時々、私はこう祈る、

「イエス様の御旨が私の全てでありますように」。

これでおしまいです。何もかもひっくりかえして、この一言に尽きる。これ以上でも、これ以下でもなく、イエス様の御心がそのまま、私の上に成就すれば、それで十分。必要にして足りるはずと思うからである。

「主の祈り」よりだいぶ短いですが、福音書の勧めは要するに、「主にあつて生きよ」であることを考えれば、同じことを意味しているに違いない。

歳を取ると、スラスラと言葉が出てこないこともあつて、「簡にして要を得た」言葉遣いに異様に執着心が湧くのである。この言い方が頭に生まれたとき、俄然気に入つて、以来、いろいろ申すのがもどかしいときは、心を込めてこの一言を申し上げて済みます。済まさせていただくのである。

(二十) アンビバレンスの人

人間的に見ると、使徒パウロは実に気の毒である。要するに意に反して敵側陣営に寝返りを打たされて、その事で旧陣営から生涯仇と付け狙われたのである。

ユダヤ人はとりわけて、執念深いという定評がある。自他に将来のパリサイ派のリーダーとして許していたからこそ、率先してナザレ派撲滅に身を挺して働き、目立つ業績を上げ続けていたのである。人間の誰もが予期してなかった大逆転が生じて、全然正反対の方向へいきなり疾走を始めて、反対陣営の第一人者に相応しい華々しい業績をローマ国内の至る所に亘って上げ続け、ために前半生彼が属していた陣営の影が薄く小さく、みずぼらしくさえ見え出して、遂には自爆して破砕散乱への道を辿らせたのである。短期的には彼の期待をも打ち砕く結果となった。同胞へのアンビバレンス(愛憎同居の如きもの)は苦渋の酒の盃の澱(おり)として長く残り続けた。

同胞のためには呪われてもいい、とさえ言い切ったのである。

(二十一) 岡目放言

神様は、最高の教育者である。

ヤコブの十一番目の息子のヨセフが、十代後半から三十歳までの十数年間を、父の許で単なる羊飼として父の庇護の下で過ごしていたとしたら、とても後年のエジプトの宰相は務まらなかつたであらう。

なぜ耐えられないような境遇に追い込まれ、鍛えられて、練りに練られたのか。当の父親のヤコブを悲嘆のどん底に落としてまで、この十数年の訓練を施されたのか。父だけでなく、ヨセフの邪な兄達も金湊を搾り出すようにして打ち鍛える方法を取られたのか。

長い日と深い思慮と正確寸分狂いもない判断をもって、人を育て、経綸を行い、次なる段階へと持つていかれる手腕のほどは、到底人間の及ぶところではない。教育はベスタロツチに学べとか、エミールを書いたルソーに戻れとか、あたかも目くそ鼻くそに学べと称しているかの如くさえ、思えるほどである。

(二十二) (津波の)担い手

ローマ帝国版図内の伝道で、使徒パウロが何語でしゃべったか、著述者のルカははっきりとは書いていないが、ユダヤ人が主体の会堂では、おそらくヘブル語、それ以外の非ユダヤ人の場合は当時の国際語のギリシャ語であつただろうと推

定される。

もともとパウロの実家のあったキリキヤのタルソは、文明の十字路と言われるくらい東西南北の文明・文物・物資の交流交差する場所で、実家の生業が貿易通商の類で、裕福であったろうという背景は容易に想像できる。現在のトルコの地中海側の交通の要衝で、人も物も、頻繁に往来し、彼の視野が一ユダヤにとまらぬ広さを伺えるゆえんでもある。

生まれながらのローマ市民権の保持者と名乗った基盤は、タルソの生家にあった。神様の遠大なご計画は、エルサレムにしがみついたユダヤ教パリサイ派や千年来の古都を本拠とするナザレ派の長老達の思惑を遥かに超えて、このタルソ人の手で津波の如く、広がっていったのであった。



思い出すこと

長 田 正 幸（前田）

○ 私は昭和十二年、長崎県島原で七人兄弟の五番目（四男）として生まれた。

小学校四年（昭和二二年）の晩秋であった。台風で川に接している道路が崩れて、橋が孤立していた。川原から橋上へ、高さ三メートル以上ある石段が作られていた。

ある日、私が向こう側から橋上を経て、石段を二、三段降りかかった時に声がかかった。四、五十メートル先に居る一歳上の双子の従兄からであった。

「まっちゃん（私のこと）、遊ぼう！」。

「オオー」と答えた途端にバランスを失い、石ゴロゴロの川底へ転落した。

双子は慌てて、わが家に知らせに走ったらしい。長兄が駆けつけて、私を抱えて運んだようだ。詳しくは覚えていないが気を失い、時間が経って覚醒した。額を石に打ちつけていた。母は赤チンを塗り、ガーゼを当てた。病院へ行った覚えはない。

翌日現場に行ってみたら、おびただしい血の跡があった。身震いがした。それから一年間ほど、額に赤く丸い傷跡が残った。兄弟や従兄からは、「梅干」とか、「桃太郎」とか言つてからかわれた。

○ 小学校の高学年だつたと思う。小学校の傍の川を歩いてゐた。石伝いに渡ろうとして、足を滑らせた。石と石の間を勢いよく水が流れていて、その下は小さな滝壺になつてゐた。水の中で溺れて息苦しくなつた時、川底に足が着いた。そのまま跳ねるように浮かんで、浅瀬に上がった。ずぶ濡れになつて家に帰つた。

家の者は不在であつた。濡れた服を天日で乾かし、何事もなかつたように着てゐた。誰にもこの事は言わなかつた。

○ 小学校六年生であつたらうか、農耕馬の世話をするのが、私の日課であつた。冬期だつたと思う。しばらく馬を外に連れ出してゐなかつた。馬は小屋で荒れてゐた。

外へ出した途端に、馬が暴れ出して、持っていた手綱を放してしまつた。馬はピョンピョン跳ね、後脚の蹴り上げた蹄が、私の顔面すれすれまで来た。

冷や汗の出る思い出である。馬は走り去つて、川で水を飲

んでゐた。私は怒つて、馬面を手綱でピシャピシャ叩いた。

○ 中学一年の折、放課後のクラブ活動が終わつて、家路に着いた。四キロの道のりである。四、五人の集団であつた。二歳上の三兄も一緒だつた。私の頭上を馬が飛び越えて行つた。気が付いた時には、走り去つて行く馬の姿があつた。

兄は怒つたように、「わら(お前は)、何ばしよつとか」と言つた。私は耳が遠く、特に低音が苦手で、蹄の音が聞こえなかつたのだ。他の者は道の端に避けてゐた。私一人だけが、道の真ん中を悠々と歩いてゐたのである。

○ 以上の事は、七十歳になつた今も鮮明に覚えているが、この頃になつて不思議に思えてならない。何か、見えざる手によつて加護されてゐたように思うのである。

○ 先頃、洗礼式を挙げていただいた。その折、一、二歳の頃中耳炎に罹り、両方の鼓膜を失つたことを述べた。この難聴をずっと疎ましく思つてゐたのも、事実である。

この難聴は、私があぬぼれ強くならないように、人を侮ることのないようにという、神の計りごとであつたのかもしれないと、受洗後に思つたことである。

妻を天に送って

原 田 駒 一 郎 (前田)

「終りまであなたの道を行きなさい。

あなたは休みに入り、

定められた日の終りに立って、

あなたの分を受けるでしょう」(ダニエル十二・十三)

この御言は、その人の信仰の分に従って、天国で土地(神様の報償)を与えられるという意味ではないでしょうか。

妻は、昨年夏に駆け足で天国に召されて行きましたが、私共二人の信仰の歩み程度では、あまり良い土地は与えられず、今頃、妻は天国にあつて悔やむ事しきりでしょう。ただ弱い者のために死んでくださった主の十字架と憐れみに、寄りすがらるほかありません。

月日の経つのは早いもので、召されて半年になりました。二人で暮らしていた時は、家事は何でもできると自負していた私ですが、主婦(夫)業の奥の深さを知り、次第に重荷になつてきましたが、朝ごとに「神様、今日一日、成すべき事を教

え、導いてください」と祈って、日々を過ごさせていただいております。

昨年暮れに、NHKラジオの「我が家の今年のトップニュース」というテーマで、「お便り特集」の募集がありました。何となく書いてみたくなり、次のとおり稚拙な文章ですが、応募してみました。

我が家の今年のトップニュース

何と言つても、この夏、発病からわずか四時間で、五五年連れ添った妻とのあつけない別れでした。

教会での告別式で、皆さんが賛美してくださった讃美歌の歌声が、今も私の脳裏に残っています。

妻がこよなく愛した柴犬の「伊智(いち)君」、妻の上は何が起きたのか理解できず、門の外を通る女性(ひと)を見かけると、妻が帰ってきたのかと喜び声を上げて走って行きます。

今は、この「伊智君」と、一人で暮らしています。

この「お便り特集」の募集期間は一ヶ月で、全国から多数のメール、FAX、手紙が寄せられたようですが、私の「お便り」も採用された中にあり、十二月二十八日に放送されました。投稿した本人は聴いていませんが、放送を聞いてくださった

方々から、「放送を聞きましたよ」と、電話がありました。

妻は八幡電話局、香月郵便局、植木郵便局、池田小学校、北九州市教育文化事業団などの職歴があり、親しくしていた方も多く、召されて半年くらいまで遺影の前の花は絶えることはありませんでした。感謝です。

私も齢八十を超えました。生かされる残りの生涯がどれくらいか分かりませんが、要介護三程度の老犬「伊智君」の面倒を見つつ、主にお従いする日々を歩ませていただきたいと思っております。



自宅の祭壇と遺影

手術を決断して

貞 サユリ（前田）

「神のなされることは皆その時にならなって美しい。神はまた人の心に永遠を思う思いを授けられた。それでもなお、人は神のなされるわざを初めから終りまで見きわめることはできない」（伝道の書三・十一）

二〇〇七年十月、近くの古川整形外科に受診しました。レントゲンを撮った後、先生いわく、「どうしても早く来んかったね」と。

春頃から、左足が変な具合とは思っていました。スピナに買い物に行く途中、歩いていて急に足が止まり、左足が前に出ないのです。公園の傍でした。人が見ていないか、辺りをキョロキョロ見回しましたが、幸い誰もいませんでした。公園の網に手を置き、お祈りしました。一分位経った頃、左足が前に出て、また歩き出しました。こんな事があったのです。

またある日、井筒屋での事です。買い物を終え、レジを出

た時、また足が動かなくなつたのです。「ああ、どうしよう」。周りには大勢の人がいる。右足を出したまま全く動かず、私は商品を手に取り、眺めたり、探したり、周りの人に気づかれないように苦労しました。何度か左足を出そうとしても、動かないのです。心の中で、必死でお祈りしました。しばらくして、やっと左足が前に出ました。「神様、ありがとうございます」と、感謝を捧げました。

こんな事が何度か続き、古川先生から手術を勧められました。私は、手術はしたくないと思ひ続け、何とか手術から免れたい気持ち一杯でした。「このまま放っておいたら、動けなくなるよ」と先生に言われ、迷いに迷い、どうしてよいか決断ができなかつたのです。

十二月に、娘から電話がありました。佐賀医科大学に股関節手術に優れた医師がいるとの知らせでした。娘が暮れに里帰りをし、十二月二十九日(土)、福岡の記念病院へ受診に出かけました。佐賀医科大学の医師は、週二回その病院に来て診察と手術を行っているからです。

私はその先生といろいろ話しているうちに、手術を決断しました。優秀な医師にめぐり合つて感謝でした。私も歳を取っているし、負担も軽くて済むだろうとの、娘の配慮でした。

手術日が三月二六日(水)と定められました。手術日は決まりましたが、毎日が不安続きでした。自己血採血の同意書を書き、四〇〇CC採血が定まりました。ただ不安がよぎるばかりです。でもひたすら祈り、牧師先生をはじめ、多くの方の祈りに支えられた事は、何にも勝り、今思いを新たにし、「感謝」の一言に尽き、嬉しさがこみ上げてきます。

二月中旬、採血のために福岡へ出かけました。娘の伴枝が前の晩に泊まってくれました。その朝、ちよつと風邪気味で三七度の微熱がありました。伴枝に「ちよつと熱があるんよ」と言うと、「でも、行く先は病院だし、適当に処置してくれるよ」と言うので、それもそうだと思つて出かけました。

病院で診察を受けた時に、状況を話しました。採血は身体がベストの状態でないといふと採れないとの事でした。医師いわく、「採らなくてもいいでしょう。佐賀医科大学では、採血しないから」。私はあれほど採血する事を心配していたのに、朝の風邪の状態が一変して採らない事になり、感謝でいっぱいでした。神様のなさる事の素晴らしさを、しみじみ感じました。

三月に入り、その頃から不思議に全く不安が取り除かれ、足に違和感がありました。手術の日を待ち望みました。

三月第四日曜日は、礼拝のオルガン当番でした。私は奏楽

の曲を毎回考え、お祈りしていますが、その時ふと、ある曲が思い浮かびました。そしていつの間にか、「いと静けき港に着き、我は今安らう。救い主イエスの手にある、身はいとも安し」と口ずさんでいました。急いで聖歌四七二番を開いて、びっくりしました。下の方の見出しに、「平安」と書かれました。アツ、これにしよう。三月第四週の日曜日、この曲を弾かせていただき、明日二四日に、入院となったわけです。

話は前後しますが、手術が定まった日から、いろいろ考えていました。私は以前から狭心症の薬を飲んでいました。時々胸痛があり、不整脈や血圧上昇、普段からいろいろな症状があります。案外気にならないのです。神様のなさる事は、「善にして善をなし給う方」、何かが起こった時に、それを神の御心と信じ、素直に全てを委ねることを教えられました。

手術の途中で、もしもの(死)……と考えた事もあります。出血多量、もしくは心臓停止……馬鹿な事を考えていました。ザンバラ髪で棺桶に入りたくないのです、入院の数日前に美容院へ行き、髪を染め、カットしてもらいました。今考えると、自分の行動が馬鹿げていて、つい、クスツと笑いたくなるのです。

三月二四日(月)、当日朝八時過ぎに、家を出ました。金生

先生にお祈りしていただき、車で出発しました。

入院して、いろいろ検査がありました。胸部レントゲンや心電図など。その時、心臓を特に念入りに診ておられたので、ちよつと不安がよぎりました。しかし、毎日お祈りしながら、また榎本保郎先生の「二日一章」の御言を通しての「デボーション」はいつも力になり、勇気を与えてくれます。

「神の言は生きていて、力があり、もろ刃のつるぎよりも鋭くて、精神と靈魂と、関節と骨髓とを切り離すまでに刺しておして、心の思いと志とを見分けることができる」(ヘブル四・十二)。

手術当日(二六日)は、娘二人と妹が傍の控え室で待つてくれました。麻酔から手術時間、麻酔が覚めるまでの時間を、あらかじめ医師より知らされていたので、手術にかかる時間を確認していました。時計を見て、手術室に入りましたが、その内に眠りに入り、周りの何人かの人が右往左往していましたが、その内に眠りに入り、後は全く覚えていません。

手術室から出ると、待つてくれていた三人の顔が見えました。「What Time Is It Now?」。妹が時間を教えてくれました。頭の中で時間通りだなあと、医師の腕のすごさに感動しました。

術後、水曜日と土曜日には必ずおいでくださり、笑顔で「どうですか」と話しかけてくださる。なかなかの人物で、こんなすばらしい先生に会えたのも、神様の導きであつたことを、唯々感謝でいっぱいです。何もかも主が備えてくださり、満たし、祝してくださったことを、心から感謝しています。

あれから三ヶ月過ぎました。手術した当時は、ポルトが骨の代用品なので、左足が重く感じましたが、段々慣れてきました。これからも残された人生を、主が喜び給う毎日であるよう、願つてやみません。



生活雑感

首 藤 正 (前田)

(一) 馬耳

降下中の旅客機の窓から見下ろすと、地上の人も車もまるで豆粒で、蟻の往来と大差ない。あの一つひとつに、それぞれの人生が詰まっているとはとても思えない。足のひと踏みで、あえなく擦り潰されてしまふそうだ。「虫に等しいヤコブよ」とはこの事か、と思つてしまふ。

実際、空から見下ろすと、人間なんぞ頭という点が止まったり移動したりしているようなもので、容積はないに等しい。バイクを前後から眺めると、縦一線に見えるので、見つけにくいのだ。水平方向から見ると、その横幅縦幅もあつて、大したものに見えるのかも知れないけれど、真上から見下ろせば点の存在でしかない。

人は横から見、神様は上からご覧になつている。その視点の違いは大きい。横並びだと背比べすることもできなくはないが、天と地とでは比べようもない。人間の目は左右には動きやすいが、上向きには意識しないと向きにくいし、うなじ

を屈折させて仰ぐという二重の動作を要求されるところがある。放つと思ったら上は見ないで、水平か、どうかすると頭の重さで自然にうつむくようにできているようで、心に信じて、意思を行使して上を仰ぐという動作は、必然的に肉体の仕組みと重力に逆らうものがある。

屈折があつてしよぼくれている孫を見ると、つい顎の下に手を当てて、グイと顔を起こし、「どうしたのかね、元氣を出しなさい」と声をかけてやりたくなるが、神様も人に対して、同じようなものかもしれない。うつむいたり、あつちこつちをキョロキョロしないで、私を見なさい、どうしたのか、訳を言いなさい、ほんとの助け主である私に託してみなさい、そうしたら助けてあげる、と口が酸っぱくなるほど呼びかけてくださっているのに、馬耳東風に「馬の耳に念仏」じゃ情けなく、第一、神、人共に喜ばませんや。

(II) The Puzzled Word (困った言葉)

讚美歌二八五番の四番は、「この世を主に捧げまつり、神の国となすためには」で始まる。長い間「この世」が何を指すのか、はつきりしなかった。この地上の世界や世の中には、あまりに広過ぎて手に余るし、漠然の感じを免れなかった。歌いながらじれったい思いが、いつも脳裏をかすめていた。

ところがある時、ふっと、これは何のことはない、自分の地上の人生の全てを指すのだと理解がいき、多年のまだるっこさが氷解してしまった。残る人生の全てを上げて主に捧げ奉るということなら、自分以外の誰彼に働きかける余地も必要もないし、自分一個の決心と意思次第である。

後は祈りの継続により、約束された上よりの助けで十分達成できる希望が持てる。

「神はひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さいました」の中でも使われる「この世」という言葉は、意味が多岐で深長で、チョットばかり困る言葉ではある。

(III) The Endless Exercise (終りなき訓練)

連れ合いに対して「こうしなさい」と言う時、「それよりもこうしましょうか」と返されると、思わずカーツとなって、「言った通りにせよ」と怒鳴ることがある。

そっちのやり方じゃ拙いと先刻わかつてるから言うてるのに、さかしらに提言こいてと、むかつ腹を立てるのである。

後で考えれば、これこれの理由でそれよりか、こっちの方がうまくいくんだと説明すれば済んだものをと、おのが短気を恥ずるのであるが、ひるがえって、これこれせよと神様の御霊からの指示が聞こえているのに、さかしら氣に、いやこ

つちで行きますと己の都合を優先させることがこれまでに何度もあつて、そういう時、神様が果たして四の五の言わずに「言うとおりにせよ」とこつぴどくお叱りになるかというところ、まずそんなことはない。すつと、黙つてあつちへ行つてしまわれる感じがする。どうも従うということは、終りなき課題のようだ。

(四) 雷雨

一天にわかには掻き曇り、雷鳴とどろき、鹽(たらい)を傾けたように降り注ぐ雨脚を眺めていると、尻をからけて突つ走つて行く預言者の後姿が垣間見えて、心中きつと大喜びの足の軽さが偲ばれて、つい伴奏してみたくなる。

実際は付いて行くどころか、たちまち引き離され、あえなくどこぞの木の下に身を寄せて、頭からつま先までぐつしよりに濡れて、ブルブルツと青い唇を震わせて、雨上がりを乞い願う不様のわが姿が思い浮かび、苦笑が起こる。

夏の雨は急に來て、さつと去る。

それに反して、夏風邪はスルリと入り込んで、長逗留する、招かざる客。とても一椀の葉を持つて饗応する珍客に對するような訳には行かず、ぬるま茶で早々にお引取りをと、暗に催促するのが相応のところ。

雨上がり、残人の未練めいた雷鳴の遠ざかりは、あたかも負け惜しみのサタンの念押しにも似て、折からの涼風に御霊の訪れを覚えるのである。

(五) Crack (パチン)

夕方、外へ出ると、待ち構えていたように蚊に飛び掛られる。気配ですかさずパチンと叩く。見事、前膊(腕)部の中程で潰れたへばりつきの姿。やぶ蚊の細い足と胸。多分、血の吸い付きのはじめか、これからという出鼻をやられたのだ。一卷の終り。

ポウフラから成虫に育ち、やつと一人前の母親として子孫を残す営みの必要から人肌に取り付いた途端、死に追いやられたという結末。これが昔の座禪修行中のお坊さんだったら、吸わせ放題に腹一杯吸わせてくれたのかもしれない。

ひよつとすると、中世のあの生き物と大の仲良しだった聖フランシスさんも、よしよしお好きだけお食べ、と思いきり吸わせてやったかもしれない。

何せ世界で二千種もあるという蚊族は、古今東西至る所に出没していたでしょうから、そういえば、お馴染みの聖書にご同類は出てくるかしら。モーセの奇跡に登場のぶよは、ご親類(はえ目)と言つていいの知らん。

(六) トレニング?

日中預かる三人の幼い孫達は、人使いが荒い。七歳に六歳に四歳。いっぱしの口をきく。それでいて自分でできない事はためらわず、じじばばに頼む。それもしてくれるのが当然のような口調。これしれ、あれして、と入れ替わり立ち代わりして、用事を持つてくる。

家内はさすが、炊事、洗濯、掃除、庭仕事が目白押し状態だから、「ちよつと待つて」が口癖。そこへくると、指しあたっての緊急の用件を持ち合わせないじいは、物理的にはすぐ応じられると見てか、じいで用の足りそうな事は迷わず、じいに声を掛ける。

とはいっても、二回に二回は呼びつけで、「じいちゃん来て、早く、早く」と急ぎ立てるから、何事かならんと行つて見ると、これして、あれしてと、便利使いする。それを見てると、神様を何かというとすぐ呼び立てするおのが姿を見るようでもあり、逆に神様に呼び立てられたら、すぐすつと飛んで行く訓練のようでもある、と自分に言い聞かせている。前向きに。

(七) おもいつき

腹式呼吸の二つは、ひとえにかかつて、呼にある。すなわ

ち、息をまずトコトン吐くことで成立する。腹の底から吐いてしまえば、どうしなくても空気は入ってくる。ピストン運動と同じ。存分に入ってきたのを、また返してやればよい。腹の底からゆつくりと残らず吐いてやる。吐き切ってしまうと、反射的に空気は入ってくる。それをちよつと息を止めて、また存分に吐き出してゆく。九割方吐く方へ注意を向ければ、全てうまく行く。きざに言うると、「与えるものは幸いなりに」を地で行く感じ。

これを応用してというか、延長線上に神様への向きようもある、と感ずる。つまり、神様の前に残らず心を注ぎ出して、尽くしてしまつと、後は神様の領分で、ドウツと入ってくる。それをまたお返しをする。みーんなあなたのものですと、捧げ返す。これの繰り返しのような気がするのだが、どんなものだろうか。

(八) 都合

蚊や蠅や蜂が家の中に入ってくると、年端の行かぬ幼い孫達が、「おじいちゃん、やつつけてエ」と言ってくる。

「目の好いお前らがやつつける」と押し返すが、「いやだ、おじいちゃん、やつてエ」と押し返してくる。

しようがねえなあと腰を上げて、何とか叩き潰しにかかる。

大事な預かり者の頼みとあつては、「生類憐みの令」など構つてはおれぬ。虫共から子供を守るのが先決とばかり、思い切りバシツとやる。今の今まで飛び回つていた細い脚も羽もこそつとも動かぬ死に体と化し、一巻の終り。何とも短い一生。爺の甲斐のない思惑をよそに、「やったあ」と叫ぶ孫の声を背後に、紙にくるんで捨てに行く。「神様、申し訳ありません。雀同様お忘れでないものをこんな目に会わせて」という眩きも我ながら虚ろ。

「来るな、来るな。人間様の占有空間に侵犯するなつて」とは言つても、あれらはあれらの、都合もあろうしなあ。

(九) 時代遅れか

車を走らせていると、時々見かけなのが、道端のトラブル停車中の車である。傍らに運転手と同乗者が突っ立っている。何をしてもなく棒立ち状態。一瞬聞いてみたい気も起こるが、やっぱり止めとこうと思ひ直し、そのまま走り続ける。絶対手持ちの携帯電話で救護依頼済みで、余計なお世話なのである。

今日の車社会の公道で、「よきサマリヤ人」の出番など時代遅れもいいとこで、少なくとも車が列を成して突っ走っている通り道では、まず当てはまらないと自分に言い聞かす。J

A Fがそのためにあるし、せいぜい「あの者達が必要な助けを速やかに与えられますように」と、胸中に祈るだけがいいところ。米国あたりの見渡す限り人も家もない道で、停車中のそばにうっかり寄りでもしようものなら、いきなり「ホールドアップ」を食らいかねない由。

おお桑原、桑原。親切心が仇になる世の中は、今に始まつたことではないが、判断はひたすら御霊にお任せして、是非々で行くしかなさそうな。

(十) 寸感

不安は不信と友達のようなうだ。反対に、平安は信頼と道連れ。小さい子供を見てみると、無心の信頼と安心が一つのものといふことが良く分かる。子供といえども、いつも大人を信頼しているとは限らない。疑うと言つては語弊があるが、大人を信じ切れない心だと、その顔は何というか、ベそをかいた表情になつてゐる。子供は正直だから、内心の状態が直に顔に表れるが、本心と建前の使い分けが日常化した大人は、目の色を除いて、なかなか本心を覗かせない。

そうは言つても、背中の印象は、「頭隠して、尻隠さず」の胸底の投影スクリーンとなつている場合もあるにはあるし、波長の捉えにくい心の電波を四散させているとも考えられて、

キヤッチ能力の抜群の人には、多分見え見えなのかもしれない。目は心の窓とはよく言ったもので、本当に心に平安を宿している人は、はつきりと目に表れていて、とりわけて幼児に懐かれるものだ。

(十一) なによりも

半年もすれば、人間の体の細胞は全部入れ替わるといふ。脳味噌も細胞レベルでは総入れ替えだとすると、中味の情報の伝承、つまりコピーの劣化なしの移動は、どのようにして行われるのか。これが今に始まったことではなくて、技術革新も何もない大昔から着々と行われていたという生命の神秘は、この生命科学の異常に発達した今日といえども、解明の緒にも付いてないのが現状なのであろう。「天に座する者、笑い給わん」である。

善悪を知る木の実を取って食った者が、知るどころか弁ええなく悪に走るようになった有り様を、何と見るか。「知行合一」なんぞ、空念仏の最たるもの。それを言いたいのなら、「知行合一」と言つて貰いたいね。

信じて行ふ。信じればこそ、行いも伴うというヤツだ。信じなければ、何事も始まらないし、必要なものは何も集まつてこない。助けも力も望みも喜びも、そして何よりも平安が。

(十二) a. Snap (スナップ)

長田兄の洗礼式参列のため、初めて大濠公園教会を訪れた。一見シックな味の深いたたずまいに打たれた。大正の印象である。と同時に、ヨーロッパの地方の教会に來た感じでもある。窓の形に特徴があり、何とも言えぬ懐かしさを覚えた。一度も訪れたことのない親の実家へ、やっとやってきた安堵のようなものが湧く。先の牧師先生が育つた母教会であつてみれば、ちつとも不思議ではなかつた(戦災後の移転ではあるが)。

玄関に入り、ロビーの壁の絵を眺めていると、和義先生が出て來られ、会堂へ招じ入れられた。落ち着いた会堂の雰囲気、拝見する先生が違つた先生に見えてしようがない。これが前田教会で見ると同じ先生なのかねえ。似てはいるが、別人のようだ。

やがて式が始まると、前に立たれた先生のお口が開く。同じ声であつた。違和感が消える。次第に取り巻く空氣が身に馴染んで行くのを、覚えるのだった。

(十三) 推察

小さい孫連れて家近くを散歩していると、顔見知りの犬連

れ散歩者達によく逢う。

子供がいなかったり、いても巢立つて夫婦きりとか、独り身だとか、ともかくも身近に子供のいない人が犬を友としている風情なのである。見た限りでは、飼い主然としているけれど、胸中の一抹の空虚を飼犬で満たされたい欲求の影が、透けて見える気がするのである。

はつきり番犬ですと言う人もあるが、同行の様子を見てると、どうもそればかりとは思えぬ節があるのである。中には人目も憚らず、犬に語りかけている老人もいるし、勿論、話しかけられた犬のほう言葉で答えられるわけがなく、せいぜいボディランゲージで反応を示すのみだろう。

交流交情の中味は当事者の独占であつて、部外者の計り知るところではないが、それに比べると、四歳の孫娘が少ない語彙を駆使して祖母と会話する様を眺めるにつけ、神様の人への交わりの期待のほどが偲ばれるのである。

(十四) 絶妙

人の顔くらい、複雑なものはない。複層的、多機能的、精妙的、魅力的で、いくら見てもこれほど見飽きないものは、ちょっと見当たらない。残念なことに、自分の顔だけは一生かかっても、直接に見ることはできないが、人の顔なら、べ

ールで覆われた人は別だが、いくらでも見られるし、見ることで用を足しているわけだから、まず観察に事欠かない。

第一に気づくのは、何と言つても情報の発信機能の集中箇所だということである。見る、聞く、嗅ぐ、はなす、全てここで行われる。さらに生命維持の先端機能を負担して、食べる、飲む、吸う、吐くは、全部ここ。この顔のすぐ裏では、考える、憶える、内臓の働きの統括、運動神経の中枢を控えているし、造作配置の独特化で個別認識を可能ならしめて、顔を見れば誰であるか、さらに個性の特徴を投射反映さすスクリーンの役をも果たす。これを造化の妙と言わずして何と言おうか。

(十五) 荒野

無力を感ずるのは、蠅叩きを持つて追い掛け回し、ゴキブリをバシツとやって、平たく叩きのめされた無残な姿を見た時、この虫けらひとつ作り出すことはできないのに、やれる事と言つたら、この精妙な生き物を粉々に打ち砕くことだけかと、わが身が顧みられて無然とするのである。同じことは、食卓上を飛び回る憎つくく、うるさい蠅の油断を見すまして、首尾よく仕留めた後にも起こる。

そう言えば、ちょっと待て、蠅が手を摺る、足を摺ると、

目を凝らして造化の妙を、この小さき生き物の動きのうちに認めて、図体の大小に違いはあつても命という共通物への共鳴を覚えて、十七文字に込めた俳句作家もあつた。

殺すこと、命を奪うことはできても、生かすこと、命を授けることの無能は、かえつて人をいらだたせ、ますます殺傷に向かわせているのかもしれない。内なる荒蕪地か。

(十六) ぶえんりよ

私は、しょつちゅう祈っている。ただし、百回に九九回までは胸の内だ。

周りは誰も祈りを信じない人ばかり。まるで、四面楚歌の中を、ひとり佇んでいるみたいだけど、たまには声を出して祈ろうとすると、舌は下顎にくっついて、うまく回らない。しどろもどろ。頭の中と舌先と切れ切れとなるが、心腸腎腹を探ってくださいるとのお言葉だけを頼りに、胸の中は声ならぬ声のこだませぬ時はない。

私は祈る。考える時も祈る。祈らなかつた後、すぐ祈る。取り返しのつく時も、つかぬ時も、ともかく祈る。

していいのか、よくないのか、迷う時も祈る。よくはないとハッキリせぬ時は、たとい途中でも、する気をなくすよう、祈る。虫が好すぎると言われそうでも、かまわず祈る。どう

せ右も左も分かつていないのだから、よくご存知の方にためらわずに祈る。

(十七) 一 Weep (独泣)

借りの人生、これが実感である。

貸し付けられてばかりで、返す当ても力もないまま、借りが殖えて行く。恩のある人は、親も先生も上司も去り、これらの人を通してくださった恵みの大元の神様はあまりに巨大過ぎて、途方にくれるのである。

価値がないのに、価値ある者の如く取り扱われて、虚は虚でしかないのに、虚に一体何ができようか。空しくなる以外、思い当たらないのである。

諺に言う、「一犬、虚に吠ゆれば、万犬、実を伝ふ」と。

そうであれば、おのれの虚であることを知る以上は、吠えることもできない。泣くのみである。泣くのなら、誰の迷惑にもならぬかもしれない。人知れず泣いて、恩を偲んで、秘かにわが耳に語り聞かすだけなら、人は放っておいてくれる。変な奴はと思つても、やめろとは言うまい。

私は泣く。赤ん坊に還つて、思い切り泣く。

川柳

原 田 駒 一 郎 (前田)

どちらかと言うと、堅い文章の「ぶどうの木」、信仰からは少し離れますが、川柳で一服するのもおつなものと、新聞、テレビ、ラジオなどの入選作品の中から、面白そうなものを選んで掲載してみました。実は、私の入選作も、どこかにあります。さて、どれでしょう。

- ◎ ゴキブリを 叩き殺して わびる妻
- ◎ 買い物 を メモした紙が 留守番し
- ◎ そう言えば、話題も出ない 前総理
- ◎ 堂々と 日付偽装の 賀状書く
- ◎ 消しゴムが 欲しい人生 振り返り
- ◎ 賞味期限 切れたら夫 ポチの順
- ◎ 近頃は 政治家並みの 物忘れ
- ◎ 七草を 食べていつも 医者通い
- ◎ 評論家 事件の時は 何してた

- ◎ プロ野球 昔は輸入 いま輸出
- ◎ 新聞は テレビ欄から 見る老後
- ◎ わが亭主 優しそうと 人は言う
- ◎ 出世した 奴が出たがる クラス会
- ◎ 給料を 詳しく教え 恋終る
- ◎ 不眠症 座ってみたい 議員席
- ◎ 要領が 買われ人柄 見捨てられ
- ◎ どの神に 祈れば平和が 来るのやら
- ◎ 押し売りに 防犯カメラ 買わされる
- ◎ こっそりと 字引を引いてる 生き字引
- ◎ 老いを看て すぐ老いが来る 世の無情
- ◎ 事件事故 載らない昔 なつかしい
- ◎ 燃料費 上がって我が家は ネコを飼い
- ◎ 国産と 表示はあるが どの国
- ◎ 人生の 卒業と言い 友が逝く
- ◎ 参議院 早い話が 風呂のふた
- ◎ 歩くほか 用事なさそうな 歩き方
- ◎ スピーチじゃ 優しい舌の 嫁だった

- ◎ 親預け 子も預けて 嫁ひる寝
- ◎ バーゲンで 野生に戻る 淑女達
- ◎ 書いてある 産地信じず ウナギ食う
- ◎ 逆らわず いつもニコニコ 従わず
- ◎ 粗大ゴミ 毎朝出すのに 夜もどる
- ◎ この秋を 越えて残るは あといくつ
- ◎ 親見れば ボクの将来 くれたもの
- ◎ 言い出せば 役が来そうで 口つぐむ
- ◎ 駆け引きで 暮しを立てる 北の国(北朝鮮)
- ◎ どうします 賞味期限と もつたいない
- ◎ あの人は 口は出すが 金出さず
- ◎ 幕の内 幕下ながら 食べている
- ◎ コタツから 返事はしても 立てぬ腰
- ◎ 仲人が 十人並みと 言う娘
- ◎ 名刺より 葉見せ合う 同期会
- ◎ 釣銭も 多い時は 黙ってる
- ◎ 食間を 食事の途中と 勘違い
- ◎ いつまでも 若くないと 膝が知る

- ◎ パソコンは 何度聞いても 怒られず
- ◎ 主婦と言う 店に年中 休みなく
- ◎ わが意見 取るに足らぬと 妻の声
- ◎ ふつつかな 嫁が今では 天下取り
- ◎ あなたから 欠点取ったら 何のこる
- ◎ 命短し 旅せよ 総理
- ◎ 預かった 孫から家の 秘密知る
- ◎ 「どちらさん」 言うたび母を なでてやり
- ◎ あの方も カツラと知り 友となり
- ◎ 減量が 成功したら シワだらけ
- ◎ 何もかも 去ってそばには ネコがいる
- ◎ ボウフラや 蚊になるまでの 浮き沈み
 (未信者が信者になるまでを川柳にすると、こんな表現
 になるそうです。)

聖書の世界を訪ねて

正 野 眞 宏 (前田)

私は退職以来、神様が造られたこの地球を少しでも知りた
いという思いから、海外旅行をさせていたが、い
つかは聖地旅行を、という思いを抱き続けていた。ところが
思わぬ形で実現することとなった。岡山の弟から、教団創立
六十周年記念行事で聖地旅行が計画されているので、一緒に
行かないかと誘いを受けたのである。これまでのツアーと異
なり、信徒だけの聖書中心のツアー。私は一も二もなく快諾
した。聖書の世界を目にすることができ、この機会が与え
られた事を心から感謝し、期待に胸を膨らませたのである。

ガイドをしてくださった柿内先生の口から、次々と聖書の
地名が出、関連の箇所が朗読されるたびに、聖書の世界が目
の前に広がってくるので、私の心はワクワクして聞き入って
いた。そして、ここに立たなければ理解できなかった御言の
意味が開かれ、聖書が実に正確に描写していることが分かっ
た。これだけでも、どんなに感謝してよいか分からない。

今回の聖地旅行で最も印象に残ったのは、ネゲブ砂漠であ
る。緑豊かな日本では経験できない、乾燥し切った荒野に立
った時、良くぞイスラエルの民はこの中を四十年も旅をした
ものだと、その厳しさを思わざるを得なかった。

昼は灼熱の太陽に照らされ、夜は寒さに凍える世界。心を
和ませる緑はなく、水を得られない事が命を脅かす。そこは
何の希望も慰めもない、死と隣り合わせの世界である。

私はイスラエルの民が、食物がない、水がないと呟いたこ
とが、無理からぬ事だと思った。もし私がそこに居たとした
ら、間違いなく一緒にあってモーセを責めただろう。なぜ神
様はこんなに厳しい中を通されたのだろう。エジプトからカ
ナンの地まで海岸線を通れば、一ヶ月もかからぬ距離である。
神様は民を霊的カナンの地に導くために信仰を試み、聖別し
ようとなされたことは理解できるが、それにしても厳し過ぎ
はしないか、とイスラエルの民に同情したくなった。

ところが柿内先生から、神様が昼は雲の柱、夜は火の柱を
もって導かれたのは、道しるべという事だけでなく、昼は雲
の柱をもって日陰を造り、夜は火の柱を立てて民を暖め、さ
らに夜の猛禽やサソリなどの襲来から守るためだったと聞か
され、私の認識は一変した。そうなのだ、神様は荒野の中を
通されたが、その間、マナやウズラを降らせ、岩を割って水

を与えて命を養い、「この四十年の間、あなたの着物は擦り切れず、あなたの足は腫れなかった」(申命記八・四)。一切の必要と健康管理をしてください、瞳を守るようにして、愛をもつて守り導かれたのである。今も変わらない神は、私に対しても同じであることを思った時、胸の内が熱くなった。

私達が宿泊したネゲブ砂漠の真ん中にあるミツペラモンから四十キロほど西にカデシバルネアがあると聞かされた。そこからイサクも寄宿したベエルシバまで直線距離で七十キロ程度しかない。まさに目と鼻の先まで来ておりながら、不信仰のゆえに引き返し、四十年の荒野の生活を強いられて死に絶えた、運命の分かれ目となった地である。イスラエルの民は、これほど神様から懇ろな取り扱いを受けておりながら、さらに神様の力と奇跡を見せていただきながら、なぜ不信仰を起したのだろうか。肉についた者の悲しい性であろうが、本人達だけでなく、懇ろに導かれた神様の無念さを思わざるを得ない。同時に、彼らが私達の鏡であることを思う時、厳粛な思いがする。だからこそ十字架が立てられ、その贖いのゆえに、憚ることなく恵みの御座、霊的カナンの地に導いていただける幸いを感謝するのである。

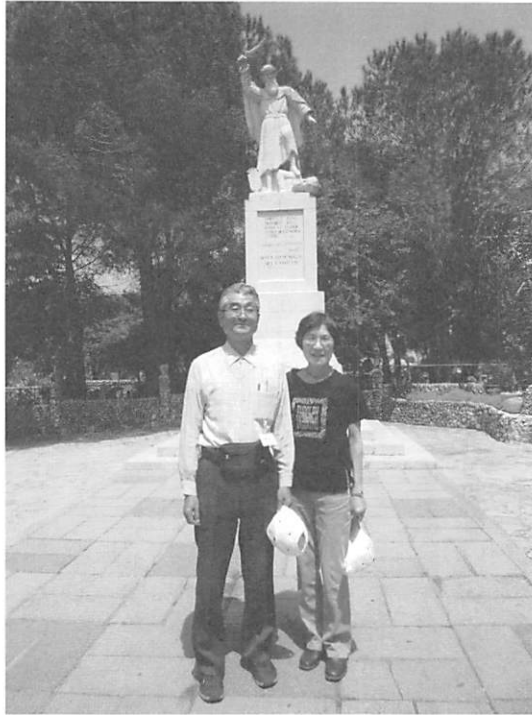
この事に関連してもう一つ教えられた事は、私達はネゲブ砂漠からモーセが律法を授かったシナイ山へ行き、そこから

北上してイエス様が活動されたガリラヤへ行ったが、そこで景色が一変する。厳しく不毛の砂漠から緑豊かな地へと変わったのである。それは、砂漠は律法(モーセ)の世界、ガリラヤの地は福音(イエス様)そのものに見え、イエス様が砂漠ではなく、ガリラヤから出られた事に深い意味があると思った。

そして両者が相對したのがエルサレムであり、十字架である。イエス様が死の中から甦られて勝利された事により、今はイエス様による福音の時代となり、私達は律法から解放されて、父と蜜の流れる霊的なカナンの地に入ることができるようになった。そのように思えて、主の十字架を崇めた。

そういう意味で、主が私達の罪を担って歩まれたゴルゴダへの道、すなわちヴィアドローサは、特別な思いを持って歩ませていただいた。その道は思ったよりも狭かった。しかも、今も同じ市場の中である。それは見せしめのための市中引き回しの刑であった。道々で罵詈雑言を浴びせられたであろう。頭には茨の冠をかぶせられ、鞭打たれた傷の痛みと出血は極端に体力を消耗させた。十字架の重荷に耐えかねて度々倒れられ、その度に兵士の鞭が飛んだのだ。私はできるだけこの時のイエス様のご心情に近づきたいと思ったが、できなかつた。私は何も持たず、気楽な思いで歩いているのである。御霊によって教えていただくほかないと思った。

この度の聖地旅行を通して信仰的にも多く教えられ、また主にある兄弟姉妹との交わりも素晴らしいものでした。この機会を与えてくださった主と皆様に感謝しています。



カルメル山頂のエリヤ像の前で

イスラエル旅行記

正野 百合子（前田）

海外旅行に行くようになって十年。いつかイスラエルに行けたらば……と思っていました。このたび図らずも、岡山の弟からお誘いを受けましたが、旅程が十二日間と長く、私は体力的に自信がありませんでしたが、主人が喜んで行こうと言いますし、祈って参加させていただくことにしました。

今回の旅は、弟夫婦のほかは他教会のお会いしたことのない方ばかりでしたが、皆さんクリスチャンということで、すぐ打ち解けて、安心して楽しい旅ができました。

何より嬉しかった事は、毎日皆さんと一緒にバスの中で賛美し、祈り、聖書を読んだことです。また、長いこと聖書を読んできましたが、実際にその場所に行つて見ることで、悟らせていただくことが多くありました。

ネゲブ砂漠の荒野の旅は、車で行っても遠く、草木の生えていない乾燥した所を、イスラエルの民はよく徒歩で、しかも多人数で行けたなあと思いました。そこには神様の計り知

れない配慮があつたことを教えられました。(夜は火の柱で暖かさや獣からの害から守り、昼は雲の柱で太陽の暑さから守り、食料のマナとうずらを与えられ、衣は古びず、足も腫れなかつたのです。)

また、荒野に建てられた原寸大の幕屋を見て、退屈だった聖書(レビ記など)の箇所が興味深く読めるようになりました。

世界に一つしかない塩の海(海拔マイナス四〇〇メートル)は出口のない湖ですから、水がよどんでいるのではないかと思っていました。透き通つてとてもきれいです。浅瀬には塩の高濃度でできた結晶が、金平糖のような形で数限りなくあり、浮遊体験もでき、貴重な体験でした。

イエス様が伝道されたガリラヤ、カペナウム、ピリポ・カイザリヤなど、地理的な事も分かせていただき、その所でなされた業や御言を思い起こすことができ、聖書が身近に感じられるようになりました。

テベリヤ湖では船上礼拝が行われました。御在世当時の様子を偲ぶことができ、最高の日曜礼拝をこの地で守ることができ、感謝しております。

エルサレムでは、オリブ山から城壁で囲まれた旧市街地に入城し、十字架の道を辿らせていただき、主の十字架の道の苦しみがいかに大変な事だったかを、改めて思い知らされ

ました。

旅が進むにつれ、日増しに健康が支えられ、他の教会の方々ともお交わりをさせていただいて、信仰生涯のよき糧となりました。

教会では写真を見ながら、旅の思い出を語らせていただき、幸いな時を持たせていただいております。ご指導くださった先生方、参加された皆様方に心から感謝を申し上げます。



テベリヤ湖の船上にて

見えざる御手に導かれて

金 生 栄 子（前田）

「わが神、主よ、わたしは心をつくしてあなたに感謝し、とこしえに、み名をあげめるでしょう。わたしに示されたあなたのいつくしみは大きく、わが魂を陰府（よみ）の深い所から助け出されたからです」（詩篇八六・十二〜十三）

ご真実な主の御名を崇めます。

結婚を通して前田教会に導かれて早八年。この数ヶ月、デイポーションの中で繰り返し心に迫ってくるのが、この冒頭の御言です。

私のような取るに足らない無きに等しい者をも、生まれてから（というよりも母の胎内にいる時から）今日まで、常にねんごろに顧み、支え、持ち運んで下さいました神様の大きな御愛と限りない恵みを思うと、正に、「わたしに示されたあなたのいつくしみは大きく」と、ただただ御名を崇め、感謝と賛美の思いで一杯になります。

「主は言われる、『あなたがたはわが証人、わたしが選んだ

わがしもべである』（イザヤ四三・十）。

「その証人を出して、おのれの正しい事を証明させ、それを聞いて『これは真実だ』と言わせよ」（イザヤ四三・九）。

実は、二〇〇七年の新年聖会で、これらの御言をいただき、「わたしに示された主のいつくしみ」を証しするように、との神様からの迫りがありました。この「ぶどうの木」に投稿したいという願いがその時から起されていましたが、なかなか書き始めることができませんでした。結婚後、かなりの筆無精になっている私がこの証を無事書き終えられるならば、それは全く主の御業だと言わざるを得ません。

さて、私のこれまでの歩んできた道を振り返ってみますと、それはただただ創造主なる神様の見えざる御手に導かれてきた生涯であると、はつきり告白することができます。

【生い立ち】

私は一九六九（昭和四四年）、滋賀県近江八幡市で開拓伝道をしていた牧師である両親の下に、八人兄弟の六番目三女として生まれました。

「栄子」という名前は、第一コリント六章二十節「あなたがたは、代価を払って買いとられたのだ。それだから、自分からだをもつて、神の栄光をあらわしなさい」との御言から

父が命名してくれました。

子どもの頃は、この御言の意味が分からず、なんだか字画も少なく平凡そうな自分の名前が好きになれなかったものです。しかし、後に救いにあずかってから、御子イエス様の尊い命と引き替えにしてまでも、私を罪滅びから救い出して主のものとしてくださった「あがない」の意味を悟り、なんと素晴らしい御言を生涯の御言として頂いたことかと、神様に感謝することができるようになりました。

【両親の信仰】

「きょう、わたしがあなたに命じるこれらの言葉をおあなたの心に留め、努めてこれをあなたの子らに教え、あなたが家に座している時も、道を歩く時も、寝る時も、起きる時も、これについて語らなければならない」（申命記六・六―七）。

私の父は、若き日に明確な新生の恵みにあずかり、救われた喜びを証しすることが自分に与えられた使命であると、いつも語っていました。「わたしの仕える万軍の主は生きておられる」が父の愛唱句の一つですが、この御言を日常生活の中で実践し、具体化していくことが父のモットーでした。ですから、子どもたちへの信仰の継承もまた、神様から与えられた大切な使命であると確信し、「神様を第一にする」という姿

勢を幼い頃から訓練してくれました。

我が家では、毎朝の家庭礼拝に始まり、父がいつも学校に向かう子どもたちを祈って送り出してくれました。小学一年生になると、日曜学校に続いて大人の礼拝（聖日礼拝）にも出席すること、中学生になったら、日曜夜の伝道集会、水曜夜の祈祷会に出席することが義務づけられていました。

もちろん、いつも素直に両親の方針に従えたわけではありません。私の場合は、後に記すように、聖日礼拝が苦痛であった時期がありましたし、兄弟もそれぞれに、特に思春期を迎える頃には、それなりに葛藤や反抗を経験したと思います。しかし、こうして定期集会に集い、主の臨在に近づき、御言に養われること、また、教会の様々な奉仕のお手伝いをし、主にある交わりに加えてもらうことで、自分たちも教会の大切な一員であるという自覚が次第に芽生えてくるのも、ごく自然なことでした。

また、両親がご奉仕させていただいた日本イエス・キリスト教団八幡（はちまん）福音教会、札幌美園教会、明石人丸教会は、いずれも主の愛に溢れ、信徒同士の交わりが盛んに行われ、年代を問わずいつでも誰でも「ウエルカム！」というよううな明るさとオープンさを兼ね備えていた教会でした。子ども心にも教会の居心地の良さを十分味わうことができたのは、

本当に幸せなことであつたと思います。また、教会の子どもとして、皆さんの愛と祈りの中で育てられたのは、大いなる特権であつたと深く主に感謝する者です。これらもまた、両親が主なる神様に徹底的に従つてきた、祝福の実ではなかつたかと、今になつて思われます。

私は後に、キリスト教教育を専門的に学ぶ機会が与えられました。客観的に見ても、両親は家庭においてキリスト教教育を熱心に実践していたと言えますし、その姿勢が私たち子どもに与えた影響は計り知れないものがあると思います。

【幼少期の思い出】

三歳の時、父の転任に伴い、北海道札幌市の教会に移り住むことになりました。当時は、まだ青函トンネルも開通しておらず、大所帯の家族を抱え、福井県敦賀から北海道小樽までの三十二時間の航路（フェリー）を使つて北海道に渡ることになりました。ところがその出発日、前日からの嵐のため出発が予定より遅れて、待合室で九時間待たされたのです。父は様々な思いで寝るに寝られなかつたそうですが、その時、同行してくれた母方の祖母が、一歳過ぎの私の弟を膝に抱きながら、愛唱歌の聖歌二九二番を口ずさんでいたということ。今日まで守られ 来たりし我が身 つゆだに憂えじ行

く末などは いかなる折にも愛なる神は すべての事をば良きにし給わん」。この祖母の信仰に父は非常に大きな励ましを与えられたそうです。後に事あるたびに、この時のエピソードを、「おばあちゃんの信仰」として両親からよく聞かされて、私も感銘深く心に残っています。

もつとも、幼い私にとつては、「引越し」の意味が分かりません。札幌の教会に着くなり、「おうちに帰る、おうちに帰る」と言つて、かなり母を手こずらせたというエピソードも、笑いの種としてよく聞かされることになりました。

しかし、子どもですから順応性もあり、それから八年間、私にとつては、自然豊かで人々の愛情も厚い北の都で、幼少期という大切な時期を過ごすことができ、文字通り心も体も大きく伸び伸びと成長することができました。

娘の知恵が、近頃とみに二人の兄を追いかけて、何事でも兄の真似をして挑戦する姿が見られます。三歳前から補助輪付きの自転車に乗つたり、四歳前からトランプやウノなどのカードゲームの仲間に入れたり、その見事な成長ぶりには驚かされますが、子ども時代の自分を見ているかのように感じるがあります。

私もまた、二歳上の兄が行く所どこへでもついて行き、兄の友人たちに、「栄子ちゃん」「栄子ちゃん」と言つて可愛が

ってもらい、度々仲間に加わっていました。小学校に上がる
と早速、その兄がキャッチボールを教えてくれて、三年生の
頃には、草野球の仲間入りをするほど上達していました。

とにかく、外遊びが大好きで、学校から帰るなり、ランド
セルを置くとすぐに、教会の真向かいの広い公園で、野球・
ドッジボール・鬼ごっこ・かくれんぼ・木登り、冬は雪遊び
にそり・ミニスキー・スケートと、遊びと友達には事欠かず、
とにかく活発に先頭切って走り回っていました。毎日、その
日のエネルギーを使い果たすまで遊んでいたもので、夕食の頃
にはすでに深い眠りに陥り、早朝まで眠ってしまったという日
も稀ではなく、近所に移り住んでいた父方の伯母は、身体を
壊したりはしないかと心配していたそうです。

【冬の思い出】

厳しい寒さを経験した冬も、札幌時代の忘れられない思い
出の一つです。当時の札幌は積雪一メートルは下らない雪国
で、十二月も過ぎれば辺りはすっかり雪景色でした。我が家
では、朝起きるとまずは雪かき、雪かきが終わらないと朝食
も取れないという毎日でした。朝早く除雪車が通った後、家
族総出で教会周辺や、後に移り住んだ斜め向かいの牧師館の
周りに垣根となつている雪の固まりを、公園まで運ぶ作業を

していました。遊具もたくさんある広い公園は、滑り台の半
分あたりまで雪で埋まり、その運んだ雪を固めて小さな雪山
を作ることになり、格好のミニスキーの練習場になりました。

子どもにとつて、雪遊びができる冬は楽しくて仕方なく、
学校帰りに家の周りにたくさんできた「つらら」をポキッと
折つては氷代わりになめたり、一キロ程離れた総合公園にあ
る野外の無料のスケートリンクに愛用のスケート靴を持って
滑りに行つたりと、冬でなければできない遊びをたくさん経
験しました。二月になると市内で行われる「雪まつり」に毎
年連れて行ってもらい、巨大な雪像内の長く大きな滑り台を
滑つたり、かまくらの中で無料配布されていた甘酒を貰い、
この時ばかりはと大人の味を味わう楽しみもありました。

しかし、両親にとつて冬は体力勝負、時折、教会の屋根に
積もつた雪を下に落とす作業も加わりました。また、大きな
パワーショベルを屋根の上に釣り上げてから始める、半日が
かりの作業の日も年に何度かあったようで、よく身体を壊さ
ずご奉仕を続けることができた、改めて神様の守りを痛感
させられます。

私自身も、四年生のある日曜日の午後、兄が友達と総合公
園に出かけるのについて行き、かなり高い山の遊歩道をステ
イックなしのミニスキーで滑るのを真似て、急なカーブを曲

がり切れず、両膝を痛める大怪我をしたことがありました。今になって思えば、歩けなくなる大事故になる危険さえ伴っていたわけで、本当に神様が守ってくださったのだと感謝に絶えません。

こうして、雪の多い生活にすっかり慣れていた私は、その後明石に住み始めて、「雪のない冬は冬と思えない」という姉の言葉にとても共感できました。また、シカゴでは、懐かしい雪景色に心躍るような思いがして、体感温度マイナス四十度のひどい寒波の中でも縮こまるようなこともなく、厳しい寒さを楽しむことができました。もちろん、ここ八幡でも、年に一度か二度うつつすらと積もる雪の日に、時間を見つけては我が家の子どもたちに雪遊びの楽しさを伝えたいと願っています。

【良き師との出会い】

話を札幌時代に戻すと、特に思い出深かったのが五年生の一年間です。私の担任は、当時五十代半ば（と思います）のベテランの男の先生でした。この先生は、時にはユーモアたっぷりに、時には真剣な眼差しでクラスをよく指導して、私は非常に大きな感化を受けました。

最も印象に残っているのが、ある体育の時間、跳び箱とマ

ットレス運動の指導で、先生自ら模範演技をしてくれました。そしてその直後、フィギュアスケートの選手が演技を終えた後に見せるお辞儀のように（ズボンの端を両手でそつと引つ張って、右足のつま先を左足の後ろで軽く地面につけ、会釈する）、ジャージ姿の先生がお辞儀をされたので、大爆笑と拍手喝采が起こり、先生のユーモアと愛情たっぷりの指導に、クラス中一本取られたな、という一幕があったことです。

授業の合間の中休みや昼休みに、子どもたちと一緒になつて、運動場や体育館で鬼ごっこなどの遊びに加わったり、教室で私たちが大声で歌い始めると、先生がオルガンで伴奏してくださったりと、とにかく先生の周りには常に子どもの姿がありました。これは、出来る限り生徒たちと時間を共有しようという先生の熱意の表れだったと思います。

将来の夢として、この先生のような、子どものことを一番に考えて、教育に情熱を傾け、熱心にかつ愛情深く指導していく教師になりたいと願うのも、私にとってはごく自然なことでした。

六年生に上がる前、札幌を離れることになった私に、先生は「目標に向かって前進あるのみ」という言葉をはなむけとしてサイン帳に記してくださいました。この言葉はその後も私の心に残り、進路の選択という岐路に立った時に、いつも

私を勇気づける言葉となりました。

こうして、五年生の一年間は、クラスの学級委員を務めていたこともあり、この尊敬する先生の絶大な信任を得て、男子が恐れるほど私はクラスを仕切っていました。授業中の発言はもちろん、休み時間に友人たちに声をかけて率先して遊んでいました。

また、学校外でも、放課後に、よく我が家(というか教会)にクラスの女子十七人全員を集めて家庭会(家庭科の復習を名目に、皆で集まり調理実習をする会)を催したり、女子ソフトボールチームを結成し、早朝から練習をするのに、やはりクラスの女子全員を集めていたことを思い出します。今になつて思い返せば、よく皆ついてきてくれたと思うのですが、当時の私は、何事も一生懸命で、面倒見もよく、勉強もスポーツもよくできる、いわゆる優等生であり、慕われる存在でした。札幌での最後の年に、良き師と良き友に恵まれたことは、本当に幸いなことであつたと主に感謝する者です。

【札幌での教会生活】

さて、学校生活に恵まれ、家庭でも八人兄弟の中でもまれながらも、兄や姉に可愛がつてもらい、伸び伸び育つていた私でしたが、唯一憂鬱に思えたのが、大人の礼拝に出ること

でした。

小学校低学年の頃は、兄や姉の後をついて行き、前から二列目の「金井家の子どもたちの定席」に座って、好きな本やぬり絵などでなんとか静かに過ごせたのですが、四年生になつた頃には、とにかく退屈で窮屈に思えてなりませんでした。

当時、私の父は五十歳前後、福音の素晴らしさをなんとか一人でも多くの人に分かちたいと、説教の時間が一時間では足らず、一時間半は優に語っていました。半ば反抗期を迎えていたこの頃の私は聞く耳もたずで、父の命懸けの説教も耳に入りません。逆に悪知恵が働いて、「お腹が痛い」と言つて、仮病を使つては礼拝を途中から抜け出すようになり、母にバツては叱られるも、翌週にはまた同じように礼拝を抜け出す、といった状態が結局二年近く続きました。

しかし、毎週教会に通い、たとえ心が向いてなくても、礼拝に出て福音に触れる機会が数多く与えられていく内に、やはり私の心の中に、神様のいのちの種が蒔かれていたのは否めません。創造主なる神様が確かにいらつしやること、神様は生きておられ、私たち人間をこよなく愛しておられるということは、素直に信じてことができ、疑う余地など全くない、つて良いほどありませんでした。

五年生の夏、教会学校の夏期学校に参加した時のことです。

そのキャンプの中心聖句は、聖書中の聖書とも言われる有名な、ヨハネによる福音書三章十六節でした。

「神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである」。

集会中なのか、あるいは、グループごとの導きの時であったか、詳しいことはよく覚えていませんが、若い女性の伝道師の先生が、目に涙を一杯に浮かべながら、この御言を通してイエス様の十字架にあらわされた神様の愛を話されました。札幌美園教会から献身され、神学校での学びを終えて、再び伝道師として美園教会に遣わされたその先生は、幼い頃から可愛がってもらった、とても身近な先生でした。まだ罪の自覚がなかったために、十字架の意味はよく理解できませんでしたが、この先生の熱心な語りかけを通して、神様が深い愛をもつて私を愛してくださっていることを素直に受け止めることができた、心に残るキャンプでした。

【明石人丸教会に導かれて】

一九八一（昭和五六）年、六年生の春、父の転任に伴い、兵庫県明石市に移り住むことになりました。その前年の秋に引越しの話を突然聞かされ、私は驚きと不安を覚えましたが、

この引越しは、私たち家族にとって、実に恵み深い神様の大きいなるご計画によるものだ、後に悟ることとなりました。というのも、両親はその後、十八年（他のどの教会よりも長く）明石人丸教会の牧師としての御用にあずかり、三年神学校の校長として、その責務を果たした間は牧会を離れましたが、校長を辞した後、明石人丸教会名誉牧師という肩書きを与えられ、住まいも教会のすぐ近くのマンションが備えられ、現在も教会の御用と交わりに加えていただいています。この転任時には、母の郷里であるとはいえ、これほど長きにわたって明石に住むことになるとは想像していなかったことでしよう。

私にとっても、この引越しは、大変大きな転機となりました。私に最も大きな影響を与えたのが、後に親友であり信友（信仰の友）ともなる、同年代のクリスチャンホーム育ちの子どもたちでした。

人丸教会での初めての聖日、大人の礼拝に出ようとして会堂に入ると、何と、先ほど一緒に教会学校に出席していた小学生六人が一番前の席に座っていたのです。牧師の子という変なプライドが急に目覚め、私も彼らに負けてはいけない、ここは模範を示さなければとの思いから、彼らの横に座り、終りまで礼拝に出ました。それ以来、札幌時代とは見違える

ように変わり、礼拝を途中で抜け出すことがなくなりましたが、これは、恵み深い神様の取り計らいによることでした。

実は数年後、この友人達から次のエピソードを聞かされたのです。実は、自分たちもあの時自ら進んで礼拝に出ていたわけではない、私たち一家が引越してきた最初の日曜日の朝、母親たちから、「今度来られた金井先生の子どもさんたちは皆、大人の礼拝にも出てくるそうやから、あんたらも見習って出なさい」とお尻をたたかれて、渋々あの日から礼拝に出るようになったのだと言うのです。私は正直、してやられた、との思いをもちましたが、同時に、神様はなんとねんごろな方かとも思いました。

というのも、翌週から私たちは大人の人たちを真似て、礼拝ノートを各自用意し、その日の説教のタイトルや中心聖句、大事と思われるポイントメモするようになったのです。そして、家に帰ってから、毎日聖書を読み、一人で祈る時間を持つようになりました。もちろん、これは聖霊なる神様の働きによるのですが、礼拝に対する意識・姿勢が変わったことで、私も、また友人たちも、信仰に対する「心の目」が開かれています。もし、あの日礼拝に自ら出ようとしなければ、いつまでも礼拝嫌いの私であったかもしれない。神様が、実に無理のない方法で神様に近づく道を用意してください

つたと言わざるを得ません。

【新しい学校生活】

さて、教会生活はスムーズに始められましたが、明石での新しい学校や町並みに慣れるには多少時間がかかったように思います。札幌では、ジャージ姿で登校していましたが、明石では小学校から制服があり、今までにない戸惑いを経験しました。同じクラスに私よりも背の高い女の子が三人もいたのも驚きでした。転校生はそれでも目立つので、少しでも皆と合わせなければと、仲間外れやいじめに遭わないように自己防衛に走り、札幌時代にクラスを仕切っていた私とは程遠い私を演じるようになりました。

転校してすぐ、クラスメートから「このノート、さら(まっさら)やねん」と言われて意味が分からず、キョトンとしたのを鮮明に覚えています。子どもですからすぐに言葉も覚えられましたが、関西弁に慣れない私にとっては、本当に未知の土地に来たという不思議な体験でした。

それでも、家から歩いて五分の小学校は、ちょうど新設校としてスタートしたばかりの真新しい校舎で、恵まれた環境で学校生活を送ることができ、実に幸いでした。海(瀬戸内海)のすぐ側に建てられた校舎からは明石海峡を一望でき、向か

いには淡路島が見え、その間を大小様々な船が行き交う、言葉では言い尽くせないほど素晴らしい眺めです。札幌では年に一度、小樽まで汽車とバスを乗り継いで海水浴に連れて行ってもらっていた私にとつて、六年生の教室は南校舎の四階、しかも、私の一学期の最初の席が、窓際の一番後ろという最高の場所、授業もさながら、広々とした海を毎日眺めては心癒されるような思いでした。

この時以来、私は海を眺めるのが大好きになり、後にシカゴではミシガン湖畔、塩屋では須磨の海岸、近江八幡では琵琶湖畔、そして、結婚後も、門司港や若松の海岸に出かけては海を眺めて、この広大な海を造られた神様の偉大さを想い、その神様に愛されている愛のふところの大きさに心癒され、満たされる恵みにあずかっています。

【ハレルヤ聖歌隊結成】

さて、教会にいち早く慣れた私は、同年代の友人と共に、子供の聖歌隊を結成しました。大人の聖歌隊の人たちが聖日の午後よく会堂で練習している姿を見て、私たちも同じように神様を賛美したいと思ったからです。私の場合、札幌美園教会の聖歌隊(兄や姉たちもメンバーでした)が、毎年の演奏会で、ヘンデルの「メサイヤ」を全曲高らかに歌い上げる姿を

見て、感動した経験も影響したと思います。

結成当初は、小学一年から六年の女の子七人で、「美女聖歌隊」と名付けてスタートしました。しかしその翌年、リーダーであった私と親友が、中高生バイブル・キャンプに参加した際、この名前が教会にふさわしくないと示されました。そこで悔い改めて、再度「ハレルヤ聖歌隊」と名付けて、本格的に活動を開始したのでした。

私とその親友は、中学で同じソフトボール部に所属していましたが、日曜日の練習や試合がある度に礼拝を休まなければならぬことが重荷となっていました。やはり聖日礼拝を守りたいとの思いが強まり、二人で申し合わせたわけではなかったのですが、一年の十一月という同時期に退部し、その分、教会のお手伝いやハレルヤ聖歌隊の活動に没頭するようになりました。

毎週土曜日の午後、二時間たっぷり練習を行い、二か月に一度はお互いに聞いて批評し合うテストを行ったりしました。夏休み等の長期休暇には集中特訓日を設け、大人の聖歌隊の人に発声練習を教わったりもしましたが、どの練習も必ず祈って始め、祈って終わるということを心がけていました。

中高生会で使っていた「友よ歌おう」という賛美歌集やバイブル・キャンプで覚えた曲などから選んで、オリジナルの

歌集を作り愛用していましたが、その中の一曲が次の曲です。

♪わたしたちはロバの子

わたしたちはロバの子です

馬のように早く走れない

ライオンのような力はない

ただのちっぽけなロバの子です

只知道あなた 知っていますか

ロバが主のお役に立ったこと

イエス様を背中にお乗せして

エルサレムにお連れしたことを

走れなくても 強くなくても

いつもイエス様がいてくださる

わたしたちはロバの子です

神様のために 働きます

この曲のある賛美テープで耳にした私は、ぜひハレルヤ聖歌隊の皆と一緒に賛美したいと思いました。しかし、楽譜がどの歌集にも見当りません。そこで、出版元に手紙を書き、テープを収録した教会を紹介してもらい、そこにも手紙を出して、ぜひこの曲の楽譜を送ってくださいとお願いました。熱意が伝わったのか、その後この楽譜が私の手元に届いた時の感動は忘れられません。早速メンバー分コピーして、皆で

練習しましたが、それから十年近く、この曲はハレルヤ聖歌隊のテーマソングとなり、特伝(特別伝道集会)やクリスマス・イヴの集会などで決まって特別賛美として披露させていただくことになったのでした。

結成から二年後には、教会の総会資料にも載せてもらうことになり、子どもの自主的な活動として始まったものの、すぐに教会の奉仕グループとして快く受け入れていただいたことは大きな励みでした。

「詩とさんびと霊の歌とをもつて語り合い、主にむかって心からさんびの歌をうたいなさい」(エペソ五・十九)。

この御言がハレルヤ聖歌隊の中心聖句でしたが、上手に歌うこと以上に、神様に喜ばれる賛美を力一杯献げようとの願いが与えられていたことは実に幸いでした。

【賛美の恵み】

こうして、賛美を通して、ハレルヤ聖歌隊のメンバーの信仰が強められ、次々と受洗者が起こされていきました。高校卒業と同時に、ハレルヤ聖歌隊も卒業という形を取りましたが、その後も、青年会の主要メンバーとして忠実に教会生活を続けました。結婚後各地の教会に導かれ、散らされてはいきませんが、今もある友人たちは牧師(あるいは伝道師)夫人

として、またある友人たちは信徒の立場で、主と教会に仕え、信仰に立って歩み続けている事実を思うとき、改めて神様のなさる御業の大きさを教えられます。

実際、「賛美」というキーワードを用いて私自身の歩みを振り返ってみると、これまでに、数多くの素晴らしい賛美の曲に出会う機会が与えられました。教会学校で覚えた「こどもさんびか」「ふくいん子どもさんびか」はもちろん、礼拝や各集会で使用した「讚美歌」「讚美歌第二編」「聖歌」「新聖歌」「青年聖歌」「友よ歌おう」「ゴスペル・ミュージック・ベスト・ヒット集」「リビングプレイズ」「プレイズワールド」「ミクタム・プレイズ・アンド・ワシップ」「ヒムナル」(英語の讚美歌)、そして、ここ前田教会では「靈感賦」と、数々の賛美に触れ、信仰が養われ、強められてきたのは、本当に主の恵みであると言わざるを得ません。また、各歌集には載っていませんが、信仰篤いクリスチャンの方々が作られた名曲の数々にも出会い、信仰が励まされることも多々ありました。

また、これらの曲との出会いと同時に、賛美の奉仕という貴重な機会が数多く与えられたのもやはり、ハレルヤ聖歌隊での活動が基盤にあったからだと思えます。大学生時代、ミクタムのコンサートで、小坂忠さんたちのバックコーラスグループに所属したり、その後就職や留学などで導かれ

た教会で、聖歌隊や賛美リーダー、賛美歌集や賛美テープの作成、あるいは賛美指導のご奉仕が与えられたのも、私に与えられた賜物を生かすための神様からのプレゼントであったと実感しています。賛美の奉仕を通して、主を賛美する者の信仰のあり方が常に問われ、私自身の賛美の姿勢が整えられていきました。

個人の生活においても、青年時代、一人暮らしが長かったものの、淋しさを感じるものがなかったのは、私の生活に常に賛美があり、賛美を通して、神様がいつも共にいてくださることを実感できたからです。大きな声で力一杯主なる神様をほめたたえる時、大いに心燃やされ恵まれ、力を与えられました。信仰生活において賛美は大きな力であり、賛美は神様が与えてくださる素晴らしい賜物であると、身をもって教えられたのは大きな財産です。

このような賛美に関するあらゆる機会は、ハレルヤ聖歌隊での練習と奉仕と交わりが基礎となつていることを思い、神様の奇しき恵みに感謝の思いで一杯です。

【受洗の恵み】

明石に引っ越した翌年の春には、小学校を卒業し、地元の公立中学校に進学した私でしたが、またもや新しい環境にな

れるまでが大変でした。小学校は、札幌も明石も一学年三クラスの小規模校でしたが、中学校は隣の小学校と合同で、各学年八クラスあり、随分大きな学校のように感じました。当時の中学校は、時代的にも校内暴力真つ盛りで、私を通った学校も相当荒れていました。授業中に三年生が一階にある一年生の教室に窓から入ってきたり、三年生の教室のドアが蹴り飛ばされて半分ない状態だったり、何故かトイレの鏡は全て取り外されているような学校でした。部活動での先輩後輩関係も厳しく、私が所属したソフトボール部は、他のクラブに比べるとそれほど厳しくはなかったのですが、それでも「ミーティングするよ」という掛け声には怖い思いがありました。普段廊下を歩く時ですら、上級生と目を合わさないように気を配り、できるだけ目立たないよう自ら心がける学校生活を送っていました。

学校でおとなしくする反面、その反動か、教会では中高生会やハレルヤ聖歌隊で自由に活動でき、教会がますます楽しくなっていました。

その年の八月、兵庫教区の中高生バイブル・キャンプに兄や友人たちと初めて参加しました。当時のキャンプについては、後に詳しく記していますが、生徒が真剣に神様の御言に触れ、主イエス様の救いにあずかり、信仰に立って歩むこと

ができるようにとの熱心な祈りと働きかけの下に行われていました。朝から晩まで御言漬けのキャンプに参加して、私も他の多くの参加者同様、信仰に対する心の目が開かれ、神様を信じていきたいとの願いが与えられました。

その後、洗礼を受けてもいいのではないかと考え始めていましたので、中高生会の先生から、受洗を考えてはどうかと勧められたとき、何の迷いもなく、受洗準備会に出席したいと申し出ました。奇しくもハレルヤ聖歌隊で共にリーダーをしていた親友も、キャンプを通してはつきりとした救いの確信が与えられ、一緒に洗礼を受けることとなり、共に神様の導きに感謝しました。

こうして、一九八二(昭和五七)年一月一九日のクリスマス礼拝にて、父から洗礼を授けてもらい、神の子としての新しいスタートを切ることができました。

「恐れるな、わたしはあなたをあがなつた。わたしはあなたの名を呼んだ、あなたはわたしのものだ」(イザヤ四三・一) 受洗準備会の時に与えられたこの御言を、洗礼式でも一度思い起こし、神様のものとされた自らであると素直に受け止めることができて、感謝と喜びの思いで一杯になりました。また、教会の皆さんから祝福の言葉をいただき、自分もようやく教会員として歩き始められる、その喜びもまた、大きい

ものでしたが、私が主イエス様の救いを確信できたのは、受洗から一年以上も後のことでした。

【罪の自覚】

さて、洗礼を受けて最初は、クリスチャンとして歩み始めたことを喜んでいたので、中学二年生になると、その喜びも失いかけて、いわゆる第二次反抗期に突入しました。つまり、「優等生」であった小学生時代とは全く別人のように、心がどんどん荒れすさんでいき、世間一般でも「悪い」と言われることに興味を持ち始めたのです。

まず学校では授業もそつちのけで、授業中に友人に手紙を書いたり、十代の性体験が書かれた単行本を読んではクラスメートに回したりと、全く勉強しなくなり、授業がとてども退屈に思えました。

放課後は、学校で禁止されていた買い食いをしたり、真つすぐに家に帰らず友達の家に入り浸ったりと、自由奔放な毎日を通じてようになってきました。タバコやお酒には、さすがに良心の咎めを感じるのを、手を出すことはありませんでしたが、友達が口にはしているのを見ても止める勇氣はありませんでした。それどころか、ある時は友人に誘われて、当時ハマっていた実業団バレーボールの試合を観戦するために、授業

をサボり、姫路まで中学生同士で出かけたこともありましたが、自分のお小遣いでは足りないために、母の財布から勝手にお金を貰い、入場料や交通費に充てるなど、とにかく恐ろしく自分勝手な人間でした。

当然家でも、嘘やごまかしが日常茶飯事となりました。我が家では父が大変厳しい人だったので、父の言葉は絶対であり、口答えすることは許されません。その分、母や兄姉の忠告に対して苛立ったり反抗したりと、家族も相手こずったことと今になって思います。

さらに教会内でも、教会生活を忠実に続けてはいたものの、陰で親しいはずの友人の悪口を言ったり、その友人との言い争いがあると、他の友人を巻き込んでいじめる側に立ったりするなど、心は完全に荒れており、いつも何か満たされない思いでいました。それもそのはず、どんなに熱心なクリスチャンを装ってはいても、私自身が「まことの光」なる神様から遠く離れ、罪という闇の真只中にいたからです。

しかし、神様は実に憐み深い御方です。二年生の半ばを過ぎた頃、さすがにこのような二重人格の自分、つまり、模範的クリスチャンを装っている自分と、家や学校での自己中心という罪にまみれた自分とのギャップに嫌気がさすようになってきました。そして、「こんな状態では神様に従っているとは

でも言えない。何とかしなければ」と悩み始め、しかし、自分の力ではどうにも自分を変えることはできないと、もがき苦しむように導いてくださったのです。

この内なる葛藤が与えられたのは、実に幸いでした。なぜなら、自分の力の限界を知ったからこそ、神様に頼ることを学ぶことができたからです。この時、神様は私に、幼い頃から養われた信仰を働かせることを教えてくださいました。ふと、「そうだ、神様は祈りに答えてくださる御方ではないか。お祈りしてみよう」との思いが与えられ、「神様、どうぞ、私がクリスチャンらしく歩めますように、私を変えてください」と祈り始めるようになりました。

【新生の恵み】

この祈りが答えられたのが、忘れもしません、それから半年後の一九八四(昭和五九)年三月二七日、教会で春の中高生一泊修養会が開かれ、例年のごとく、私も参加した時のことでした。楽しいレクリエーションと夕食を終えて、夜の集会に出席しました。講師は、以前から親しくしていただいていた隣の教会の牧師先生でした。笑いあり、涙ありのこの先生のメッセージを通して、神様は私の心を深く深く探ってくださいました。

この時、私はようやく、聖書で言う「罪」とは「的外れ」という意味があること、私が神様に喜ばれないことを平気で行えたのは、私自身が神様に背を向けて歩いてきたためであり、今こそ悔い改めて神様に立ち返るべきだと気付きました。初めはお話を聞く内に、今まで犯してきた罪がどんどん示されて、「こんなに私の罪は大きかったのか、こんな私でも赦されるのだろうか」という思いが湧いてきました。しかし同時に、十字架の意味もはつきりと悟ることができました。罪の姿のままでは、聖い神様の許に帰ることができない、だからこそ、神の御子イエス様が私の罪の身代わりとして、あの十字架に架かられ、私が本来受けるべき刑罰をすべて引き受けてくださった、十字架は、私が神様の許に帰るための道(救いの道)を開くためであったことがようやく理解でき、私のための十字架であったと素直に受け止めることができました。

メッセージの最後に、「救われたい人、救いの確信が与えられた人は前に出てください」という招きがあり、私もささず前に進み出ました。これまで犯してきた数々の罪を口で言い表すと、涙が溢れて仕方ありませんでしたが、心からの悔い改めの祈りをささげ、「イエス様を私の救い主と信じます」と告白しました。そして、講師の先生が私の頭の上に手を置いて祈って下さいました。「子よ、しっかりしなさい。あな

たの罪はゆるされたのだ(「マタイ九・二二)。この御言が与えられ、今度は喜びが満ち溢れてきて、再び涙がこぼれました。

こんな者が罪赦され、神様の子どもとしていただいた、イエス様がどんなに大きな愛をもって私を愛して下さり、救いの道、命の道に招き入れてくださったのか、その事に魂の目が開かれ、感謝と賛美の思いで一杯になりました。奇しくもハレルヤ聖歌隊と一緒に活動してきた友人二人も、私と同じく救いの確信が与えられ、喜びと興奮冷めやらず、三人で夜遅くまで神様の救いの素晴らしさを語り合い、賛美し、感謝することができました。

翌日の午前の集会で、「友よ歌おう」四二番を賛美しましたが、私はこの賛美を自分の信仰告白として初めて賛美できた感動もまた、忘れることができません。

♪赦すためです

- 一 赦すためです 主の十字架 払いきれない死の代価
あざけられても打たれても 祈られたのは誰のため
- 二 救うためです 主の十字架 滅ぶばかりのこの命
いばらのかむり釘の跡 耐えられたのは誰のため
- 三 カルバリ山は濡れたでしょ 主の流された血と涙
ごめんなさいとお詫びして 従いましょう主の招き

【信仰による歩みの始まり】

「神は、わたしたちをやみの力から救い出して、その愛する御子の支配下に移して下さった(「コロサイ一・十三)。

こうして、救いの確信が与えられてからの私の信仰生活には、いくつかなの変化が見え始めました。まず、デイポーションを毎日の日課としてきちんともつようになったことです。教会で配られていた聖書通読表に基づき、聖書を読み、心に響く御言を日記に書き込みました。そして、自分で祈りのノートを作り、自分の信仰の成長のために、また、家族や友人、知人の救いのために、教会・教団の祝福のために等、祈りの課題を挙げて真心こめて祈るようになったのが、一番の変化でした。

もちろん、これまでも聖書を読み、祈ることを習慣づけてはいましたが、それは律法としてでした。つまり、自分はハレルヤ聖歌隊のリーダーなのだからとか、教会で勧められたからとか、あくまでも義務として行っていたのですが、救われて神様との交わりの妨げとなっていた罪という壁が取り除かれ、いつでも遠慮することなく神様に近づけることが私の大きな喜びとなり、デイポーションもまた、私のいのちと変えられたのです。

また、イエス様のために何かさせていだきたくないと、教会

でのご奉仕(ハレルヤ聖歌隊の練習、中高聖会礼拝での司会・奏楽・週報作成・様々な活動の準備、日曜夜の伝道集会前の路傍伝道への参加などに積極的に参加するようになったのも、やはり、救われた喜びがあったからこそ、進んでできたように思います。

幸いにも、私には神様の日々の恵みを分かち合うことができる、同年代の信仰の友が多く与えられていました。ハレルヤ聖歌隊のメンバーとは、当時交換ノートを回すようにしていましたが、文面の最後に必ず御言を添えてメンバーにプレゼントするのが暗黙の決まり事になっていて、その御言で心励まされることが度々ありました。さらに、夏のバイブル・キャンプで他教会の同年代のクリスチャンとも知り合い、キャンプ後も文通し合い、やはり御言を添えたり、日常生活で恵みに感じたことを分かち合うことでお互いの信仰が強められる結果となりました。

こうして、教会においても、家庭においても、少しずつ神の子としての歩みが確立されていきましたが、それは、私がかつて「クリスチャンらしく歩ませてください」と願い求めた祈りに神様が答えてくださったからです。神様は小さき者の祈りにも答えてくださるご真実な御方であり、本当に神様のなさる御業の大きさを覚えるとき、御名を崇めずにはおれ

ません。

【高校受験】

さて中学三年生ともなれば、さすがに次の進学のことを考えなければなりません。私の中学の道路を挟んで隣に県立の明石高校があります。二番目の姉とすぐ上の兄が通っていました。しかし、毎回テスト前に一夜漬けでテスト勉強をするぐらいで、塾に通うわけでもなく、かといって家で自学習するでもなく、ほとんど勉強らしき勉強をしてこなかった私にとって、さすがにこのままの成績では高校に行けるのかという不安がありました。そこで、兄が使っていた問題集を譲り受け、まずは苦手な英語から取り組むことにしました。三年の冬休みのことです。

最初に英文法から始めましたが、問題集を一冊一通り解き、答え合わせをしてみても初めて、いかに文法の基礎ができていなかったかがよく分かりました。そして、同じ問題集をもう一度自分なりに解いていく内に、文法にも数学の公式のような決まり事があり、それらを覚えれば解ける問題も増えていくことに気がきました。自分がわかっていなかった項目をいかに理解し、自分のものとしていくかが鍵であると悟ったの

です。これは当り前のことなのですが、勉強方法すらよく分らなかつた私にとつては、目が開かれる思いがしました。

私の場合、英文法の問題を納得のいくまで解いて、理解度を確認していったことで自分のものとすることができました。すると、文法が分かると英語の構造(構文)も少しずつ頭に入るようになり、苦手だつた英語の文章を読むことも面白くなつていきました。こうして、英語の成績は中学の三年間、五段階評価の限りなく「二」に近い「三」ばかりだつた私にとつて、三年生の三学期に「四」を貰い、少しでも成績が上がつたことが非常に大きな自信となりました。

他教科においても、とにかくどんどん問題を解いていくことで、自らの力不足がよく理解でき、苦手とする分野を克服することで少しずつ理解度が高まるようになりました。結果として、滑り止めの私学は受験せず、公立一本の受験でしたが、神様の憐れみで合格でき、明石高校に進学となりました。

こうして、私が受験を無事に終えた背後には、家族を始め、教会の皆さんの熱心な祈りの応援があつたことも忘れてはならない事実です。受験のまだ二カ月も前のことだつたと思ひますが、聖日の午後、ある青年の方が、「栄子ちゃん、いよいよ受験やね。お祈りしているからね」と声をかけてくださいました。普段あまり話を交わさない方だつたので、とても嬉

しく心に残りました。それからどれ程たくさんの方が、「祈っているよ」と声をかけてくださったことでしょうか。この時ほど、「祷告」が有り難く、また心強く感じたことはありませんでした。また、祈りを通して他者を祝福することの重みを教えられたことも感謝に思います。

【恵まれた高校生活】

進学した明石高校は、文武両道をモットーにした伝統校であり、個性的で、かつ教育熱心な教師陣に恵まれた学校でした。広い敷地内には、全校生徒(約一三五〇人)が入れる広い講堂があつたり、私が入学した前年に、県代表として夏の甲子園に出場した実力をもつ野球部が半分近く使つても、まだまだ広いグラウンドがあつたり、少し離れた所には普通科とは別の美術科という特別コース専用の校舎や、図書館があつたりと、環境にも非常に恵まれていました。荒れていた中学とは全く異なり、上級生はとても大人びて見え、私自身もとても落ち着いて穏やかな学校生活を送ることができるようになりました。

まず勉強面で、中学の終りに自主的な勉強スタイルを身に付けたことが、高校生活でどれ程大きな力となつたか分かりません。

非常に思い出深いのが、一年の一学期に最初に出会った英語科の女性教師がとても厳しく、「とにかく予習をしてきなさい。英語は予習しかないわよ」と、口を酸っぱくするまで教え込んでくれたことです。その先生は授業中、予習をしてこなかった生徒を立たせ、私語をする生徒にはチョークを投げるくらい真剣勝負の授業をしていました。初めはなぜそこまです？という疑問がありました。言われるまま授業の予習を欠かさず行っただけで、英語の力がぐんぐんつき、一年生の一学期の終りに、英語リーダー・グラマー共に成績は十段階評価の「八」を貰いました。英語が苦手と思っていた私の苦意識が消えて大喜びしたのは言うまでもありません。もちろんこの時点では、後に英語教師を目指すとはゆめゆめ考えてもいませんでしたが、神様が一つ一つ勉強に関しても私に道筋を示してくださったと言わざるを得ません。

【演劇部での経験】

部活動も私に多大な影響を与えてくれました。入学してすぐに、兄が所属していたバレーボール部の顧問の先生が、技術は後から身に付くもの、背の高いお前ならすぐにレギュラーになれるぞ、と声をかけてくださいました。中学時代バレーボールが大好きで、休み時間ともなれば、友人たちと円陣

を組んで楽しんでいた私です。バイブル・キャンプでもキャンプ場に着くなりバレーを始め、どんどん仲間を増やし、二十人、三十人の中で率先してボールをリードしていた私にとっては嬉しい勧誘でした。

しかし、私には迷いがありました。というのも、演劇部に入りたいたいという思いもあつたからです。小学四年生の時だったと思いますが、札幌で教会員の方から、「青い鳥」の舞台を見に行こうと誘われ、厚生年金会館の大ホールで熱い舞台を観た経験があつた私は、それ以来、演劇に非常に興味を抱くようになりました。六年生の時には、「ガラスの仮面」というマンガの主人公に憧れたこともあり、一度演劇の世界を覗いてみたいという好奇心にかられていたのです。

大好きなバレーボールを取るか、演劇に挑戦してみるか、当時の私にとつて究極の選択を迫られました。そこで、私が取った選択方法は実に簡単、神様に祈ることでした。どちらが御心にかなうのか教えてくださいと素直に祈り始めて数日後、答えが与えられました。つまり、バレーボールは部活に入らなくても体育の授業でも少しはできる、でも、演劇はクラブに入らなければ経験することはできない、と。答えが出た翌日早速、演劇部の部室を訪れました。

演劇部は、先輩が六人、同級生が五人と、人数の少ない弱

小部ではありましたが、私はこの部活動でとても貴重な経験を与えられ、神様のなさった業だと心から感謝することができました。というのも、私は元々よく言えばハスキーな、悪く言えばしゃがれ声の持ち主で、とても聞き取りにくい声でした。しかし、演劇部で発声練習を毎日早朝と放課後に行い、腹筋運動も同時に行うことで、お腹の底から大きくはつきりとした声を出す訓練を受けました。その結果、舞台上演じる時も、また後に学校教員として教壇に立った時にも、どれ程助けとなったかわかりません。

しかも、演劇部の部室のすぐ横にある講堂を毎日自由に使用できたお陰で、ステージに立ち、広い講堂の一番奥に立った先輩の耳にも届くぐらいの大きな声を出して、発声練習や台詞の練習をしなければならず、これは本当にいい訓練となりました。後に、清教学園高校に勤め始めた頃、四百人以上の高校二年生全員の前で新任の挨拶スピーチと賛美を一曲恥ずかしがることもなく披露できたのも、この演劇部での練習と舞台経験があったからこそと感謝に思います。

また、少人数のため、役をこなしながら、それぞれ、音響・衣装・照明・演出という担当がありました。私は照明担当をしていたお陰で、大学生になってから、イエス会というクリスチャンサークルの主催するクリスマス・フェスティバルと

いう集会で、大きな学生ホールを使用した際、照明係としてご奉仕でき、その時覚えた技術が後にも役立ち、感謝したものです。さらに、演出も何度か携わり、全体を見渡すことを自然と学び、これはいろいろな集会や青年全国大会のスタッフとして約四百人の参加者のお世話係をさせていただいた時にも非常に役立ちました。

女子部員の多い中で、背の高い私は男役としても重宝され、低い声で話す訓練をしたことが、今では、我が家の子どもの読みの読み聞かせにも役立っていることは言うまでもありません（子どもは、登場人物に合わせて声を変えて読んでもらうととても喜びます）。というように、演劇部で得た経験は、私の想像以上に大きく、また実際的であり、その後の生活に多大な影響を与えてくれたのでした。

また、部活動を通して、よき友人にも恵まれたとつくづく思います。いつもヒロイン役をする友人は、とにかく演劇好きで、彼女に演劇を語らせると時間がいくらあっても足りないくらいでした。その彼女が愛してやまない女優がオードリー・ヘップバーンであり、オードリーを知らないかと私が話すと、早速映画「ローマの休日」を見なさいと、これを見れば、オードリーが如何に素晴らしい役者か分かるからと、ビデオを貸してくれました。その結果、私にとっても、彼女の作品

はほとんど網羅するほど、大好きな女優となりました。

さらに、もう一人の部長を務めた友人もまた、私に大きな影響を与えてくれました。彼女は、非常に一人一人の個性を大切にし、気配り上手でいつも感心するようなタイプの人でした。一番有難かったのは、私が地区大会に出場する作品の演出を担当していた時のことです。私の描いていた役作りと先輩のそれとが食い違い、あまりに衝突しそうになり、私も思う通りにならない怒りが爆発しそうで、もうこんなクラブやめてやる、と思ったのです。その時に、この友人がすかさず私をなだめて、その先輩との間に入って調べて私は退部せずにするのでした。後でその友人が打ち明けてくれたことですが、私が中学時代に部活を途中でやめていたことを知っていたので、今ここでも途中で投げ出すことは私のためにならない、なんとか最後まで部活を続けてほしい、そして、その達成感と喜びを味わってほしいと願ってくれていたとのことでした。私はなんと思いやりの深い友人かと、この友人との出会いを与えてくださった神様に感謝しました。また同時に、自分はクリスチャンであるにもかかわらず、自分のことばかり主張して、この友人のように他人を思いやることや、心配りするような行動ができていないことを自ら恥ずかしくも思いました。

高校生時代にもう一つ、忘れられない出来事があります。三年生の春のある日曜日の朝、ささいな事で母と口論した私は、このむしゃくしゃした気持ちのまま、中高生会と礼拝に出ることはできないと思いました。そこで、今日は部活があるからと母に嘘をつき、誰もいない部室に一人閉じこもったことがありました。私にとつて礼拝をさぼったのは、救われてからこの日が初めて最後でした。

部室のベンチに横になり、何をやる気力もなく、ボーっと時間だけがゆっくりと過ぎていくのを感じました。九時頃、今頃中高生会が始まったな、十時十五分、礼拝が始まったな、と時間ばかりが気になり、私は今何をやっているのだろう、神様から背を向けて私の幸いが他にどこにあるのかと、ようやく我に返ることができました。「わたしから離れては、あなたがたは何一つできないからである」(ヨハネ十五・五)。この御言が示され、イエス様を離れてはすべてが空しいことに気付きました。帰宅後、母に言い逆らったことを謝り、母も言いすぎたとのことで、すぐに和解ができたのですが、私にとつて、神様抜きの人生の空しさを、身をもって体験できた貴重な時でした。

【中高生バイブル・キャンプでの恵み】

中高生時代にかけてがえのない思い出となったのが、夏のバイブル・キャンプに参加したことです。私が生れ育った日本イエス・キリスト教団は、若い人への伝道・教育に熱心であることが一つの特色として挙げられると思います。

私の中高生時代は、全国にすでに百以上あった教会が各教区に所属し、それぞれの教区で、中高生バイブル・キャンプが毎夏、青年キャンプが隔年で行われ、教団全教会に参加を呼びかけての青年全国大会は、北海道から九州まで毎回場所を替えて、二年に一度開かれていました。

私もまた、兵庫教区の中高生バイブル・キャンプに六年間生徒として参加し、高校卒業後は四年間信徒教師として奉仕者の立場で毎夏参加しました。初めて生徒として参加した中学一年生のキャンプは、兵庫教区の二七の諸教会から二百人以上の中高生が参加して、大変な盛り上がりでした。三泊四日のキャンプでは、早天、午前の集会、午後はレクリエーション、夜に集会やキャンプファイヤーと、御言中心の充実したプログラムで、集会後は必ずグループごとやマンツーマンでの信仰の導きがあり、そこで、信仰が確かめられていきました。

今振り返ると、準備や奉仕に携わった牧師先生方や信徒教師の方々、関西聖書神学校の神学生のご苦勞は並大抵ではな

かったと思いますが、神様はキャンプを大いに祝福してください、このキャンプに参加した数多くの中高生が救われ、今も忠実に教会生活を守っています。またその中から、牧師・牧師夫人・宣教師夫人として現在主と教会に仕えている友人が、私の同年代だけでも九人いることを考えても、神様がいにこのバイブル・キャンプを祝福し、宣教のために大いに用いてくださったかを知ることができると感慨深く思います。特に忘れられないのが、高校三年生のキャンプでのことです。その頃の私の一番の悩みが、自分が直接献身に召されているのかどうか、その確信が与えられたい、ということでした。というのも、中学二年の明確な回心以来、私は夏のキャンプだけでなく、毎年、ゴールデンウィークに開かれている塩屋聖会や十一月の神戸聖会などの聖会に積極的に出席しては、招きに応じて、「主の御心なら直接献身したい」と立ち上がっていました。献身は、主イエス様の尊い命によってあがなわれたクリスチャンであるなら、当然なすべき行為であると考えていたからです。しかし、周囲のクリスチャンから、「栄子ちゃんはいつ神学校に行くの？」とあからさまに尋ねられるようになり、期待を裏切りはしないかと、プレッシャーを感じ始めるようになりました。

しかし、神様はすべてご存知で、しかも、私に実に恵み深

い御方です。この三年のキャンプ時、私のグループの中に、牧師の子供として同じような悩みを経験された女性の神学生がおられたのです。この先生にすかさず私の悩みを打ち明けると、次の御言を教えてくださいました。

「人々からでもなく、人によつてもなく、イエス・キリストと彼を死人の中からよみがえらせた父なる神とによつて立てられた使徒パウロ（ガラテヤ一・一）。

そして、直接献身は神様からの召命によるものであり、その時は神様が確実にお声をかけてくださるから、何の心配も必要ないと教えて下さいました。その言葉に励まされ、「神様、伝道者の道でも信徒の道でもどちらであつても、ただあなたのご計画に従います。御心のままに導いてください」と心から祈ることができ、私の心配の雲がこれでようやく吹っ切れたのでした。私はこの尊敬すべき先生との出会いを与えてくださったことを神様に心から感謝しました。この先生は、後に私の長兄と結婚し、現在は義姉として、私のよき相談相手となつてくださっています。ここにも神様の不思議な摂理を思わざるを得ません。

【友人の死を通して】

さて、このキャンプ前、高校では長い夏休みに入るため、

翌年の大学受験に向けて、「最低でも一日十二時間勉強するように」と担任からハツパをかけられていました。精一杯力を傾けた演劇部も六月に引退して、次は大学に進学し、教師となる夢を実現したいと願つていた私は、素直に担任の言葉に従いました。すなわち、午前中は学校の補習を受け、午後はそのまま友人たちと市立図書館で自学習、帰宅後も自室にこもつてひたすら勉強、という毎日を過ごしていました。

八月に入り、例年の如くバイブル・キャンプで霊の恵みをたっぷり受けた私は、再び受験勉強に専念する予定でしたが、急きよ、北海道函館市で行われる夏期キャラバン伝道に参加させてもらうことになりました。当時函館の教会（函館中央教会）には、その年の春に私の長姉が神学校を卒業後、伝道師として遣わされていました。そのキャラバンが札幌美園教会の青年たちの主催によるものと聞いたので、姉の応援もでき、懐かしい美園の方たちとも会えることを楽しみにしながら、明石からは女性の奉仕神学生二人と、私、妹の四人で向かうことになりました。

函館に着いた翌日、美園の青年達と合流し、久しぶりの再会を喜んでいた矢先の夕食後のことでした。突然、大変ショッキングなニュースが飛び込んできたのです。ちょうど同じ日に、美園教会の高校生会のキャンプが札幌近郊であり、メ

ンバーの高校二年生の男の子が海でおぼれて亡くなったという知らせでした。美園の青年たちは突然の知らせにとても動揺し、泣きじゃくる人もいました。私にとつても、一つ年下の幼なじみであり、よく一緒に遊んだ教会の仲間であったMくんが亡くなった、しかも、神様の守りがあるはずの教会のキャンプ中に…と、一瞬信じられない思いで一杯になり、悲しみの涙が溢れ出てきました。「主よ、どうしてですか」と半ば問い詰めたような思いにかられた時、次の御言がすぐに頭の中に浮かんできました。

「あなたがたは、心を騒がせないがよい。神を信じ、またわたしを信じなさい」(ヨハネ十四・一)。

そしてまた、別の御言も心に響いてきたのです。

「わたしのしていることは今あなたにはわからないが、あとでわかるようになるだろう」(ヨハネ十三・七)。

これらの御言が与えられ、これが神様からの答えであるととつさに悟ることができました。つまり、この事は主なる神様のご計画によるのだということ、私のすべき事は、いろいろと思ひ悩まず、うろたえず、すべてを神様にお委ねすることだと分かりました。そこで、「主よ、お委ねします」と祈ったとき、心に平安が与えられたのでした。

翌日の早天祈祷会でローマ書十三章が開かれ、非常に心刺

される思いがしました。

「あなたがたの眠りからさめるべき時が、すでにきている」

(十一節)

メッセージを通して、私は初めて、人の一生はいつ終わるかわからないこと、だから今生かされている時間を無駄にしていけないし、福音のために真剣に生きることが求められていることを示されました。「御言を宣べ伝えなさい。時が良くても悪くても」(第二テモテ四・二)。今こそ福音を伝えなければならぬ、そして、私自身も神様に真剣に従っていかなくてはならないと教えられ、心引き締められるような恵みの機会となりました。

後日談ですが、亡くなったMくんはすでにイエス様を信じて救われていたので、信仰もつて天に帰ったことを知らされ、神様に感謝しました。また、彼の召天を通して、教会生活から遠ざかっていたご両親の信仰がリバイヴしたこと、彼の弟が兄の死を通して「僕もイエス様を信じたい」と、その後洗礼を受けたこと、さらに、ご両親が土地を教会に献げられたことも聞かされ、本当に神様のなさった御業であったと御名を崇めました。

【「天路歷程」との出会い】

さて、非常に事の多い高校三年時でしたが、さらに秋には、もう一つ特筆すべき出来事がありました。以前から、聖書の次に世界中で読まれている名著として、父の説教の中で度々紹介されていた「天路歷程」を読む機会が与えられたのです。後に英文学を志す私にとって、この本との出会いもまた、神様の素晴らしいタイミングによるものでした。

毎年、人丸教会のクリスマス祝会では、青年会と中高生会が劇を行っていました。演劇部所属の私は、クリスマスが近づくと、いつも張り切って台本の準備をさせてもらっていました。三年生の秋のある日曜日、中高生会のメンバーである友人が「栄子ちゃん、この本面白いから読んでみて」と一冊の本を貸してくれました。それが「天の都をめざして」というタイトルの、「天路歷程」の内容を短くした少年版でした。表紙の裏には、美しい絵で描かれた地図がありました。主人公クリスチャンが「滅びの町」を出発して、「十字架」の下で大きな罪の重荷を下ろし、「天の都」まで旅する様子が描かれていて、とても心ひかれました。

早速一気に第一部第二部と読み終え、主人公が、「死の陰の谷」や「虚栄の市」のように、様々な困難な中を通りながらも「天の都」をひたすら目指し、ついに迎え入れていただく場面一つ一つに心奮われるような感動を覚えました。と同時に、

これは単なる夢物語ではなく、現実はこの世に生きている私たちクリスチャンの生涯を紹介しているとも思いました。主イエス様の救いにあずかったキリスト者が目指す所はただ一つ、主なる神様が迎えてくださる「天の都」、すなわち、「天国」であること、私もまた、尊い御救いにあずかり、神様のものとされ、今は「天の都」を目指す旅人なのだ改めて実感し、素晴らしい恵みの生涯に導き入れていただいたことを神様に感謝しました。

また、ぜひこの恵みを分かち合いたいと思い、三十分くらいの劇ができるよう台本を書きました。そして、その年のクリスマス祝会では、総勢二十七名の中高生会のメンバーと共に、この「天路歷程」を上演することができました。普段私はあまりキャストを演じることはなく、演出や裏方に回るので、中高生会最後ということで、主役のクリスチャン役を熱演し、さらに思い出深い祝会となりました。

「天路歷程」とのお付き合い(?)は、この後まだまだ続きました。というのも、この数ヶ月後大学に入学し、全学年の力リキュラムが載っている学生要綱なるものをパラパラとめくっていると、なんと、四年次の数多いゼミの中に「天路歷程」の原本(The Pilgrim's Progress)を読み、研究するゼミが紹介してあったのです。まだ入学して間もなくのことでしたが、

私は再び「天路歷程」に巡り会えて、これもまた神様の奇しきお導きだと感動し、四年次には必ずこのゼミに入ろうと心に決めました。

このゼミの担当の坂本清音先生は、学内でも敬虔なクリスマスチャン教授として知られ、「天路歷程」の著者ジョン・バニヤンの作品を長年研究しておられました。日本バニヤン研究会の会員でもあり、海外にもバニヤンの研究発表に出かけたりと、とても研究熱心、かつ教育熱心な先生です。実際、熱意をもって指導してくださる先生の下で、個性豊かな十人のゼミ生たちと共に楽しく、かつ有意義に「天路歷程」を詳しく学ぶことができたのは、実に幸せなことでした。卒業前には、一年間の学びの集大成として、「『天路歷程第一部』における教会の役割」というテーマで卒業論文を書くことができました。

さらに、清音先生が誘ってくださったお陰で、卒業後もバニヤン研究会に私も所属させていただき、忙しい仕事の合間を縫って、研究会で発表するという貴重な機会も与えられ、感謝したこともありました。

その後も「天路歷程」をより多くの人に知ってもらいたいと願っていた私は、就職時に導かれた堺栄光教会で、クリスマス祝会時に劇をしようと提案し、青年の皆さんと共に上演

しました。また、留学中にお世話になったウイネット力日本語キリスト教会でも、卒業し日本に帰国する前に、教会員総出でこの劇を行い、教会の皆さんと共に恵みを分かち合うことができましたのでした。初めての出会いから十年、神様が摂理の御手をもって、「天路歷程」を様々な形で味わう機会を与えてくださったこともまた感謝なことでした。

【大学受験】

再び話を高校三年の秋に戻すと、学校ではいよいよ進路選択の時期が迫っていました。私の場合、高校三年間を通じて比較的成績のよかったのが、英語と世界史と音楽でした。音楽は「十」の成績だったとはいえ、今から音大を目指すのは無理、社会も好きな教科ではあるが、教師を目指すには幅が広すぎる、英語ならまだ伸びる可能性が残っているのではと考え、最終的に英語を専門的に学ぶことに決めました。

問題は、どこの大学を受験するかということです。我が家では、兄や姉が全員国公立大学に進学していましたので、私もそれ以外は考えていませんでした。しかし、理数がだんだん苦手科目となっていた私としては、五教科で勝負するのは難しいと判断し、国公立大学の進学を諦めることにしたのが十月でした。しかし、かといって、私学の大学に行くとな

ると、両親に経済的負担をかけることになるかと断念し、私立短大の英語科を探し始めていました。

ところが急転直下、思いがけないことが起こりました。冬休み前の三者懇談の時に、担任が急に「金井、お前四年制の私大に行ったらどうだ？」と言うのです。「いやあ、それはちょっと無理ですよ」と言いながら、ちらっと横にいる母を見ると、「いいんじゃない」との返事。こちらはびっくりして、「ええー、いいの？」(心の中では、そんな話聞いてないよー、と動転しそうになりながら)。母の話では、つい先日私の受験の話になり、弟や妹が「自分たちは国公立に行くから、栄子姉ちゃんを私学に行かせてあげて」と涙ぐましくも言っていたとのこと。母も教師を目指している私の夢を叶えるためにも、教職免許一級が取れる四年制に行かせてあげたいと思っていたということです。担任はすぐさま、「金井はクリスチャンだから、同志社女子なんかどうや」と勧めてくれました。嬉しい勧めでしたが、同志社女子もなにも、「関関同立」という言葉を聞いたことがあるくらいで、どこにどのような私立大学があるのか全く無知の状態でした。

しかし、四年制大学を受験してもよいと言われ、涙が出るほど喜びにあふれ、家に帰り早速私立大学のことを調べ始めました。そして、最終的に担任とも相談し、関西学院大学、

同志社女子大学、京都産業大学の三校を受験することになりました。それまで、二か月間世界史を一切勉強していなかった私は慌てて勉強を再開し、さらに赤本を購入、ひたすら過去問を解いて入試に備えました。

二月に入り、受験二校目となる同志社女子大学の入試日の朝のことです。いつものように聖書を開き、通読していた中で一つの御言が心に迫ってきました。

「あなたの神、主はあなたのうちにいまし、勇士であつて、勝利を与えられる」(ゼバニヤ三・十七)。

この御言が与えられ、受験という心騒がせやすい中にも、神様は共にいてくださり、たとえどんな道であつても最善の道を開いてくださるとの確信が与えられ、とても心穏やかに試験に臨むことができました。

結果的には、関学も京産も両方不合格、一時は宅浪(自宅浪人)しなければならぬのかと落ち込んだりもしましたが、神様が憐れんでくださり、不思議と同志社女子大だけ合格できたのでした。後に記すように、この大学だからこそ得られた学びと経験と出会いがあつたことを思う時、やはり神様の見えざる御手の導きを実感しない訳にはいきません。また、受験の背後には、高校受験の時同様に、多くの方々の祈りの応援があつたからこそ、勇気づけられたことも感謝に思います。

【充実した大学生活】

「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだのである。そして、あなたがたを立てた。それは、あなたがたが行って実をむすび、その実がいつまでも残るためであり、また、あなたがたがわたしの名によって父に求めるものはなんでも、父が与えてくださるためである」

(ヨハネ十五・十六)

一九八八(昭和六三)年四月、同志社女子大学の入学式において、この御言が学長の式辞の中で語られました。この大学への進学が、正に、主なる神様によって備えられたことを確信していた私にとっては、神様の大きいなるご計画の下に導かれていた自らであることを厳粛に受け止める機会となりました。式の中で讚美歌を歌い、聖書科担当の牧師先生の祈りがあり、信仰の歌でもあるカレッジ・ソングの紹介あり、とミッシェン・スクールならではの雰囲気味わい、これから始まる大学生活への期待が一気に高まりました。

私のそれからの四年間は、大学生活・教会生活・アルバイトの三本柱で成り立っていました。さきほどの御言の約束通り、神様は事ある度に祈った祈りにご真実をもって答えてくださり、実り豊かな祝福に満ちた学生生活を送らせてくだ

さいました。

まず、通学は早朝五時起き、明石から京都府田辺市(奈良県に近い京都府南部)にあったキャンパスまでは、JRと近鉄を乗り継いで往復五時間かかりましたが、小中高と徒歩で通学していた私にとって、この電車通学は楽しみの一つでした。毎朝確実に京都まで座っていけるようにと、六時一分明石駅発の快速に乗っていましたが、デイポーションはもちろん、勉強や読書、さらに睡眠不足解消のためしっかり眠ったりと、電車の中では自室にいるようにリラックスして過ごすことができ、時間を無駄なく使えたように思います。

学びに関しては、さすがは英語教育に力を入れている同志社だけあって、学芸学部英文科では、一般教養科目と共に、英語科の基礎科目が山ほどあり、三、四年次でさらに専門的に学ぶための基礎固めをすることができました。特に一年次に、シェイクスピアの作品を和訳でいくつから十冊以上読むようにとの課題があり、実際読み進めていくうちに、物語の展開の面白さや人々の暮らしぶりなど興味が尽きず、すっかりシェイクスピア文学のとりこになりました。

宗教部活動を活発に行えたのも、この大学だからこそと感謝しました。明治十年の創立以来、毎朝の学内礼拝を欠かさず行ってきた学校として、私の在校時期もその伝統を固く守

つていたことは大変素晴らしいことだと思いました。学内の先生方を始めとして、学外からもゲストスピーカーを招いたり、学生に奨励の機会があったりと、毎日の礼拝にできるだけ多くの学生や教職員が参加できるようにと工夫されています。私もまた、司会や奨励、聖歌隊の合唱などに積極的に加わり、クリスチャンとして証する機会が多く与えられ、幸いに思いました。また、従兄弟が体育の助教授であり、宗教部の担当教員として勤めていたので、様々なところで交わりと励ましが与えられたことも感謝でした。

【青年時代の教会生活】

教会では、青年会に所属し、毎週土曜日の青年祈祷会、月に一度の例会、また、四季折々の行事に参加しました。よき信仰の先輩たちに恵まれ、楽しく、また、お互いの信仰を励まし合える交わりが与えられ、感謝でした。

人丸教会は、ちょうど私が大学に入学した年に、長年祈り続けてきた新会堂の建築が行われました。約八か月の工事期間中、我が家は近所の一軒家をお借りし、私たち家族はそこに住み、礼拝も近くのビルの一室をお借りして守ることができました。工事の間とにかく教会では祈りが積み重ねられ、毎朝の早天祈祷会に水曜夜の聖研祈祷会、木曜夜の第二祈祷会、ま

た、毎日の工事終了後に片付けを手伝う教会員の有志の方々の祈りなど、神様の御業がこの所にあらわされるようにと熱い祈りが捧げられていました。神様は確かに祝福してください、翌年一月、ちょうど平成を迎えた最初の聖日、父の恩師であられる本田弘慈先生をお迎えして、献堂記念礼拝を喜びと感動をもって献げることができました。四階建てで塔も高くそびえる大きな教会は、周囲からもよく見えて、「ここに教会がある」と、新会堂を見て求道する方が起こされるようになりました。教区や教団の大きな集会や会議にもよく用いられるようになり、正に神様のなさった御業と、今でも明石に帰省する度に会堂建築の恵みがよみがえってくる思いです。

さらに教会生活で特筆すべきことは、教会学校の分校で四年間ご奉仕したこと、そして、大学三年の春に教会で行われたゴスペルコンサート(音楽伝道集会)で、青年会のメンバー全員でご奉仕したことです。

高校を二月末に卒業してまもなく、教会学校の教師としてご奉仕しないかと声をかけていただきました。早速四月に任命式をしていただき、ハレルヤ聖歌隊で共にリーダーをした親友と奉仕神学生の三人で、教会から自転車で十五分の成願寺分校(現在の貴崎分校)に遣わされました。この分校は過去二十年近くベテランCS教師の方が担当されていました。分

校に集まる子どもたちの数は決して多くはありませんでしたが、尊い祈りと働きの積まれた場で、子どもたちに福音を伝える使命が与えられ、毎週日曜日の早朝、分校に向かうことが大きな喜びでした。

もう一つのゴスペルコンサートに関しては、教会では半年も前から、クリスチャンミュージシャンの小坂忠さんと岩淵まことさんを招いて開催することが決まっていました。その一年半前、兵庫教区青年キャンプで初めてお二人の賛美を聴き、その純粋な信仰姿勢に感動した父が、ぜひ私たちの教会に来てくださいとお招きしてのことでした。私もまたそのキャンプに参加して、お二人の賛美とお証に心奮われるような感動を覚えていましたので、今回のコンサートの主催を青年会に任せると言われた時は、尊いご奉仕が与えられたと素直に喜びました。

ところが実際、準備段階に入った時のことです。第一回準備委員会では、ポスター・チラシ・チケットの作成から、会場準備、ゲストとの連絡、当日の奉仕分担などを早急に決めて、早速準備に入るようにと勧められました。その年の二月に青年会長になったばかりの私の頭では、すぐに整理できないほどの綿密な準備が必要であると知らされたのです。人生経験も、教会の奉仕経験も豊富な男性役員の方々は、早めに教え

ることで、準備に余裕をもって臨めると配慮してくださったの事でした。しかし、まだ成人になったばかりの未熟な私には、何もかも初めてづくしの経験でしたので、頭の中はパニックを起こし始めていました。

その集まりが終わり解散した後も、私は教会母子室に一人残りました。事の重大さに、とても自分には負いきれない重荷だと感じ、自然と涙があふれました。「神様、とても私にはこんな大仕事は無理です。助けてください」と声にならない声で祈った時です。次の賛美がふと心に浮かんできたのです。

♪主を待ち望む者

主を待ち望む者は 新たに力を受けてのぼる

走り疲れず 歩みて倦まず わしのよしのぼる

この賛美で、どれほど私の疲れ切った魂に活力が与えられたことでしょう。「そうだ、これは私のわざではない、神様のなさるわざではないか。私がなすべきことは、今静かに主なる神様を待ち望むこと、つまり、このコンサートを主の栄光のために用いてくださいと祈って、神様に委ねることではないか」との思いが与えられ、神様に一切をお任せしますとの祈りを献げ、不思議と心の中は平安で満たされました。翌週には早速コンサートに向けての準備が始まりましたが、神様は必要な助け人を多く与えてくださり、青年会のメンバーが心

を一つにして、またよく協力し合つて、準備に携わることができたのでした。

四月三十日のコンサート当日、約三八〇人もの出席者が与えられ、お二人の心の底からの主への賛美と救われた喜びに満たされたお証しを聴くことができました。コンサート終了後、ゲストのお二人を囲んで奉仕者全員で聖歌二一九番「おどろくばかりの」を力一杯賛美し、コンサートを大いに祝してくださった神様の御名を崇めました。私自身、自分の小さな手に握ったままではこれほどの結果とはならないこと、神様の御手に全く献げきつた時に、あの五つのパンと二匹の魚をイエス様に献げた少年のごとくに、神様自ら豊かに祝して栄光を現してくださいるという天国の法則を教えられ、忘れられない経験となりました。

【学内外での伝道と交わり】

さて、私の大学生活で忘れてならないのが、同志社大学イエス会と、同志社女子大学シャロン会という二つのサークル活動です。

話を再び入学時に戻すと、入学して十日が過ぎた頃、私の心の中では、入学した当初の期待感が早くも薄れ始めていました。というのも、必修であった聖書学の最初の授業で、講

師である牧師先生が開口一番、「創世記は神話だからそのまま信じなくていいです」と話されたのです。聖書はすべて神様の言葉と堅く信じてきた私には、この先生が何を言っているのか全く理解できず、啞然としました。早速家に帰りつくなり、父に話すと、同志社で教えている先生方が自由主義神学という立場に立っていることを聞かされました。残念ながら、毎朝の礼拝においても、必ずしも福音が福音として尊ばれているわけではない事実を知り、キリスト教主義と言いなながら内実が伴っていないように感じ、がっかりしていた矢先のことです。同じ教会の青年会のメンバーであり、同志社の学生である先輩が、イエス会主催の講演会に誘ってくださいました。私は学内の集会にあまり興味がもてませんでした。が、せっかく誘っていただいたからと行ってみることにしました。

忘れもしない四月半ばのある日、道路を挟んでお隣の同志社大学のキャンパスに足を踏み入れて驚きました。ある校舎のすぐ近くに大きな看板が立て懸けてあったのです。「テロリストからキリストへ」というタイトルの講演会の紹介が書かれてある看板でした。急ぎ足で会場となる教室に入ると、すぐに会が始まりました。

その会の講師は、日本伝道隊の宣教師ヒュー・ブラウン先生でした。先生はかつて十代の時に母国アイルランドでテロ

活動に熱心だったようですが、主イエス様の救いにあずかり、自分の間違いに気付き、悔い改めて、神様に従う道を歩み始めたこと、やがて宣教師として日本に来るよう導かれた時、昔テロリストであったため、本来なら日本入国はできないはずだが、「見よ、わたしは、あなたの前に、だれも閉じることのできない門を開いておいた」(ヨハネの黙示録三・八)のお約束通り、不思議なように日本に来ることができたと力強くお証しされました。私はそのお証を聴きながら、学内で福音が福音として語られていることに驚き、と同時に心から感動し、神様にここに導いてくださったことを感謝しました。講演会后、この会を主催したイエス会の二人のリーダーとお話する機会が与えられ、イエス会が福音主義の教会に所属するクリスチャンたちが集まって始められた活動であることを知り、とても心励まされたのでした。

翌日早速、朝八時半に始まる早天祈祷会に出席しました。詩篇を輪読し、先輩から一言の奨励があり、続いて二人ずつに分かれて、お互いの信仰のために、メンバーの一日の歩みの祝福のために、また、救われる魂が学内で起こされるように、そのためにイエス会が用いられるようにと共に心を合わせて祈りました。教会の聖書研究祈祷会でももちろん、同じように二人ずつ分かれて祈る訓練を受けていた私にとって、

まさか大学内でも福音主義の信仰を共にし、祈り合える友が与えられるとは思ってもみませんでした。

それからは早天祈祷会のみならず、週に一度の聖書研究会、月に一度のごはん会、年に二度(春夏)の合宿に積極的に参加し、个性的でかつ信仰生活に忠実なメンバーに恵まれ、クリスチャン同士の主にある交わりの素晴らしさを経験することができました。また、野外伝道集会やクリスマス・フェスティバル等の特別集会の開催を通して、神様が確かに生きて働いておられ、祈りに答えて救いのわざを行ってくださいるお方だと知らせていただき、私の信仰もまた強められたのでした。

さらに、女子大でもシャロン会というサークルを通して、神様がクリスチャン学生の交わりを祝してください、求道中の方にも神様を知っていただく機会を設けてくださいました。

シャロン会は私ともう一人のクリスチャンの二人で一年時の六月に始めましたが、次々と加わる方が与えられました。最初の頃は合宿もイエス会と合同でしたが、三年の夏には、シャロン会独自の合宿も行えるほどメンバーが与えられ、私が卒業する頃には、約二十人の会員が学内で共に祈り合い、主にある交わりを共有していました。

しかし、これらは全て人のわざではなく、神様が私たちに思いを与え祈りに答えて現わしてくださいました神様のみわざで

した。「シャロン会が始められますように」「共に祈り活動する同労者を与えてください」「求道者が与えられますように」「今出川キャンパス(京都市内)でも活動できますように」「大
学祭でも伝道させてください」「救われる人を起こしてください」「大
い」等、一つ一つの祈りに神様は確実に答えてくださり、神
様のわざとしてシャロン会の働きを進めてくださったのです。
正に、入学時にいただいたヨハネ十五章十六節の御言通りで
あつたことを感謝に思います。

こうして、大学での学びの傍ら、イエス会、シャロン会の
活動に参加し、学内で福音を伝える喜びにあずかり、どれ程
多くの恵みをいただいたことか分かりません。

しかも学内のみならず、学外でも、超教派のクリスチャン
が集うキリスト者学生会(KGK)の活動に一年の夏から参加
し始めるようになりました。地区ごとの祈禱会や様々な集会、
夏期学校などを通して、同年代のクリスチャンとの主にある
交わりの輪はさらに広がりました。また、他大学の聖書研究
グループの働きのために祈ることを通して、他者のために祈
る祈りの尊さを味わう機会となりました。

三年生の終りに開かれた四年に一度の全国集会に参加で
きたことも、私にとつて大きな恵みでした。「宝の民とされた
から―神の民としての恵み・その使命」というテーマの下に、

全国から約四五〇人ものクリスチャン学生が集まりました。
その集会の中心聖句が第一ペテロ二章九節でした。「しかし、
あなたがたは、選ばれた種族、王である祭司、聖なる国民、
神の所有とされた民です。それは、あなたがたを、やみの中
から、ご自分の驚くべき光の中に招いてくださった方のすば
らしいみわざを、あなたがたが宣べ伝えるためなのです」(新
改訳)。講師の先生方のメッセージを通して、神様が払って
くださった代価の大きさや、神の民とされていることがどん
に素晴らしい特権であるかを教えられ、主の恵みの大きさに
圧倒される思いでした。

また、確か講師の先生の言葉であつたと記憶していますが、
「キリスト者の交わりは、あつて当然のものではなく、恵みと
して与えられた天国での交わりの先取りである」という言葉
が語られるように、小グループや地区別グループなどで、御
言と祈りを中心とした交わりの素晴らしさも満喫させていた
だく機会となりました。

このように、学内でも学外でも、幸いなクリスチャンの交
わりが与えられた私は、卒業後もOB会という形で継続して
いくことができたのです。それらもまた、私に与えられた
神様の恵みであつたと感謝に思います。

【第二の転機】

さて、祝福に満ちた全国集会からひと月も経たない内に四年生となった私が、突然信仰のスランプに陥るといふ事態になりました。何故か神様に心を閉ざしてしまい、これまでのように御言を聞いても心に響かなくなつたのです。

振り返ると、その前年の春と夏に、二つのショッキングな出来事がありました。一つは、ある神学生の方から突然ラブレターをもらったことであり、もう一つは、夏の教区青年キャンプ中の夜の集会在、急ぎよ踊りながら賛美する賛美集いと変わり、異常な熱気に包まれた集會室にいたたまれず外に出て行く青年が続出となり、集會が中止となる事態が起こつたことでした。そのどちらも、とても尊敬していた神学生の方々がらみでしたので、それまで神学生の先生方を心から尊敬し、羨望の眼差しで接していた私にとっては、自分の信頼を裏切られた、そんな思いを抱いてしまいました。

一人から見ればそんな些細なこと、と思えることでも、当時の多感な私には、とても心痛み、人なんか信じられないという思いを抱くようになったのです。そのラブレター事件の時は、幸いにもちょうど長兄が神学校在学時でした。早速相談すると、兄は「後輩には僕から話しておくけど、栄子も神学生だつて人間なのだから恋愛感情を抱くことだつてあるし、

そこまで裁かないように」と諭してくれました。また、夏のキャンプ事件も、集会後にスタッフ全員でのミーティングがあり、そこで様々な意見が出され、心の中では決着がついたと思つていました。

まさか半年間もこれらを引きずるとは思つてもみませんでした。私の心が少しずつ暗くなり、五月に入ると、いよいよ信仰生活がギクシャクし始めました。礼拝や各集会、塩屋聖会に出席しても、御言が心に残らない状態で、さすがに鈍感な私でもおかしいと思ひ始めました。さらに、親しい友人にも心を閉ざすようになり、学内で一番仲のよかつたクリスチャンの友人の言動が気になり始め、受け入れられなくなりました。そんな自分に嫌気がさし、何をやつてもうまくいかず、焦りと不満で心は一杯になっていました。

しかし、「人の危機は正に神様の働かれる時である」と、つくづく思います。神様は自分の力でなんとか解決したいと願う私に、「わたしのもとに来なさい」と招いてくださいました。当時の私の日記には、次のように記しています。

「私に何をしてほしいのか?」「なおりたいのか?」。主からの問いかけをずっと拒んできた。あの人が悪い、この人がこうだから……と、人のせいばかりして、あげくの果て、なぜ

主が私をこんな目にあわせなされるのか、と愚痴を主に言い続
けていた。

主から遠く心が離れているのだから、全てがうまくいくは
ずがない。ちよつとした失敗が積み重なり、いら立ちと怒り
がいつべんに爆発する。嫌な自分、だめな自分が見えてくる。

でも、水曜日からずっと御言が迫ってくる。私は聞かない
よう耳をふさいでいるのに、神様は何度もチャンスを与えよ
うと働きかけてくださっている。

すべての原因は、ヤボクの渡しを渡り切れず、そこに立ち
止まっているこの私だ、ということに気付かされた。

黙示録二章四く五節、イザヤ四六章四節

今まで私を持ち運んで下さった主が、これからも持ち運び
支えて下さるといふ。この御言に触れた時、私は心からの悔
い改めをし、主にすべてをお任せした。

それは忘れもしない一九九一(平成三年)五月二十七日、週に
一度の神戸信徒聖書学校の講義の日でした。いつものように
大学の帰りがけ、会場である神戸中央教会に向かい、講義前
のチャペル・メッセージで創世記三二章が開かれ、私の心は
深く探られたのです。私は今ヤコブと同じ状態にいる、つま
り、過去のことを清算し切れない自分を引きずっていること

に気付きました。そして、ヤコブのように真剣に神様と格闘
しなければならぬと示されたのです。

その夜、私は教会の祈禱室に入り、神様と一対一で向き合
いました。すると、その日の信徒聖書学校で賛美した曲が心
に浮かんできました。

聖歌五五六番

- 一、 祈りすれど手応えなく 求むれど得ずして
重き心抱き続け 苦しむはたれぞや

〈折り返し〉

汝が持てるものを主の手に ことごとく献げしや
条件つけず降伏せば 勝ち得べし勝利を

歌いながら、私の魂の状態が正にこの一節と同じだと示さ
れ、「主よ、私の心はどうにもならず苦しんでいます。どうぞ
ここから救い出してください」と祈りました。そして、二節、
三節と歌い続けました。

- 二、 信仰を持ち恵みに満ち み光の中行く

輝かき生活をは 望まずや わが友

- 三、 恵みもたず賜物のみ 慕うとも益なし

汝がすべてを献げ尽くし 火を待てやしずかに

- 四、 献げ尽くし 明け渡しし 心こそたえなれ

君なるイエス 心に住み 御心をなしたもう

さらに、歌いながら御言も与えられました。

「しかし、あなたに対して責むべきことがある。あなたは初めの愛から離れてしまった。そこで、あなたはどこから落ちたかを思い起し、悔い改めて初めのわざを行いなさい」

(ヨハネ黙示録二・四〜五)

「どこから落ちたのか」と問われ、いろいろと思ひ巡らしていた時に初めて、先ほど記した出来事を思い起しました。私を傷つけた人々を赦すことが出来ず、神様からの解決を得ていなかったことによく気付き、溢れる涙を抑えながら、「私もヤボクの渡しを渡らせてください」と祈りました。そして示されるまま、自らを義として人を裁いていた罪や、神様に喜ばれない思いを抱いて犯した罪の一つ一つを言い表し、悔い改め、十字架を仰ぎました。

この時ようやく、私のこの弱さと自我のためにもイエス様が十字架に架かってくださったこと、そして、あの十字架に私の自我も共につけられていると信じることができたのです。「生きているのは、もはや、わたしではない。キリストが、わたしの内に生きておられるのである」(ガラテヤ二・二十)。

この御言を私の信仰告白として口にした時に、さらに次の御言が迫ってきました。

「わたしはあなたがたの年老いるまで変らず、白髪となる

まであなたがたを持ち運ぶ。わたしは造ったゆえ、必ず負い、持ち運び、かつ救う」(イザヤ四六・四)。

これまでも私の生涯を恵みで満たし、豊かに持ち運んでくださった主がこれからも持ち運んで下さるといふ、なんといふ恵みかと心は喜びで一杯になりました。そして、「神様、一切をあなたの御手にお任せいたします。就職も、私の将来も、すべてあなたが握っていてくださいますから感謝いたします。御心のままに導いてください」と祈った時に、言いようのない平安に包まれたのでした。

これが私にとって、第二の転機でした。先ほどの賛美の四節にあるように、全能者にして主なる神様の前に無条件降伏した時に、神様の力強い御手に私の生涯を握ってください、神様の方法でさらなる祝福の道へと導いて下さいました。

【就職に備えて】

この第二の転機の後、神様はいくつかのそれに伴う恵みを留意していただくっていました。

まず、その二日後に、宗教主催のリトリートという一泊二日のキャンプがありました。その晩、仲違いをしていた友人に今までの態度を謝ることができ、見事に和解の時与えられました。

「人の道が主を喜ばせる時、主はその人の敵をもその人と和らげられる」(箴言十六章七節)。

この時、私はこの御言を体験することができました。

その二週間後には、母校の明石高校での教育実習が予定されていきました。進路に対してひどく不安を感じていた私に、神様はさらなる恵みの約束の言葉を与えて下さいました。

「わたしはあなたの神、主である。わたしはあなたの利益のためにあなたを教え、あなたを導いて、その行くべき道に行かせる」(イザヤ四八・十七)。

何と力強い御言でしょう。これまでも高校、大学と私にとって最善の進学の道を備えてくださった御方が、就職に関しても常に共にいてくださり、「行くべき道に行かせる」から安心して私に任せなさい、とおっしゃって下さる…もったいない主の語りかけに、私は身震いする思いでした。

教育実習が一つの決断の場となると確信していた私は、その直前に与えられたこの御言で勇気づけられました。そして、貴重な二週間の実習中、教育現場の様子をつぶさに見せてもらい、また実際教壇に立ち、熱心に授業を進めることができました。たくさんの生徒の前で教えたのはこの時が初めてでしたが、それまでの学生時代に、個人塾や家庭教師などで十数人の英語指導をさせてもらったアルバイトの経験も役立ち、

無事終えられたのでした。

実習の最終日、廊下を歩きながら、ふと「やはり教師になろう。大変だけど、とてもやりがいのある仕事であり、私も生徒と共に成長していける場が学校である。私が働く場はここだ」との確信が与えられました。

と同時に、キリスト教主義の学校で教えたい、という思いもこの時与えられました。それは、大学での礼拝や宗教部の活動を通して、自分がクリスチャンであることを証しできる場が多いこと、そして、福音に触れる機会の多い生徒たちには何らかの形で関わることをできると思つたからです。創立者、新島襄先生の福音伝道や教育への情熱に心燃やされ、多大な影響を受けていたこともあり、「御心なら、公立学校では果たし得ない役割を担っているキリスト教主義の学校に遣わしてください」との祈りが、私の切実な願いとなるのも、自然なことでした。

【就職の導き】

しかし、現実とはとても厳しいものがありました。時はバブル崩壊前の就職に大変有利な時代であり、同級生は春には次々と就職先を決めていました。しかし私はと言えば、キリスト教主義の中高、しかも英語科の新規採用を希望している

学校と言えはごく僅かであり、就職活動にも限りがある状態だったのです。夏に公立や私学の採用試験を受験するものどもちらも不合格であり、なかなか就職先が決まらない状態が続きました。さすがに母も、企業にでも面接に行つてはどうかと忠告するほど、本当にヴィジョンだけ掲げていて大丈夫なのかと思つていたようです。この間、私は忍耐強く主の導きを待ち望むことを教えられました。

やがて十一月に入り、大阪府河内長野市にある清教学園中高で英語科教員の募集があると知り、面接を受けることになりました。これは私にとつて思いがけなくも嬉しい出来事でした。というのも、その年の夏に、私は一冊の本に出会つていたからです。同じゼミの友人が自分の母校のことが書かれたものだからと、一読を薦めてくれた「青春論舞(せいしゅんろんぶ)・清教学園ものがたり」という本でした。そこには、河内長野で戦後すぐ、教会に来ていた中学生たちの呼び掛けによつて献金が集められ、それを基に清教学園というミッション・スクールが建てられたという、創立時の様子が詳しく描かれていました。一気に読み終えた私の心は深い感動で包まれました。すごい！こんな学校があるなんて！祈りが積み、神様によつて建てられた学校が同志社の他にもあるのかと、心躍る思いがしていましたので、その学校を見せて

もらえると素直に喜びました。

面接日の直前に次の御言が与えられました。

「信仰によつてアブラハムは受け継ぐ地に出て行けとの召しをこうむつた時、それに従い、行く先を知らないで出て行つた(ヘブル十一・八)。

私はこの御言でアブラハムの信仰に励まされ、私も神様だけをあてにして、行く先が分からなくても、神様が「行きなさい」とおつしやる地に、「はい」とお従いしていきたい、清教学園が御心なら主が道を開いてくださるだろう、との確信が与えられ、面接へと向かいました。実際学園に着き、理事長始め、ズラリと座つておられる管理職の先生方の前では緊張し、思うような返答はできなかつたものの、ここに再び来るかもしれないという期待も抱くことができました。結果として、翌週電話で非常勤講師として来てくださいとのお返事をいただき、神様がついに道を開いてくださったと感謝を捧げました。

ちょうどその数日後、神戸市西区の近くの公立高校から、週十八時間で非常勤講師として採用したいとの申し出の電話がありました。清教学園と全く同じ条件だったため、両親は大喜びし、何も教会を離れて遠くに行かなくてもいいではないか、ぜひその公立の話を受けるようにと勧められました。しかし、ミッション・スクールに行くことが与えられた使命

だと確信していた私は、清教学園こそ神様が備えてくださった「行くべき道」だからと、公立の話はきっぱり断りました。

仮契約も終わり、大晦日の新年待望祈禱会に出席した時のことです。その祈禱会前に、新しい年のスケジュール帳には、三月までのおおまかな予定は書き込むことができて、四月以降は全くわからない状態。社会人として初めての仕事、また、教会も住む所も変わる、全く未知の状態に、「いったい来年はどうなるのだろう」と、少し不安がよぎっていました。しかし、神様は実に恵み深く、憐れみに富んでおられる御方です。私のそれらの不安を吹き飛ばすかのように、祈禱会の中で次の御言を与えてくださいました。

「あなたがたが渡って行って取る地は、山と谷の多い地で、天から降る雨で潤っている。その地はあなたの神、主が顧みられる所で、年の始めから年の終りまで、あなたの神、主の目が常にその上にある」(申命記十一・十一―十二)。

この御言を聞いた時、私は驚きました。「山と谷の多い地」、それは正に河内長野ではないか、と。また、それは単に地形のことだけではなく、精神的にも山あり谷ありかもしれない。でもそこは、「天から降る雨で潤い」「主が顧みられる所」という！主が共にいてくださり、常に導き守ってくださいるといふ、なんと素晴らしい確かな約束だろうか、恐れることなく

主に信頼していこうと、信仰が与えられ、希望に満たされ、心から主に感謝を捧げました。

「主はわたしのために、みこころをなしとげられる」(詩篇一三八・八)と確信できた恵みの時でした。

【新島襄懸賞論文の恵み】

さて、話は前後しますが、大学時代に創立者の新島襄先生の生きざまを知ったことは、私がキリスト教主義教育の重大性に目が開かれる大きな要因の一つでした。

それは、一年生の秋のことです。イエス会の合宿中に、新島襄懸賞論文を書くため詳しく調べていた先輩から、新島先生の生涯と同志社の歴史について聞く機会が与えられました。それまで、単なる創立者としか思えなかつた新島先生が、実は教育者であると同時に、福音を伝える伝道者であったと知らされ、大変驚きました。そして江戸末期に、国禁を犯してまでアメリカに渡りたかつたのは、キリスト教を知りたかつたからであること、アメリカでの十年間で洗礼を受け、しかも神学を学び、日本へは宣教師として帰国されたこと、日本人として初のプロテスタントの牧師として教会を建て上げ、伝道牧会に従事しながら、日本にクリスチャンの働き人の養成が必要と痛感されたこと、様々な闘いや迫害に遭いながら

もついにキリスト教主義学校を設立し、涙の祈りで創立の日を迎えられたことなど、次から次へと語られることが新鮮であり、とても胸を打つものでした。

この後、新島先生に関する書物を何冊か読みましたが、先生がしばしば愛用されていた言葉が、「見えざる聖手の導き」であり、同志社の最初の卒業式で卒業生にはなむけの言葉として、「Go, go, go in peace. Be strong. The Mysterious Hand will guide you.」(安心して行きなさい。勇ましくありなさい。不思議なる聖手があなたを導くだろう)と語られたことを知りました。実はこの言葉は、私が女子大を受験する一年も前に、人丸教会に奉仕神学生として来られていたイエス会OBの方が、お別れに私のサイン帳に記してくださいとお願いした。あの頃は、まさか自分が同志社に導かれるとは想像もしませんでした。新島先生の生涯を知れば知るほど、先生の波乱万丈の生涯を「不思議なる聖手」をもって導かれた同じ神様が、この小さな私の生涯をも導いてくださっている事実を確認でき、感動に心包まれる思いでした。

そして、学内で自由応募であり、女子大からはここ十年以上も応募した学生がいないと聞く「新島襄懸賞論文」に、私も応募してみたいという願いが、この一年生の時から与えられました。それは、さらに同志社の歴史を知りたいと思ったか

らであり、論文を出すことでクリスチャンとしての証ができるのではないかと思つたからです。

二年、三年次となかなか着手することはできませんでしたが、卒業を半年前に控えた四年生の九月に、ようやく論文に関する資料収集を始めました。先ほど述べたように、この時点ではまだ就職先が決まらず、大学の講義、イエス会やシャロン会の活動、教会生活、さらに十月には淡路島での教団青年全国大会が開催され、スタッフとしての奉仕がありと、めまぐるしく多忙な時期でした。時間的余裕がないばかりか、初の大きな論文をどのように書きまとめてよいかも分からず、今思えば随分無謀な行動であつたと思います。しかし私には、この論文を書くことが私に与えられた使命であり、「主のために」書くように導かれた論文である限り、必ず神様が祝福し、神様の栄光のために用いてくださると確信していました。それ故、論文だけに集中できないジレンマの中でも、希望を捨てず取り組むことができました。幸い、新島研究会の先生方の励ましや、イエス会の先輩方の助言、次兄の具体的な示唆など必要な助けを与えられ、一二月半ばによく提出できました。

この論文は最初、「女子大の礼拝の歴史」について書く予定でした。しかし、資料に限りがあると知って、タイトルを「同

志社女子部におけるキリスト教主義教育」として幅広く調べてみました。すると、一八七七(明治十)年の開校以来、毎朝の学内礼拝が様々な闘いの中で守られてきたこと、教師陣の熱心な働きかけによってクリスチャンとなる学生が次々起こされていったことなどを知らされ、胸が熱くなりました。そして、創立者の一人であるデイビス宣教師の「同志社は神によりてたち、神によりて栄ゆる、真に神の学校なる」との言葉も心に迫り、改めて同志社に導いてくださった神様に感謝を捧げたのでした。

さて後日、この論文は一位入選作として選ばれ、新島研究会でその内容を発表する場が与えられ、しかも、「新島研究」という雑誌にも全文を載せていただくという、思いがけない恵みにあずかりました。学長からお祝いのお便りを戴いたり、学内礼拝や、宗教部主催のリトリート、イエス会、シャロン会の集まりなどでも、その恵みを分かち合う場が与えられるなど、この論文の反響は私の願い・予想以上に大きいものでした。

また私自身、「キリスト教教育」への関心がさらに高まり、三年後の留学へとつながることを思うとき、やはり、神様の不思議な摂理の中に導かれていることを感慨深く思わざるを得ません。

【清教学園での働き】

一九九二(平成四)年三月、無事同志社女子大学を卒業し、四月には大阪府堺市の泉北ニュータウンにある、大阪府雇用促進事業団が経営する独身寮に住まいを与えられ、初めての一人暮らしが始まりました。次姉がすでに結婚して同じ堺市内に住んでいたため、新しい生活を始めるに当たっては、様々な助けをもらい、大変心強かったことを印象深く思い出します。

さて、待ちに待った清教学園での初めての出勤日、新任教師研修会でのことです。敬虔なクリスチャンの中山校長先生が、ル力による福音書十五章の有名な「一匹の羊のたとえ」を引用されました。そして、この学校は神様によって創設された学校であり、イエス様が一匹の迷える羊を捜し求められたように、私たち教師も生徒一人一人の個性を認め、与えられた賜物を生かす教育が委ねられています、と熱心に語られました。

学園の玄関内に大きく掲げられた額には、「神なき教育は知恵ある悪魔を造り、神ある教育は愛ある知恵に人を導く」と書かれてあります。清教学園がこの言葉をモットーに、毎朝のクラス礼拝に始まり、週に一度のチャペルでの学年合同礼拝、聖書の授業はもちろん、年に二回の宗教強調週間での

ゲストスピーカーによる講演など、キリスト教主義教育を熱心に実践している様子を目の当たりにして、この学校に導かれて感謝したのは言うまでもありません。

早速私も、宗教部のお手伝いとして、聖書研究会で生徒たちと祈り合い、御言の恵みを分かち合う交わりを始めました。また、清教学園のルーツを探る学外での探検活動や、宗教部主催の夏期学校ワークキャンプでお世話役をさせていただきました。

思い出深いのが、二年目の秋の宗教強調週間のゲストとして、小坂忠さん、岩淵まことさんに学園にきていただき、ゴスペルコンサートを開催したことです。この時は、正式な宗教部担当の教員として、いろいろと準備に携わることができました。コンサート後に私が準備して行ったアンケート調査で、中学生も高校生も、お二人の歌とキリスト教に出会った体験談に感動したと多数感想を寄せてくれて、コンサートを祝い用いてくださった神様に感謝を捧げました。

また、ある日の中学合同礼拝では、第一ヨハネ四章七〜十二節から、「ここに愛がある」と題して奨励の機会が与えられました。この時私は、自分自身が中学二年生の時に読んで、涙がポロポロ出るほど感動した「荷籠をかついで」という本の紹介をしました。いつも意地悪をするクラスメートが川でお

ぼれているのを助けるため、川に入って命を落としたクリスマスチャン少年の実話に基づくお話です。イエス様の命がけの愛を知っていたからこそ、この少年はこのような勇敢な行動ができたのではないか、私たちを生かすのも神様の愛だけであり、ぜひ在学中に神様の愛に触れてくださいと伝える機会となりました。

このような学校の働きかけを通して、教会に導かれる生徒も起こされていきました。実際、私が清教に勤めていた間に、関わった生徒だけでも四人が主の救いにあずかり、それぞれ教会に導かれ、受洗してクリスマスチャンとして喜んで歩み始めました。神様の御業を大いに崇めたことは言うまでもありません。

もちろん、私の本業は英語教育ですが、最初の年は、高校生全九クラスの内六クラス(週一八時間)の英語グラマーを担当しました。受験指導に熱心で、進学実績も高く評価されている学校故の厳しい指導も委ねられていましたので、私も余念なく準備して授業に臨んでいました。ほとんどの生徒が進学を希望しているだけあって、真面目で一生涯懸命学に励む生徒ばかりで、授業も順調に進めることができました。学園全体の教育の質の高さを感じることができました。さらに、教師陣の半数近くが二十代、三十代であり、学園をこよなく愛

し、生徒たちのもてる力を精一杯引き出してあげようという熱意を持った先生方に囲まれ、非常に活気のある教育体制であると感じ、その中に加えていただけたことを心から有り難く思いました。

二年目には、常勤講師となり、クラスの副担任やクラブ活動の指導などの仕事に加わりました。高二、高三の両方のクラスを受け持ったので、教科指導の仕事はさらに増え、週十八時間の授業に加えて、放課後の補習や高三生の個人的な指導も担当するようになりました。さらに三年目は、そのまま持ち上がりで高三の学年団に所属し、受験指導の最前線で教えることになりました。夏休みや冬休みも返上で補修を行い、私も生徒たちの意欲に応えて精一杯の指導を行っていました。この二年目からの私の生活スタイルは、さらに学園中心となり、毎朝三時～五時起き、六時に家を出て、七時過ぎに学校に着くなり、授業の準備をし、ほとんど休むことなく教室と英語科準備室の間を行き来し、祈祷会に行く水曜日以外は、大体夜七～八時まで学校に残り、その後帰宅でしたので、一日十二～十三時間労働のハードな毎日でした。

休日も自室でゆっくり過ごすタイプではありません。教会の奉仕と交わり、K G K卒業生会やJ C F N(海外で救われ日本に帰国したクリスチャンのフォローアップグループ)関西

地区のお世話役としてのご奉仕、また、家族や親しい友人たちとの交わりなど、今しかできない奉仕や交わりを大切にしています。結果として退職するまでの二年間、私は関西のあちこちに顔を出すような超多忙な日々を送っていたのです。その忙しさの中で支えられたのは、毎朝の主との交わりでした。朝必ず三十分の時間を取り、聖書を開き、その日に与えられた御言をノートに書き留め、祈りの時間を持つていました。

「わたしから離れては、あなたがたは何一つできないからである」(ヨハネ十五・五)。

「私たちは、真理に逆らっては何をする力もなく、真理にしたがえば力がある」(第二コリント十三・八)。

本当にこれらの御言が真実であること、神様と共に歩ませていただいている、私は主にお従いしているという確信と平安がなければ何もできないこと、特に教師という立場で生徒たちの前に恐れなく立つことはできないとつくづく実感できました。

「ほめられても、そしられても、悪評を受けても、好評を博しても、神の僕として自分をあらわしている」(第二コリント六・八)。

この御言は、人からほめられたいという虚栄心の強い私に

絶えず心に迫ってきたお言葉です。人の前ではなく、神様の前にどうあるべきか、そして、「自分が何のために、誰から遣わされてここに立っているのか」を、いつも思い出させてもらえました。

さらに、祈りの生活の充実が、私にその日その日の活力を与えてくれたと思います。学園での毎日は本当によく祈りました。早朝学校に着いてから、授業前、放課後、帰りの電車を待つ駅でひたすら神様の助けを祈り求めました。「神様、今日も一つ一つの授業やなすべき業を導いて下さい。愛と誠実を込めて生徒たちに接することができませんように、彼らのニーズに応えることができませんよう助けて下さい」「主よ、もうたくたですが、一日を守り導いて下さいましてありがとうございます。無事に家にたどり着くことができますようお願いいたします」というように、祈らなければやっていけないことをつくづく実感させられたのです。

「神の恵みによつて、わたしは今日あるを得ているのである」(第一コリント十五・十)の御言通り、正に神様なくしては生きていけない者であることを確認させていただいたのは、大きな特権でした。

【堺栄光教会に導かれて】

堺市への転居と同時に、教会は次姉一家が出席していた堺栄光教会に導かれました。初めて母教会を離れた私でしたが、牧師の高橋先生ご夫妻を始め教会の皆さんがとても温かく迎えてくださり、早速教会学校のお手伝いや、青年の交わりに加えていただき、大変恵まれた教会生活を送ることができました。

まず第一に、これまで牧師の子どもとして教会に住むことが当たり前であった私にとつて、電車を乗り継いで約四十分かけて教会に通うのは初めての経験であり、自らの意志で神様に従っていく信仰の自立が求められ、非常に幸いであつたと思います。

また、私が導かれた当時、教会学校にはクリスチャンホームの子どもたちがたくさん通っていました。教会では、この子たちをなんとか信仰に導きたいとの切なる願いが起こされ、特に教会学校教師として御用されていた方々が重荷をもち、時間と労力を主に献げてその御用に全力で当たっておられました。その結果、神様は大いに教会学校を祝福してくださり、次々と受洗者が起こされ、後にはそのメンバーが青年時代に教会学校の教師としてご奉仕するようになり、信仰の継承が確実になされていったのです。私もその教師の一員として、神様が大いに祝してくださった様子を見せていただき、私が

後に学ぶ教会教育の重要性を改めて認識させていただく機会となりました。

青年会では、少人数ならではのアットホームな交わりをもつことができました。いつも共に賛美し、それぞれの恵みや抱えている課題を語り合い、お互いのために祈り合う、正に初代教会に見られるコイノニヤ(あらゆるものを共有する交わり)が与えられました。当時のメンバーは現在日本各地に散らばっていることを思うとき、あの時期にこの教会だからこそ出会えた、貴重な仲間たちであったと知らされ、私もまた神様の奇しき摂理の中に置かれていることを改めて実感しています。

さらに堺栄光教会では、礼拝前にワーシップソングを数曲賛美し、主を待ち望む姿勢を整える時間が設けられていましたが、私もソングリーダーのご奉仕が与えられ、賛美の恵みの素晴らしさを経験させていただきました。

礼拝奏楽者の一人として月に一度ご奉仕させていただいたのも、栄光教会が初めてでした。私の場合、正式にピアノを習ったのは、小学一年生の一年間のみでした。しかしその後、小学五年生の時に、長兄と争うように「バイエル下巻」を自分なりに練習し始めました。中学一年生の時にはピアノを弾くのが大好きになり、聖歌が弾けるようになったらという

思いから、独学で一曲ずつマスターしていきました。高校生の頃には、祈禱会の奏楽を隔週でさせていただけるようになり、主に感謝しました。ただし、基礎ができていないのがネックであり、自ら進んで奏楽をしたいと申し出るのはおこがましいと常々考えていたのです。

それ故、神様が後押ししてくださり、礼拝や祈禱会、教会学校などで、次々と奏楽の奉仕が与えられたのは、正に神様の憐れみによると感謝に絶えません。後にシカゴのウイネットカ日本語キリスト教会で毎週礼拝奏楽の御用にあずかることができたのも、この堺栄光教会での経験があったからこそであり、ここにも主のなざる導きの素晴らしさを思います。

【留学への道】

こうして堺での三年間、学園での働きと共に、教会でもキリスト教教育を実践する場が与えられ、私の内にさらに幅広く学んでみたいという願いが強まるようになりました。

実は、就職して一カ月が過ぎた頃、ある日の電車の中で、「あなたはこれから何をもって私に仕えるのか」との神様からの語りかけを聞きました。それ以来、私のライフワークは何か、という疑問がいつも心の片隅にあり、将来のヴィジョンを示してくださいと祈り求めていました。

そんな中で、一九九四(平成六)年四月のある日のデイポーシオンで、創世記十二章一、二節の御言が心に迫り、すぐに「留学」という二文字が頭に浮かんできました。

「時に主はアブラムに言われた、『あなたは国を出て、親族に別れ、父の家を離れ、わたしが示す地に行きなさい。わたしはあなたを大いなる国民とし、あなたを祝福し、あなたの名を大きくしよう。あなたは祝福の基となるであろう』」。

学生時代から、私の周囲には留学経験のある牧師先生、大学の先輩、同級生の友人が多数いて、「留学」をとっても身近に感じていましたが、いざ私自身にあてはめると、経済的にも能力的にもとても無理、と判断していました。しかし、学校という教育現場で実際に働いてみると、自分自身の英語力の乏しさはもちろん、理論的にも勉強不足であり、今後十年、二十年と学校や教会でキリスト教教育に携わりたいのであれば、十分な学びと訓練が必要ではないかと示されました。そして、キリスト教教育に関して理論的にも実践的にも研究の進んでいるアメリカでじっくり学ぶべきだと思い、ようやく「留学」が神様の御心にかなう道であるとの確信が与えられたのでした。

しかし、清教学園でも堺栄光教会でも責任ある働きが与えられ、今この場を離れることに抵抗を感じた私は、すぐには

神様の導きに素直に従えませんでした。いろいろと断る理由を挙げては、「留学なんてとても無理です」と言い続けていたのです。しかし、神様はあわれみ深く私を取り扱ってください、再度創世記の先ほどの御言を通して、この留学が私のみならず、他者にも祝福となることを示してください、自分の手に握っているものを主の手に委ねるように導いてくださいました。「神様、あなたの御心のままに私を導いてください」と明け渡す祈りを捧げてから、不思議なように留学への道が開かれていきました。

その年の秋には、キリスト教教育のコースがあるアメリカ・カナダの神学校や大学の学校案内を取り寄せ、いろいろと検討していく中で、最終的に受験する学校をケンタッキー州のアズベリー神学校とイリノイ州のトリニティ神学校の二校に絞ることにしました。どちらも福音主義の神学校であり、キリスト教教育を学ぶ専門機関として名高いこと、そして、日本人の牧師先生たちも多数学びに行かれていて馴染みの深い学校だったからです。特にアズベリーは、私の所属する教団の先生方が数人学ばれ、アットホームで教育熱心な神学校と聞いていました。トリニティも以前からよく名前の聞く神学校でしたが、私の尊敬する東京聖書学院長の小林和夫先生や、聖書神学舎の内田和彦先生が学ばれた超一流の学校と思

い込み、だめでもともと、受験するだけしてみよう、でも恐らくアズベリーに行けるだろうと思っていました。

ところが、神様の計り知れないご計画は私の予想に全く反するものでした。清教学園では、英語科で新任の教諭が必要となり、主任の先生が、「私が推薦するから、ぜひ学園に残つてこのチャンスに専任教諭になりなさい」と勧めてくださいました。もし、私に信仰がなければ、すぐにその話に飛びついたことでしょう。しかし、まだ行先は分からなくても、神様が留学の道を開いてくださるといふ確信があつたため、すぐに辞退できました。

こうして一九九五(平成七)年三月、清教学園を退職し、堺の自室も整理して実家の明石に戻りました。これまで同様、留学に向けて英語の勉強を続けながら、三月末に両方の神学校に提出した入学願書の結果が来るのをひたすら待ち続けました。

そして、忘れもしない六月九日、不思議にもアズベリー神学校とトリニティ神学校の両方から同時に返事が届いたのであります。結果的には、アズベリーは私のTOEFL(トーフル)という英語能力試験のスコアが最低基準点の五五〇点に達していないことを理由に、入学許可はできないとの返事。一方、トリニティからは喜んで入学を許可するとの手紙が入ってい

ました。

この返事が来る前に、はからずもトリニティのキリスト教教育を学び、卒業して日本に帰国してから、教会の教育主事として働いておられる複数の先生方との交わりが与えられていました。トリニティには、キリスト教教育の第一人者の先生も教えておられるし、教師陣の層も厚く、非常にいい学びが期待できる学校であることを知らされました。そこへ、トリニティからのOKサインをいただき、これが神様からの答えであると確信し、主がはつきりと行くべき道を示してくださつたことを心から感謝しました。

【トリニティ神学校での学び】

こうして、留学先が決定し、早速渡航準備に入った私ですが、渡航前に「見えざる御手に導かれて―留学ニュースレター第一号―」を発行し、教会の皆さんや友人に配布しました。留学が神様の御業であるとはつきり証ししたかったからです。神様がこのニュースレターを祝してください、大きな反響を呼ぶ結果となりました。教会の主にある兄弟姉妹を始め、友人の多くが、祈りのサポートと共にニュースレターの郵送費として尊い献金をしてくださいました。後には、父が「金井栄子支援会」という口座を設けてくれましたので、たくさんの

方々が経済的にもサポートしてくださいました。神様が思いがけない所でも留学の道を祝福してくださいましたことは、本当に感謝に絶えません。結果として、この「留学ニューズレター」は不定期でしたが、トリニティ神学校卒業後の第十一号まで発行でき、多くの方々に留学中に私に与えられた数々の恵みをお伝えすることが許されたのでした。

さて、七月半ば過ぎにアメリカに旅立った私は、まず、JCFNの修養会に出席するため、ハワイのホノルルに五日間滞在しました。その後、カリフォルニア州立大学サン・ディエゴ校での四週間にわたる英語総合プログラムに参加し、その間、同じ教団出身の宣教師であられる渡辺由美子先生との交わりが与えられました。

サン・ディエゴでは、スカイライン・ウエスレアン・チャーチという、普段の礼拝出席者が約二五〇〇人という大教会を見せていただきました。その教会の会堂は約一〇〇〇人収容でき、三回に分けて礼拝が行われていました。教会学校の成人科クラスだけでも十五あると聞き、その規模の大きさには驚きました。と同時に、それほどの大教会にも関わらず、十五人の牧会スタッフによる一致協力したチーム牧会のお陰で、少数数の交わりも盛んに行われていて、神様がこの教会を大いに祝福してくださっていることを知らされました。実

際、全米でも成長している十の教会の一つに数えられるそう
で、私もまた、大きなチャレンジを受けたのでした。

八月末には、サン・ディエゴを離れ、カナダ・アルバータ州の神学校で先住民宣教(イヌイット宣教)への重荷を持ち、その学びをしている長姉一家を訪問し、一週間後ようやくアメリカ・イリノイ州シカゴに到着、空港ではトリニティで先に学んでおられた日本人留学生の先輩方が出迎えてくださいました。

神学校が所在するディアフィールドは、シカゴ・ダウンタウンから北へ車で約四十分位置する落ち着いた郊外の町でした。キャンパス内は緑の濃い森の中に建物那点在するといった環境の良さで、到着して翌日、散策に出かけた私はすっかりこのキャンパスが大好きになりました。また、すぐに学生寮に入り、最初はアメリカ人学生と同室の二人部屋、一か月後には思いがけなく一人部屋が与えられ、勉強に専念できる環境が整えられたことも感謝なことでした。

そして、九月十八日晴れてトリニティ神学校大学院文学修士課程キリスト教育専攻の学生として、早速講義を受け始めました。最初は、どの授業を選んだらよいのかも分かりませんが、サン・ディエゴで思いがけず出会った、同じトリニティの新生入生であるリンダという友人が事細かに教え

てくれたお陰で、無事秋学期をスタートすることができたのでした。

この友人は、ロシアで一年間の短期宣教師として奉仕したことがあり、その際日本にも立ち寄ったという、アメリカ人にしては珍しく海外経験の豊富な人でした。非常にお世話好きであり、しかも留学生の言葉の限界をよく理解してくれて、どれ程助けももらったか分かりません。さらに、海外宣教への熱い思いをもつてよく祈る人でしたから、リンダとの主にある交わりを通して、成熟したクリスチャン像を見せていただいたことを心から主に感謝しました。

また、韓国や香港、台湾など同じアジアからの留学生と知り合い、厳しい勉強の中にも、お互いに助け合い、励まし合えたことは実に幸いでした。もちろん、日本から学びに来ていた学生の先輩方や、そのご夫人方が、学びにおいても生活面でも、また霊的にも、祈り支え、具体的に助けてくださったことは本当に主の大きいなる恵みでした。

さて、さすがに神学校の学びの多さには圧倒されるものがありました。毎週提出が求められるレポートが少なくとも三、四つあり、読み進めるべき課題図書が十数冊あり、とにかくひたすら勉強の日々でした。しかし、その内容はどれも素晴らしい、私が学びたかった聖書の基礎的知識が得られたり、

専門として学ぶキリスト教教育の全体像が見えたり、青少年伝道の授業では、早口の教授の英語が聞き取れず苦心するものの、私自身が中高生時代に教会で経験したことが大いに役立つたりして、心励まされることも度々ありました。

特に幸いなのは、トリニティで教えておられる先生方が例外なく、信仰と愛に満ちた、素晴らしい神の器たちであったことです。毎回の授業前に祈られる祈りを聞くだけでも恵まれ、時には聖会に出て、神様の聖なる臨在に触れるかの如くに、神様の恵みが余すところなく語られるような授業もありました。先生方が常に「神の僕」として、主の前に謙遜さと忠実さを失わない姿勢を教えられ、このような出会いを与えてくださった主の御名を崇めざるを得ませんでした。

【ウイネットカ日本語キリスト教会に導かれて】

シカゴに到着して最初の二か月は、聖日ごとに、シカゴ周辺のアメリカ人の教会、いくつかの日本人教会をまわりました。そして十月末、日本人教会の最後としてトリニティ神学校から一番近い(と言っても車で二十分の)ウイネットカ日本語キリスト教会の礼拝に初めて出席しました。二十人程が集うアットホームな、この教会の牧師の安納先生は、元KGGKの主事をされたトリニティの卒業生でした。先生ご夫妻がとて

も温かく迎えてくださり、一度足を踏み入れただけで、私が通う教会はここだとの確信が与えられたのでした。

留学先が決定してから、最善の教会に導かれるようにと祈り続け、親しい方々にも共に祈っていたいていましたが、神様は見事に祈りに答えてくださり、私をウイネトカに導いてくださいました。

神様は安納先生を通して、トリニティの後輩である私に、神学生としての貴重な経験の場を数多く与えてくださいました。礼拝の奏楽を始め、賛美タイムの選曲・リード、クリスマスとの聖歌隊の賛美指導、教会学校での奉仕、婦人の皆さんとの聖書の学び、夏のバイリンガル・キャンプでの奉仕など、専門であつた教会教育はもちろん、教会音楽、スポーツ伝道においても貴重な訓練をいただいたことは感謝に絶えません。その中でも、後半の一年半、中高生クラスを担当させていただき、私にとつてかけがえのない経験となりました。聖書の学びの力キキラムを自分なりに組み立てて、毎週中高生たちと共に御言を学んだこと、そして、若い魂の救いと信仰の成長のために心をこめて祈り、働きかけ続けることの喜びを体験させていただき、フルタイムの献身者として歩み始める大きな転機が与えられたように思います。

また、安納先生ご夫妻に公私共に様々な面でご指導とお交

わりとサポートをいただいたことも、本当に感謝に絶えませんが、特に体調を崩し、やむを得ず休学しなければならなかった時に、安納先生や奥様の恵子姉が親身になってお世話くださったことは、病身の私にとって大きな励ましでした。安納先生からは、牧会者の喜びと困難、両面を教えていただき、私にとつて大きな特権でした。

さらに、教会の主にある兄弟姉妹と幸いな交わりが与えられました。思い返せば、教会までの送迎を喜んでしてくださった方々。自宅に度々招いては、美味しい日本食と楽しい交わりを用意してくださった方々。ハウスシッターという貴重な経験を与えてくださった姉妹たち。病気休学中に喜んで自宅に迎え入れて、お世話くださったご夫妻。共に祈り、賛美し、御言葉を学び、恵みを分かち合った方々。お一人一人を通して、神様の愛の深さを体験させていただきました。

こうして、シカゴでの二年八か月の間、恵みに満ちた教会生活を送らせていただき、主に心から感謝する者です。

【病気を通しての恵み】

話はまた前後しますが、留学生活も神様の憐れみにより、無事最初の学期を終えて、順調に次の冬学期を迎えたと思つていた矢先の出来事でした。三八度の高熱が一週間続きまし

たが、中間試験の真つ最中であり、気を緩めることも、身体を休めることもしなかつた私でした。そのためか、翌週の月曜日の朝、起きあがろうとしても身体に全く力が湧いてこないのです。無理矢理身体を引きずるようにして教室に入ったものの、授業の内容が頭に入らないので、結局途中で部屋に戻りました。ベッドに倒れ込むように横になると、後は一切起きあがれない程の疲労状態でした。病院で診察してもらったところ、「モノ」(Mononeucliosis)という、学生の間で流行していたウイルスにかかっていることが判明し、急遽二週間の休学をすることになりました。幸い、教会員のご夫妻のご厚意で、その二週間泊めていただき、ゆっくり静養に専念できるとのこととご配慮をいただきました。

しかし、これまで健康に自信のあった私にとって、歯磨きをするたった五分ですら立ち続けられない、そんな自分の姿を受け入れることはとても困難なことでした。三七度台の熱が一向に下がらず、吐き気や目眩、ひどい頭痛と関節の痛みが断続的に続くのも初めての経験であり、体がベッドに沈むようなひどい倦怠感に悩まされ、かなりもがき苦しみました。そのため、「神様、なぜこんな苦しい目に遭わせなされるのですか。留学があなたの導きによると確信したからこそ、私

ながらに神様に訴えていました。

しかし、これは愛なる神様からの実に尊い訓練期間でした。この後の半年間の静養を通して、自らの弱さ、無能さを自覚してはじめて、私の父がメッセージでよく語っていた、「自分の力で生きていくのではない。神様によって生かされているのだ」ということがよく分かりました。しかも与えられた人生は、自分の計画を実現するためのものではなく、私を愛し、尊い命をもって贖って下さった主イエス様のための人生であると悟ることができました。

また、主と二人きりになれた療養生活を通して、私の価値観は大きく転換しました。安納先生が病人の私を訪ねてくださった時、次のような事を言われました。「金井さん、人間はヒューマン・ビーイング(Human Being)であって、ヒューマン・ドゥーイング(Human Doing)ではありませんよ。これがどういう意味か分かりますか。金井さんはドゥーイングの人だけど、今はゆっくり休んでください」と。

この先生の言葉を通してようやく、主なる神様は、私の能力(ドゥーイング)ではなく、私の存在そのもの(ビーイング)を喜んでくださるお方であることに目が開かれました。たとえ何も出来ない私であっても、そのままの私を愛してください。心

は喜びに満ちあふれました。そして、能力主義であった私の、自分自身や人に対する見方が変えられていったのでした。

結果として四月からの春学期は、留学生にも関わらず、特別に病気休学が認められ、学外のアパートにアメリカ人の友人と共に移り住む道も開かれ、ゆつくりと体を休める時と場所が備えられたのでした。その間、以前から練習を始めていた車の免許も取得でき、安納先生のご厚意で教会の車を使わせていただけることになり、体調のよい時には自分で運転して教会に行けるようになり、神様の憐れみと感謝しました。

五月半ばには、心配していた両親が日本に一時帰国して、自宅で静養するよう手配してくれたお陰で、約二か月実家で療養できました。その際、明石市民病院で受診し、私の病気が「慢性疲労症候群」であるとの診断を受けることができたのです。日本ではまだ厚生省が認めたばかりの病気でしたが、アメリカでの研究経験をお持ちの医師に診ていただいたお陰で、ようやく私の病名が分かりホッとしました。しかし、薬による治療法がなく、ただひたすら栄養と十分な睡眠を取る以外に回復への道がないことも知らされました。

九月から復学を願っていた私は、少し体調もよくなりかけていたため、七月半ばには再びシカゴに戻りました。幸いなことに、安納先生が「慢性疲労症候群」に関する情報を集め

てくださっていました。私も女性の医師で自身もこの病気になり、セルフケアをすることで病気が完治したという方の書いた本を手にし、早速その本に勧められている内容を実行に移しました。一番影響を受けたのが食事療法です。その本には、ビタミン剤を活用することと、胃の消化の働きを妨げたり、鈍くさせる食品(赤身の肉、乳製品、小麦粉で作られているもの、コーヒー等)を避けるようにと書かれていましたので、私は忠実に守ろうと、毎日魚や野菜中心のバランスの良い食事を取るように心掛けました。

まだまだ身動きが自由に取れない日も多くあり、落ち込んだりもしましたが、教会の皆さんや、トリニティの日本人学生はもちろん、アメリカ人学生や留学生の友人たちが、私の病気の回復のために熱心に祈り続け励まし続けてくださいました。どれほど私の慰めとなり、大きな励みであったか分かりません。彼ら一人一人の心のこもった祈りを聞く度に、神様の愛の大きさを思い、感謝で一杯になりました。

「苦しみにあつたことは、わたしに良い事です。これによってわたしはあなたのおきてを学ぶことができました」

(詩篇一一九・七一)

この御言が真実であることを、この時私は病氣を通して知ることができました。

【宣教への情熱】

こうして、徐々に体力が回復し始めた一九九六(平成八)年秋学期に復学し、再び勉学に勤しめる身の幸いを味わうことができました。この学期では、専門のユース・ミニストリー(青少年伝道)の中でも特に、青少年が抱えている問題について調査し、様々な悩みをもつ中高生に、どのようにアプローチし、福音を伝えていくべきかを多角的に学ぶことができました。

私自身が思春期だからこそ直面した問題を思い起し、この課題をさらに深く探っていきたいという願いが起こされました。その結果、一年後には「友人関係で悩む日本の中高生に教会としてどう取り組むのか」(“Helping the Struggling Adolescent with Peer Pressure in Japan.”)というテーマで卒業論文に取り掛かることになったのでした。

さらに翌年の春学期には、「キリスト教弁証論」を、その次の秋学期には、「インターンシップ(教会奉仕)」と「成人教育」について学び、未信の友にいかに関心を分かりやすく伝えることができるのか、そして、救われたクリスチャンが霊的に成長していくために、教会ができることは何であるのかを、様々な視点から学ぶことができ、教会教育へのさらに熱い思いが与えられました。

この間、神様は二つのキャンプを通して、私の内に宣教への情熱をも与えてくださいました。その一つが、一九九六年の年末に行われたアーバナ96学生宣教大会であり、もう一つが、一九九七年の七月に参加したバイリンガル・キャンプです。

アーバナ96学生宣教大会とは、アメリカの学生伝道団体が主催する、三年に一度のビッグ・イベントです。アメリカ国内ばかりか、世界の様々な国から一万九千人もの参加者が集まり、その数にも驚きましたが、その全員が入るホールで、立ち上がって声高らかに神様を賛美する光景は圧巻でした。肌や髪の色、国籍、言葉、文化、習慣など全く異なる人達が、ただ主イエス様の御名によって一つとされているのです。

「あなたはほふられ、その血によって、神のために、あらゆる部族、国語、民族、国民の中から人々をあがない、わたしたちの神のために、彼らを御国の民とし、祭司となさいました」(黙示録五・九、十)。

正に、この黙示録に書かれている光景を思わせるような、主の臨在に触れ身震いすると同時に、私までもイエス様の尊い贖いの故に主の民に加えられている、その感動で心満たされるような思いがしました。

また、これほどの大きな大会にもかかわらず、非常に組織

だった運営がなされ、リーダーとしてご奉仕した日本人の小グループでも、御言を中心とした主にある交わりが大変祝福されました。大会の終りには、信仰を決心した学生が一八〇人、宣教師として海外で伝道したいという願いが起こされた学生が約九千人いたそうです。神様が参加者一人一人の心に働きかけてくださり、福音の力強さを体験させてくださった、そんな恵みの大会でした。

さて、もう一つのバイリンガル・キャンプは、安納先生が兼牧されていたノースウエスト日本人教会主催の小中学生向けのキャンプです。シカゴに住む四十二人の子どもたちが参加したもので、アーバナ宣教大会とは規模も異なりましたが、スタッフとして参加した私にとっては忘れることのできない恵みのキャンプでした。

参加した多くの子どもたちが、聖書のお話を聞くのは初めてという状況でしたが、広いキャンプ敷地内を使って、思いっきりスポーツやゲームで体を動かし、十一人のスタッフも一緒になって遊ぶことで、子どもたちの心がみるみる内に開かれていく様子がよく分かりました。そんな中で天地を造られた神様の話が語られ、熱心にお話を聞き、自分の言葉で祈ることを学んでいく、子どもたちの純真な心に胸が打たれる思いがしました。

私は「歌のお姉さん」として終始賛美をリードし、さらに二度聖書のメッセージを語る機会が与えられました。準備不足を感じ、体調もあまりよくなかった私は、キャンプの間中もただひたすら神様に、「どうぞ子どもたちに分かりやすく福音を語らせてください」と祈るしかありませんでした。神様は実に恵み深く、その祈りに見事に答えてくださいました。

「わたしと一緒に喜んでください。いなくなつた羊を見つめましたから」(ルカ十五・六)。

「見よ、世の罪を取り除く神の小羊」(ヨハネ一・二九)。
これらの二つの御言を中心に、OHPも使用しながら、造り主なる神様の愛とイエス様の十字架の意味を、喜びにあふれて語らせてくださいました。決して話上手ではない私が、次々と例話や自らの救いの証を熱心に語れたのは、本当にご聖霊が働いてくださった御業と云うほかありません。最後の招きの言葉に応じて、ほとんどの子どもたちが手を挙げる姿を見て、神様の御業に驚嘆するばかりでした。こんな小さな者をも主の御用に用いてくださる主の御名を大いに崇めました。と同時に、この四十二人の子どもたちの心に蒔かれた御言の種が成長し、豊かに実を結ぶよう祈らずにはおれませんでした。

【直接献身への招き】

さて、健康が回復し始め、ようやく卒業の可能性が見えてきた翌年の一月に、私に与えられた次の課題は、卒業後の進路を祈りつつ選択することでした。トリニティに来る前の私は、卒業後は再び学校教育に携わり、教会では教育主事として働きたいと考え、自分なりのヴィジョンを抱いていました。

しかし、トリニティでの神学の学びや、教会での奉仕と主にある交わりは、全時間全生涯を献げて、フルタイムで主にお仕えしたいという私の願いを強める結果となりました。自分の内に与えられた宣教への情熱に気付き始めたのです。私はこれまでの計画をすべて白紙にして、神様の御心がどこにあるのか祈り求めることにしました。

しかし、この白紙にする作業は当時の私にはとても辛い選択でした。なぜなら私には、大学四年生の時からアメリカ留学中も、遠距離交際を続けていた人がいたからです。私とは別のミッション・スクールで教諭として働いておられました。が、学生時代から非常に尊敬していた先輩です。同じ信仰に立ち、教育という働きもヴィジョンも共有でき、御心なら結婚をと願っていましたから、この交際にピリオドを打つことに躊躇し、悩みに悩みました。やがて、彼に別れを告げるこ

とが精神的苦痛となり、トリニティに学びに来ていた他の日本人男性に頼ろうとしたり、学校内の駐車場で事故を起こしたりと、次々とトラブル続きで、主の前に深く悔い改めることになりました。

三月に彼がシカゴに来てくれて、十分話し合う時間が与えられました。私は正直に、先輩後輩関係が抜けきれず、結婚に対する確信が得られないこと、そして、直接献身に導かれているように思うことを話し、相手も納得はできないが理解はできると返答してくれました。もちろん、それからの一年は彼も苦しんだと後で聞き、私も相手を傷つけたことで耐えられない負い目を抱くようになりました。彼ばかりか、そのトリニティの友人も、私に振り回されることを恐れ、全く疎遠状態となりました。自らの弱さの故に、周囲を傷つけてばかりで、本当に苦しい思いをしました。イエス様の命懸けの愛を知らなかったら、ミシガン湖で命を落としていたかも知れませんが、そんな試練の中でも私を支えていたのは、やはり、十字架に現わされた神様の深い愛でした。まだまだ専念すべき学業も残されていましたので、神様の憐れみで、少しずつ少しずつ精神的にも自分を取り戻すことができました。

夏のバイリンガル・キャンプでのご奉仕の後、両親がゲストスピーカーとして招かれたカナダ日系人キャンプに参加し

ました。そこでカナダの長姉一家とも久しぶりに再会し、キャンプで様々な世代の方との出会いと交わりが与えられました。その後、両親はシカゴを訪れ、ウイネットカとノースウエスト両教会で礼拝の御用を果たし、教会の方々との交わりも祝され、感謝の内に日本へと帰って行きました。

一九九七(平成九)年八月一七日のことです。私はシカゴのオヘア空港に見送りに行きました。両親とも別れて、私はまた一人になるなあ、とふと淋しい思いがこみ上げてきた、正にその時です。「あなたは、わたしに従ってきなさい」(ヨハネ二一・二二)との御言が心に響いてきたのです。私は、イエス様が私の後ろに立っておられるのかと思ひ、思わず後ろを振り向きました。お姿はもちろん見えないのですが、確かに招きの言葉を聞いたのです。これこそ、この半年間ばかりか、あの高校三年生の夏に主の御心を求めた祈りの答えではないか、しかも、自らの罪深さ、弱さ、足りなさに気付かせていただいていたので、こんな者にも直接献身するようにお声をかけてくださったと、心は喜びで満ちあふれました。その場で、「主よ、感謝いたします。あなたに従う以外に私の生きる道はありません。どうぞ御旨のままに導いてください」との祈りを捧げました。

さらに祈っていく中で、卒業後は日本の神学校で学びたい

との願いが起こされました。そして、特別な導きがない限りは、自分に与えられている霊の遺産を大切にすべきだと示され、関西聖書神学校に入学を希望しました。神学校から特別なご配慮をいただき、秋に一時帰国した際に、学科試験や面接を行っていたいただき、晴れて四月には入学という運びとなりました。

トリニティでの残る半年は、学びの集大成としての修士論文を書き始めながら、病氣を通して、また、試練を通して深くかみしめることができた神様の大きい愛を伝えたい思いで一杯でした。

九月に、病氣で苦しむ友人を訪問する目的で日本に一時帰国したときも、その友人の回復のために祈ることはもちろんですが、この友人がなんとか主イエス様の救いにあずかり、神様のご愛の御手の中で安らいでほしいと願いました。

シカゴに戻り、思いがけなくシカゴ日本人補習校の高等部で、英語を教えるよう導かれた時も同じでした。主にアメリカ駐在員の子どもたちに、日本の大学を受験するための受験英語を教える傍ら、生徒たちもまた神様から愛されている存在であること、そして、聖書の視点から「人の命は地球より重い」というメッセージを贈ることができました。学業との両立が難しく、僅か三ヶ月で仕事を辞さなければならなかったの

ですが、私にとって大変意義深い証しの機会となりました。

翌年の二月には、論文の仕上げの真最中でしたが、同志社同窓会シカゴ支部の集まりで、母校の創立者・新島襄先生の生涯と信仰について講演する機会が与えられました。以前書いた新島論文の内容にも触れて、神様がこんな小さな者の生涯をも不思議なる御手をもって導き続けてくださっていることをお証しでき、出席された卒業生の方々にも喜ばれ、幸いなひと時となりました。

神様は、私のシカゴ滞在の最後の最後に至るまで、学びと奉仕と生活を豊かに祝福し、実り多いものとしてくださいました。

【関西聖書神学校に導かれて】

一九九八(平成十)年三月末に日本に帰国し、四月関西聖書神学校本科に入学しました。神学校では、神学の学びと教会実習、寮生活の三本柱で成り立っていました。かねてから憧れていた塩屋の学生となり、私の心は神様への感謝の心で一杯でした。奇しくも、私のすぐ上の兄も同じ時期に献身の召しが与えられ、共に入学していました。同級生として、学びやそれぞれの生活においても、お互いに助け合うことができ、神様の深いご配慮であったと感謝しました。

神学校では、毎朝五時半起床、六時の早天祈祷会から一日が始まります。慣れるまでには時間がかかりましたが、神様の前に静まつて一日をスタートでき、幸いでした。授業は、新約聖書の言語であるギリシャ語の文法を始め、神学の基礎的な学びが中心ですが、トリニティでは英語で苦労した分、母国語で聖書や神学を学べることの有難さを感じました。さらに、声学や教会音楽、ピアノなどの実践的な授業もあり、先生方から多くのことを教えていただきました。

女子寮では、一緒に入学した五人の姉妹を含めて、先輩方も一人一人が非常に個性的で、かつ、神様の愛に応えて献身された方ばかりで、とても楽しい主にある交わりが与えられました。また、韓国人留学生の方々ともよく語り合い、祈り合う親しい交わりが与えられましたが、彼女たちの日本宣教に対する重荷を知らされる度に深く感動し、信仰が励まされることも度々あり、神様の導きに感謝したものです。

教会実習では、電車を乗り継いで約三時間、一泊二日の宿泊の用意もして、兵庫県の真ん中あたりに位置する丹波柏原教会に遣わされました。この柏原(かいばら)教会は、かつて私の両親がご奉仕した教会であり、牧師の奥澤先生は中高生キヤンプ時代からお世話になっていた先生でしたので、先生ご夫妻を始め、教会の皆さんがとても温かく迎えてくださいま

した。ここで教会学校や中高生会、聖歌隊、青年会などの奉仕や交わりに加えていただきました。土曜日の夕方、教会の自転車をお借りしてCSの子どもたちの家を訪問していましたが、美しい山々に囲まれ、新鮮な空気を吸いながら、伝道のためにご奉仕できる喜びで一杯でした。特に子ども伝道を神様が祝して下さり、教会学校に新しい生徒が次々と与えられ、教会あげて感謝しました。

神様はこの一年間に、神学校生活のみならず、トリニティ神学校の卒業式出席をかねてシカゴ行きを許していただいたり、神学校の夏期キャラバンに参加し、鹿兒島の教会で伝道したり、さらに教団主催の訪問ツアーで台湾の教会を訪れる貴重な機会を与えてくださいました。

これらの遠隔地で受けた神様の恵みの証は後日に譲ることにはしますが、五月のトリニティ卒業前に訪問したイヌイツト(エスキモー)の村は、あまりにも別格の環境であり、その訪問旅行は強烈な印象を残してくれるものでした。北極圏に近い位置にあるベイカーレイクには、この前年に姉一家が移住していました。この機会にぜひ、と姉が誘ってくれて訪問が実現しました。

まず、関西国際空港からカナダ・マニトバ州ウイニペグまで飛行機を乗り継いで一五時間。さらに、そこから、飛行機

を五回乗り継いで五時間かけて到着したのが、半年以上も凍りついた湖のそばにあるイヌイツトの村ベイカーレイクです。母と私が滞在した四月末でも、マイナス二十℃まで冷え込み、本当に別世界でしたが、日本人は現地の方々と同じ黒髪で顔つきも似ており、どこに行っても温かい歓迎を受けました。

すでにイヌイツトの村々では、一九五〇年代からキリスト教の伝道活動が始められ、多くの人が幼児洗礼を受けているのですが、本当に福音に生かされている人は少ないとのことでした。厳しい自然環境と異文化の中で、イヌイツトの人々と共に暮らし、伝道・教会形成に励む義兄や姉の働きの尊さに新たなチャレンジを受ける時となりました。

こうして、塩屋に戻った私は、今自分に与えられた学びと奉仕と生活に忠実でありたいと願い、励んでいました。

しかし、体力的にはきつく、一年生の十月には体調を崩し始めた私でした。それもそのはず、塩屋の生活がスタートしてから、シカゴから修士論文の最終的仕上げを持ち帰り、二重の学びをしていましたし、夏期伝道実習中もほとんど休みを取らず、キャンプや教会奉仕でスケジュールは埋まっていました。そもそも、日本に帰国する際の精神的かつ体力的負担、疲労、逆カルチャーショックなども十分予想できたので、しばらく休養を取るべきだったのです。しかし、神学校

での学びを始めたかった私は、はやる気持ちを抑えられず、無理に無理を重ねていた、その結果でした。

十一月には、慢性偏頭炎と診断され、学校を休学し、実家で二週間療養に専念しました。幸い、十二月には復学でできましたが、体力の低下した私にとって、学びも教会奉仕も、また寮生活においても何もかもが中途半端になり、精神的に自分を追い詰めるようになりました。周囲には心配かけまいと努めて明るく振舞おうとしましたが、徐々に涙が止まらなくなり、不安定な心の状態に気付くようになりました。そこで、三月には明石の精神科で診察を受け、自律神経失調症のため、半年間の休学を勧められました。

【神戸での療養生活】

ちょうど年が明けて四月には、奇しくも私の父が関西聖書神学校の校長として新しく赴任しました。実家が校内の校長宅に移ったこともあり、ゆつくり休養に専念したい私は、神戸市北区で牧会していた次兄夫婦の下に居候させてもらうことになりました。兄も義姉も神学校を卒業して間もない時期で、教会での御用だけでも大変だったと思いますが、行き場のない私を快く受け入れてもらい、本当に感謝に思いました。

幸い、車で十五分ほどの同じ北区にキリスト教病院があり、

心療内科で様々な検査を受けました。その結果、「不安障害」との診断を受け、自分自身の精神的状態を客観的に知る機会となりました。ここでは薬による治療を受けましたが、私が軽度のうつ病を完治させるためには、カウンセリングが必要だと気付きました。

そこで大阪の淀川キリスト教病院を紹介してもらい、電車を乗り継いででしたが、精神内科現、こころの診療科に通院することになりました。ここで出会った担当医の久保田先生は、稀に見るクリスチャンの名医だと直感しました。まだ三十代と思われる年若い感じの先生ですが、非常に穏やかで、かつにこやかで、患者である私の話を丸ごと聞いて受け止める、器の大きさを感じました。また、返答してくださる言葉は数少ないものの、非常に的確であり、私の心に響くものばかりでした。

初めての診察日、受診前に、なぜこの病院を受診したのかを書き始めた時、私の心には様々な思いがあふれて止まらなくなりました。子供の頃から、親に認めてほしくて常に良い子を振舞い、心の中ではもつと愛されたいという欲求を強く抱いていたこと、それ故、思春期には心が不安定であり、それを隠し続けて心が暗くなっていたこと、主イエス様の救いにあずかり、神様の愛に触れ、その愛に満たされ感謝するも

の、時には律法主義に走り、自分自身を裁き、落ち込むことも多かったこと、そして、今現在抱えている問題について事細かに、一枚の紙の両面にぎっしり書き込んだのです。

その内容に一通り目を通された先生は、「これだけ書くのは大変でしたね。今日はこれで終わりにしましょう。帰ってゆっくり休んでください」と言われました。先生のこの言葉に、私は自分を丸ごと受け入れてもらえたと感じました。また、自分の長年抱いていた、誰にも打ち明けられない心の思いや葛藤をようやく打ち明けられたような、そんな安堵感を覚え、神様がよき先生との出会いを与えてくださったことを心から感謝しました。

それ以来、私は安心して、体力的に厳しい時も祈って神様の助けをいただきながら、毎週通院するようになりました。先生を全く信頼しきった私は、以前交際していた彼にも会ってもらおうようお願いしました。神学校を離れた私は、再び電話で彼に自分の状況を話し、祈りをお願いしていました。彼も、休学中とはいえ、神学生である私に適度な距離を置きつつも、いろいろと相談に乗ってくれました。

かつての五年半の交際中は、手をつなぐことすらないほどのプラトニックな関係でした。しかしその分、精神的な心の支えとなっていたのだと思います。一度はヴィジョンの違い

で別れたものの、やはり心の傷が深く残っていましたので、再度彼との結婚が御心であればよいのに、という思いが起こっていました。

しかし、短い時間でしたが、彼と話をした後、先生は率直に感じたことを述べてくださいました。それは、どんなに社会的に立派であつて、かつ優秀な人物であつても、それが結婚を決める材料とはならないこと、私が心の病を発病した背景には、結婚したくても結婚できなかった何かが彼との間にあつたのだらうと言うのです。そこで、思い出したのが以前親友から指摘されたことでした。彼との交際中、どうしても彼のペースに合わせて、自分を押し殺したために時に不満が爆発していたこと、会つては別れ、会つては別れの繰り返しでひどく私の心が傷ついていたこと、そしてそれは二人のどちらかが悪いわけではなく、ただかみあわないものがあるから、という指摘でした。私もこれまでにたくさんの苦い思いをし、相手をも傷つけてきたというのに、やはり肉の思いが捨てきれなかつたことを悔い改めました。実際に、彼と話し合つて最後のお別れができたのは数か月後になりましたが、この時、ようやく私自身の心に決着がついたことは、神様の憐れみでした。

【神学校退学問題】

さて、次に決断すべきことは、神学校に戻るのかどうか、ということですが、私の性格上、あれもこれもと欲張りすぎて、結局疲れ果ててしまうことが分かった以上、体力的にも精神的にも弱っている今のままの状態ではとても復学は望めないと判断しました。幸い、教団の教会学校局から、教団独自の教会学校カリキュラムをリニューアルするからそのお手伝いをしませんか、とお声をかけていただきました。

九月に入り、長兄も付き添ってくれて、滋賀県近江八幡市にある教団本部事務所に出かけました。そこで、本部主事の藤森先生から奉仕内容や住まいの事などをお聞きしました。

私はまだ通院中であり、リハビリ期間が必要であることも十分理解して下さって、最初は午前中だけ、徐々に体調を見て仕事を増やしていけばいいから、とのお話でした。トリニティで教会教育を学んだことが生かせる場を与えられ、これも神様の深いご計画の中にあると確信しました。折しも、毎日のデイポーションで、「もしだれかが、あなたがたに何か言ったなら、主がお入り用なのですと言いなさい」(マタイ二一・三)の御言が心に強く迫っていた直後のことでした。今のこのどん底状態の中でも、主はお声をかけ、小さき者に目を留めてくださっている事実を静かに受け止めたばかりでした。

しかし、私には次なる課題がありました。神学校を途中退学する決心は固まったものの、その届けを校長である父に提出しなければならぬのです。私の直接献身を長年祈って来ていた両親にとつて、せつかく塩屋に入ったのに、なぜ今ここで辞めなければならぬのか、と疑問が湧いてもおかしくありません。私自身も、英語で苦心したトリニティを卒業できたのに、なぜ塩屋をやめるのか、と心に責めを負っていました。両親が理解できないのも当然であるし、私も両親を悲しませることに非常に恐れを抱き、悩みに悩みました。九月の後半は、ひどい精神状態となり、私のような親不孝者は消えてなくなった方がいいのではないかとさえ思う時もありました。

けれども、神様は常に私を支えてくださり、十字架に現しただけで深き愛を示し続けてくださいました。

「弱き者よ、我にすべて まかせよと 主はのたもう 主によりて あがなわる、わが身の幸は みな主にあり」この讚美歌五一四番を口ずさみ、どれ程慰めをいただいたことか分かりません。以来、この賛美は私の愛唱歌となりました。

「もしも主がわたしを助けられなかったならば、わが魂はとくに音なき所に住んだであろう。しかし、『わたしの足がす

べる』と思つた時、主よ、あなたのいつくしみはわたしを支えられました(詩篇九四・十七、十八)。

正に、この御言通りに、神様は私を支え、強め、命の道からそれることがないようガードしてくださいました。

十月半ばに、思い切つて父に退学届の書き方を教わり、すぐに書き終えたものを手渡しました。父は一言、「わかりました」と言つて受け取つてくれました。両親もまた、この事が神様から出たことと信じ、今後の導きを主に委ねようと、信仰に立つて私の退学を受け止めてくれました。ただただ神様の憐れみによることであり、感謝に思いました。

【近江八幡に導かれて】

こうして、十一月からの本部での働きに合わせて、慌ただしく荷物をまとめ、次兄やすぐ上の兄に手伝つてもらい、近江八幡へと引越しました。僅かこの一年半の間に、シカゴ、明石の実家、塩屋、六甲みどり教会(次兄の奉仕する教会)、近江八幡と、計四回も移動し、その度にシカゴ時代に集めた書籍の山や膨大な資料を運んでいましたので、兄たちには申し訳なくも、進んで助けてもらい、本当に有り難く思いました。

本部事務所では、当時教会学校局長をされていた鎌野先生

や主事の藤森先生ご夫妻を始め、同じ職員として働いていたクリスチャンの方々いろいろなと助けていただき、最初の二か月はパートタイムで、その後フルタイムでの仕事と一人での生活を無事スタートできました。この間、母が経済的にも精神的にも大いに助けてくれました。また堺の姉も、まるで自炊を始める娘に送るように、お米やパスタ、その他の食品を送つてくれて、妹を気遣う姉の優しさにも触れ、家族の支えもまた神様からの賜物、と感謝しました。

教会は八幡(はちまん)福音教会に導かれました。牧師の唐木先生は、私が初めて中高生バイブル・キャンプに参加した中学一年時の講師の先生であり、この一年前には塩屋で伝道学を教えてくださった、宣教に熱く燃えておられる先生でした。私が塩屋を離れることを残念がつてくださいましたが、ご夫妻共々主にある愛をもって、教会に温かく迎えてくださり、有り難く思いました。

この近江八幡の教会こそ、私が生まれ育つた教会であり、幼少期の頃、家族ぐるみでお世話になつた方々も、元気に信仰生活に励んでおられました。青年会や聖歌隊にも加えていただき、短い間でしたが、主の恵みを豊かに覚える交わりが与えられ、大きな励ましをいただきました。

【結婚への導き】

さて、生まれ故郷の近江八幡での生活が落ち着き始め、私はついに以前の彼と最後のお別れをしようと会いに行きました。この数カ月間に、私の心も整えられ、とても穏やかにこれまでの感謝を伝え、お別れを告げ、今後の祝福のため祈ることができました。彼もまた、「実際に会って話せてよかったです。これでようやく踏ん切りがつけられる」と言ってくれました。帰りの電車の中で、神様が私の心を守り支えてくださり、きちんと終止符を打てたことを感謝しました。その祈りの中で、次の御言が心に響きました。

「悩みの日にわたしを呼べ、わたしはあなたを助け、あなたはわたしをあがめるであろう」(詩篇五十・十五)。

神様がこの御言通り、一番の悩みであったこの問題に関しても、神様に助けを求めた時に確実に答え、実際のな助けを与えてくださったと、あふれる涙を止めることができませんでした。そして、この御方の御心に従うことこそ、私にとって最善最高の生涯であることを改めて確認させていただきました。

そして年の明けた二〇〇〇年一月のことです。男子寮の寮母をされていた方に、母が私の結婚に関して相談しました。その時に、その方が名前を出されたのが、主人でした。その

姉妹は、主人の神学校在学中によく声をかけてくださり、卒業後も主人によき助け手が与えられるよう祈り続けてくださっていました。

母からその話を聞いた父は、「金生君なら知っているよ。さわやかな好青年だ」と喜びました。父は長年塩屋で牧会学とキリスト教教育を教えていましたので、学生の頃の主人を覚えていました。早速父は主人に電話をかけ、結婚の導きについて尋ね、紹介したい人がいるからついでには履歴書を送ってほしいと頼みました。そして、私にもすぐに証と履歴書、写真を用意するようにと電話で伝えてくれました。

以前の私なら、結婚相手ぐらい自分で見つけるから、とすぐに断るところですが、さすがに自分で選んだ人が御心ではなかった手痛い失敗があったため、父の助言を有り難く思い、この事も主から出た事と素直に従うことができました。主人は、まさか娘が紹介されるとは思ってもみなかったようですが、とにかく信仰の同じ人との結婚を祈っていたので、お見合いに応じることにしたそうです。

こうして三月に、兵庫県姫路市で初めての出会いが与えられました。その日の朝のデイポーションで、次の御言が私の心に迫ってきました。

「しかし、わたしは自分の行程を走り終え、主イエスから

賜わった、神のめぐみの福音をあかしする任務を果し得さえないら、このいのちは自分にとつて、少しも惜しいとは思わない(使徒二十・二四)。

当時の私は、自分には結婚が必要だと強く感じてはいたものの、結婚に対する不安や躊躇する思いがありました。しかしこの御言から、私に与えられた使命は、神様の恵みとご真実を証しすることであり、結婚が御心であるなら、神様が必ず確信を与え、御心になう道を選び取らせてくださると示され、安心してお見合いに臨むことができたのです。

主人に出会った最初は、「ちよつとタイプではないな」という印象を持ちましたが、父を交えて三人で話す時には、とても穏やかで優しそうな人だと見るからに分かりました。また、主人は「燃ゆる柴」と「ぶどうの木」教冊とを、父や私に渡すため持参していました。そして、自分の教会のこと、信仰のことが分かりますのでぜひお読みください、とのことでした。私もまた、証集や記念集を読むのが大好きであり、この人は信仰を第一にする人だと感じ、この配慮を嬉しく思いました。

父と別れて、主人と姫路城近辺を散策しました。初めての出会いとは思えない程、とてもリラックスして、お互いの信仰に導かれた時の証しや、教会の様子、家族のことなど、様々

なことを話すことができました。時間を忘れるぐらい、一日共に行動し、主の恵みを分かち合う交わりが与えられたのでした。

翌日、結婚を前提に交際を始めたといふ電話をもらい、私も主の御心をさらに真剣に祈り求めるようになりました。その週は毎晩電話での交わりが与えられました。出会って五日目のことです。電話で話した後、お互いのために祈り合つてから電話を切るようにしていました。その日主人は詩篇十六篇八節の御言を口に出して祈り始めました。なんと、私も今日の会話の中でこの御言を心に思い巡らせていたので、祈りの中で再度自分に言い聞かせるように、この御言を握つて祈ろうと思つていたのです。同時に同じ御言、主に対する同じ信仰が与えられ、私は神様の不思議な導きを確信せずにはおれませんでした。

その後四月に、今度は八幡で再会することになり、榎本利三郎先生、百合子先生に初めてお目にかかる機会が与えられました。先生方と親しくお話でき、長年の牧会のご苦労をみじんも感じさせないような、主にあつて輝いていらつしやるお姿に触れて、とても心熱くなり、大きな励ましをいただきました。また、初めて訪れた八幡前田教会の会堂に入り、三つの御言が講壇後ろに掲げられているのを見て、御言に立

つ信仰の教会であると改めて感じました。

その日の内に、主人の母教会の大濠公園教会に案内してもらい、和義先生、文子先生に大変温かく迎えていただきました。夕食後、特に和義先生にこれまでの信仰の導きについて、様々お証しする時が与えられました。先生もまた、ご自身が献身に導かれた時の主の導きを話してください、私も心励まされ、燃やされる思いでした。

翌日の大濠公園教会の礼拝で開かれたのが、第一ヨハネ三章一六節の御言でした。

「主は、わたしたちのためにいのちを捨てて下さった。それによつて、わたしたちは愛ということを知った。それゆえに、わたしたちもまた、兄弟のためにいのちを捨てるべきである」。

和義先生がこの御言から主のご愛を語られ、その前日に話された同じ証をしてくださり、再度私の心は主の愛に触れ、喜びで満たされました。主人との出会いを通して、このように神様が尊い御言を備え、私の信仰を強め励ましてくださっていることがよく分かり、主の恵みに圧倒される思いでした。こうしてお互いに結婚が主から出たことだとの確信を与えられ、五月に主人がプロポーズしてくれました。「主の恵みあふれる家庭と一緒に築いていきたい、そして、二人で一つ

の御用をさせていたどうか」との言葉をもらい、涙ながらに主に感謝を捧げました。

六月には、私の母教会の明石人丸教会で、宮崎先生の司式の下に婚約式を挙げさせていただきました。和義先生・文子先生が証人として列席してください、主人の母と伯母、私の家族と親戚、人丸教会の皆さん、さらに、良きお交わりをいただいた堺栄光教会から、丹波柏原教会から、また、大学の友人、神学校の学友など、本当にたくさんの方々がお祝いに駆けつけてくださいました。私が結婚の導きを受けた背後に、どれほど多くの主にある兄弟姉妹が、私の歩みの祝福のため祈って下さったことでしょう。改めて主にある愛と友情の尊さを思い、素晴らしい出会いの数々を思い起し、主への感謝で一杯でした。

式の中で記念として、お互いに聖書を贈りました。そこには、出会って最初に二人に与えられた御言が書かれてありました。

「わたしは常に主をわたしの前に置く。主がわたしの右にいますゆえ、わたしは動かされることはない」(詩篇十六・八)。
この御言を通して、私たちの心の拠り所は、やはり主なる神様しかなく、この御方の前に常に身を低くして、お従いしていくならば、神様の方で私たちの歩みを整え、生きた

信仰に立つ者としてくださることを教えられます。この御言をいつも心に刻んで、新しい生活も主に導かれて歩ませていただきたいと願わされたことでした。

やがて、七月に入り、本部事務所での仕事を辞し、夏の間は実家で結婚準備の時を持たせていただきました。

そして、二〇〇〇(平成十二)年十月九日、榎本利三郎先生の司式の下、八幡前田教会で結婚式を挙げさせていただきました。当日は、八幡前田教会、大濠公園教会、戸畑教会を始め、家族、親族、他教会の兄弟姉妹、友人など約二四〇人の方が列席してくださり、新しい門出を祝福してくださいました。神様の大きな御愛と深いご計画の中に置かれて身の幸いを覚え、ただただ御名を崇めました。

こうして北海道での新婚旅行を終え、八幡での新しい生活が始まりました。十一月には前田教会に転入会させていただき、教会の一員として教会生活に励み、主にある幸いな交わりの中に入れていただき、現在に至っていることを深く主に感謝する者です。

【おわりに】

「まず神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば、これらのものは、すべて添えて与えられるであろう」(マタイ六・

三三)。

最近特にこの御言を教えられ、このように主を第一に、主の御心を常に求めて歩んでいきたいと願う毎日です。

私のこれまでの生涯を振り返ってみても、神様の方では、「見えざる御手」をもってすでに、恵みに満ちたご計画と、私にしか果たせない使命を用意してくださいました。問題は、私の側にあるのだと思います。私に求められているのは、全き献身と、「主よ、私は今日あなたのために何をしたらよいでしょうか」と、へりくだって神様の御心を伺い、その導きに心を尽くして従っていくことではないか、と教えられています。

結婚後幸いにも、私たち夫婦には次々と子どもが与えられ、現在私も四人の母親として、育児の御用を委ねられています。かつて病で苦しんだ事や、様々な試みの中に置かれた事を思い出す度に、今現在与えられている生活は、もつたいないほどの主の豊かな恵みであると、感謝の一言に尽きます。と同時に、親となつてみて改めて、両親の信仰の姿勢に教えられることが多々あると、痛切に感じざるを得ません。

そして、幼い頃から聖書に親しみ、常に祈り、何をしてもまず神様を第一にする生活を訓練された子供を、神様は決してご自身のもとから離されないのではないかと、この頃強

く考えさせられます。

「子をその行くべき道に従って教えよ、そうすれば年老いても、それを離れることがない」(箴言二二・六)。

「父たる者よ。子供をおこらせないで、主の薫陶と訓戒によって、彼らを育てなさい」(エペソ六・四)。

これらの御言に従って、私もまた、我が家の四人の子ども達が、主に喜ばれる子どもとして成長できるように祈りつつ、その成長にふさわしい訓育を実践できるようにと願っています。実際、様々な失敗を通りながらも、子育ての楽しさと難しさ両面を経験する毎日ですが、そんな中でも、信仰の継承が主の導きに従ってなされるよう、お祈りに覚えていただければ幸いです。

今回は、結婚後の恵みについては時間切れとなり、後日神様の許しがあれば、お証しさせていただきたいと願っていますが、私の日々の主と共なる歩みを通して、ただひたすら主なる神様が崇められますようにと願いつつ、筆を置きます。

「そこで、わたしが切実な思いで待ち望むことは、わたしがどんなことがあっても恥じることなく、かえって、いつものように今も、大胆に語ることによって、生きるにも死ぬにも、わたしの身によってキリストがあがめられることである」

(ピリピ一・二十)



福岡大濠公園教会の記録（補遺・改定版）

一九九九年（平成十二年）～二〇〇八年（平成二十年）

一九九九年（平成十二年）

一月 新年聖会（一～三）

○ 見よ、わたしはすべてのものを新たにします。

（黙示録二一・五）

○ 栄光から栄光へと、主と同じ姿に変えられていく。

（第二コリント三・十八）

○ わたしに呼び求めよ、そうすれば、わたしはあなたに答える。
（エレミヤ三三・三）

一月 成人祝福式（十七、上野孝裕さん）

三月 洗礼式（二一、上野孝裕、正野敬士）

四月 イースター礼拝（四）

江口亮子姉転入会（二五）

（日本イエス・キリスト教団長崎めぐみ教会から）

五月 洗礼式（十六、上野正裕）

八月 教会学校「一日お楽しみ会」（十三）

献児式（十五、澤野頌）

九月 結婚式（山中良美姉とアントニオ・アメンドラ兄、十二）

谷口泰雄兄（谷口ハナ姉ご主人）召天（十六）

洗礼式（十九、久保田忍）

十月 教会の大改装開始（会堂の拡張、エレベーター設置玄

関回り、外壁塗装、屋根裏納戸設置、内装改装、浴室

移設他）（十）

十一月 大谷冬子姉召天（四）

十二月 「ぶどうの木」二七号発行

クリスマス礼拝・祝会（十九）

クリスマス燭火夕拝（二四）

八幡前田教会青年会と合同青年会（二六）

二〇〇〇年（平成十二年）

一月 新年聖会（一～三）

○ 信仰がなくては、神に喜ばれることはできない。

（ヘブル十一・六）

○ 子たちよ。キリストのうちにとどまっていなさい。

（第一ヨハネ二・二八）

○ 主、主、あわれみあり、恵みあり、怒ることおそく、い

つくしみと、まこととの豊かなる神、…。（出三四・六）

- 一月 聖書通読を始める。
- 二月 岩谷モモヨ姉召天 (二二八)
- 三月 平尾霊園教会墓地改築 (十四)
洗礼式 (二六、正野栄子)
平野正雄兄召天 (二八)
- 四月 OMF 宣教会宣教師、菅家庄一郎師来訪 (十六)
イースター礼拝 (二三)
- 五月 平尾霊園新納骨堂献堂式、「栄光陵」と命名 (二三)
教会改装工事完成 (三十)
教会改装、納骨堂献堂の感謝礼拝 (二二)
(講師名古屋一麦教会牧師 松原向師)
- 七月 平岡恵也兄召天 (九)
松崎ひろ子姉召天 (二八)
- 十月 金生一郎師と金井栄子姉の結婚式 (九)
(八幡前田教会にて)
- 十一月 洗礼式 (二九、隈上麻衣)
鶴原正蔵兄、千恵子姉転入会 (十九)
(日本キリスト教団警固教会から)
- 十二月 クリスマス礼拝・祝会・燭火夕拝 (二四)

二〇〇一年(平成十三年)

- 一月 新年聖会 (一〜三)
- わたしは主である、わたしのほかに神はない。
(イザヤ四五・十八)
- わたしは限りなき愛をもってあなたを愛している。それゆえ、わたしは絶えずあなたに真実をつくしてきた。
(エレミヤ三一・三)
- 主を待ち望め、強く、かつ雄々しくあれ。主を待ち望め。
(詩篇二七・十四)
- 一月 上野孝裕兄と江口智子姉の結婚式 (十三)
成人祝福式 (十四、正野敬士兄、隈上麻衣姉)
- 二月 緒方とみ子姉転入会 (二五、基督伝道隊戸畑教会から)
- 四月 イースター礼拝 (十五)
「ぶどうの木」二八号発行 (十五)
- 五月 「日々の聖言」メール配信開始 (十二)
- 七月 洗礼式 (十五、平野馨、山本ハル子)
- 八月 教会学校一日お楽しみ会 (十二)
洗礼式 (二十、病床にて、吉永知代)
- 十一月 吉永知代姉召天 (二四)
献児式 (上野雄貴、二五)
- 十二月 クリスマス礼拝・祝会 (二三) 燭火夕拝 (二四)

二〇〇二年（平成十四年）

一月 新年聖会（一〜三）

○ 今は主を求むべき時である。（ホセア十・十二）

○ 御子イエスの血が、すべての罪からわたしたちをきよめるのである。（第一ヨハネ一・七）

○ 御霊によつて歩きなさい。（ガラテヤ五・十六）

一月 成人祝福式（限上早歌さん、二十）

二月 尾下かおる姉召天（二八）

三月 郡 優吏佳姉転出会（三鷹バプテスト教会、三）

中野勝広さんと矢儀暢子さんの結婚式（十六）

花田実兄召天（二二）

イースター礼拝（三二）

竹添智美姉転入会（三二）

（日本キリスト教団玉川教会から）

四月 榎本利三郎前牧師召天（十二）

六月 「ぶどうの木」二九号発行

八月 教会学校一日お楽しみ会（十四）

九月 洗礼式（二九、花田敦子、正野聖美）

十二月 クリスマス礼拝・祝会（二二）

クリスマス燭火夕拝（二四）

二〇〇三年（平成十五年）

一月 新年聖会（一〜三）

○ わたしの愛のうちにいなさい。（ヨハネ十五・九）

○ 神は愛である。（第一ヨハネ四・八）

○ わたしたちは、見えるものによらないで、信仰によって歩いているのである。（第二コリント五・七）

一月 榎本百合子師召天（二）

桜木喜美子姉召天（十七）

三月 榎本利三郎・百合子両師記念会（二二、八幡前田教会）

小松秀夫兄（小松姉のご主人）召天（二二）

加賀典子姉召天

四月 イースター礼拝（二十）

六月 濱田満江姉召天（二）

八月 献児式（澤野可奈、三）

教会学校一日お楽しみ会（十四）

九月 「日々の聖言」プリント配布始まる（二八）

十月 上野正裕兄と糸岐友美姉の結婚式（十八）

献児式（上野愛希、十九）

十一月 「ぶどうの木」三十号発行

献児式（中野綾音、三十）

十二月 クリスマス礼拝・祝会（二二）、燭火夕拝（二四）

二〇〇四年（平成十六年）

一月 新年聖会（一〜三）

○ 見よ、わたしはすべてのものを新たにします。（黙二一・五）

○ あなたの神、主が共におられるゆえ、恐れてはならない、

おののいてはならない。（ヨシユア一・九）

○ 見よ、わたしは主である、すべて命ある者の神である。

わたしにできない事があるうか。（エレミヤ三二・二六）

一月 花田照二郎兄召天（二九）

二月 津留崎浩行兄召天（六）

四月 イースター礼拝（十一）

洗礼式（限上望都、十八）

六月 OME 宣教会宣教師、菅家庄一郎師来訪（六）

田中重久兄召天（十一）

七月 猪城なみ姉召天（十七）

榎本和義牧師前立腺がん手術（二七）

十月 花田仁兄と宮城奈都子姉の結婚式（九）

説教プリントを定期に発行（二四）

十一月 松崎まり子姉召天（二）

十二月 クリスマス礼拝・祝会（十九）

クリスマス燭火夕拝（二四）

二〇〇五年（平成十七年）

一月 新年聖会

○ あなたはわたしのほかに、なにものをも神としてはなら

ない。（出エジプト二十・三）

○ わたしに立ち返れ、わたしはあなたをあがなったから。

（イザヤ四四・二二）

○ あなたがたはわが証人、わたしが選んだわがしもべであ

る。（イザヤ四三・十）

一月 内田喜代姉召天（十三）

本部琢巳兄転入会（三十）

（日本神の教会連盟立川神の教会から）

ケネディ・寿子（旧姓折瀧）姉召天（二四）

イースター礼拝（二七）

五月 西山公治兄（八幡前田教会）と時松喜美子姉の結婚式

（四）

六月 上野米子姉召天（十四）

献児式（上野光翼、十四）

教会学校一日お楽しみ会（十六）

献児式（上野初、二五）

九月 貞頼子姉と内藤昭雄兄（名古屋日進ベタニヤ教会員）の

結婚式（於名古屋、二三）

「ぶどうの木」三一号発行(二二五)

十月 献児式(花田英明、二三)

十一月 永島カツコ姉召天(九)

洗礼式(矢野康子、十三)

青年会と若家族会をまとめて「若枝会」発足(二十)

十二月 クリスマス燭火夕拝(二四)

クリスマス礼拝・祝会(二五)

松井富美子姉召天

二〇〇六年(平成十八年)

一月 新年聖会(一〜三)

○ まず神の国と神の義とを求めなさい。(マタイ六・三三)

○ わたしは神である、今より後もわたしは主である。

(イザヤ四三・十三)

○ ダビデの子孫として生まれ、死人のうちからよみがえっ

たイエス・キリストを、いつも思っていてください。

(第二テモテ二・八)

三月 同盟福音キリスト教会二宮キリスト教会牧師隈上正敏

師来訪(十九)

四月 イースター礼拝(九)

五月 榎本利三郎牧師・百合子師記念会(四、八幡前田教会)

榎本利三郎・百合子記念誌「汝は我に従え」発行(四)

六月 「日々の聖言」と「聖書からのメッセージ」(ネット版

説教プリント)をインターネットで公開(十一)

七月 正野栄子姉と前田学兄の結婚式(八)

十二月 クリスマス燭火夕拝(二三)

クリスマス礼拝・祝会(二四)

二〇〇七年(平成十九年)

一月 新年聖会(一〜三)

○ わたしたちは、見えるものではなく、見えないものに

目を注ぐ。(第二コリント四・十八)

○ 主は、わたしたちのためにいのちを捨てて下さった。

(第一ヨハネ三・十六)

○ 聖霊を受けよ。(ヨハネ二十・二二)

一月 井田修二兄・れい子姉転入会(三)

(日本バプテスタ連盟福岡国際キリスト教会から)

二月 「ぶどうの木」三二号発行(二二五)

四月 イースター礼拝(八)

五月 山本淳子姉転入会(十三、日本基督教団佐伯教会から)

六月 榎本利三郎牧師説教集「雲の柱、火の柱」第一巻発行

キリスト伝道隊脇町キリスト教会牧師 岩井從男師

ご夫妻来訪(十)

八月 教会学校「一日お楽しみ会」(十四)

献児式(花田結実、二六)

十一月 教会の車「エステイマ」を購入(二六)

十二月 クリスマス礼拝・祝会(十六)

クリスマス燭火夕拝(二四)

二〇〇八年(平成二十年)

一月 新年聖会(一〜三)

○ はじめに神は天と地とを創造された。(創世記一・一)

○ 見よ、わたしは新しい事をなす。やがてそれは起る、あ

なたがたはそれを知らないのか。(イザヤ四三・十九)

○ だれでもキリストにあるならば、その人は新しく造られ

た者である。(第二コリント五・十七)

一月 成人祝福式(平岡和樹さん、十三)

献児式(前田墨生、二七)

二月 久保山恵美子姉召天(五)

三月 牧師館台所改装・外壁塗装(八〜三十)

礼拝でソング・リーダーを依頼(猪城信子姉、十六)

イースター礼拝(二三)

高柳壽恵子姉召天(二六)

高柳壽恵子・智恵子姉転入会(三十)

(日本キリスト教会志免教会から)

「ぶどうの木」三三三号発行(三十)

四月 阿部直好さん召天(二、榎本文子姉の父)

献児式(上野愛実、二七)

五月 洗礼式(崔 銀珠、二五)

六月 早田亨子姉転入会(二二、八幡前田教会から)

七月 牧師夫妻アメリカ訪問(八〜十八)

池田美子姉召天(二十)

九月 牧師夫妻イタリアに良美姉一家訪問(一五〜二十)

十二月 教会創立八十周年記念感謝礼拝(七)

クリスマス礼拝・祝会(十四)

本部球已兄転会(二一)

(同盟キリスト教会大分恵みキリスト教会へ)

安東篤良兄・倫子姉転会(二二)

(日本バプテスト連盟白杵キリスト教会へ)

クリスマス燭火夕拝(二四)



2009年1月1日

福岡大濠公園教会



2008年夏

八幡前田教会・福岡大濠公園教会
教会学校合同サマーキャンプ(有志)
(五島にて)



2009年1月4日 八幡前田教会



2009年1月4日 八幡前田教会

編集後記

- ◎ 「ぶどうの木」第三四号をお届けします。
概ね年一回のペースで発行していますが、これも皆さんが投稿してくださっているからと、感謝しています。
- ◎ 今回は特別に、榮子先生がご自分の半生を綴ってくださいました。「ぶどうの木」が始まって以来の長編になりましたが、貴重な恵みの流れを中断したくないので、その全部を掲載させていただきました。続編を期待したいものです。
- ◎ 昨年、福岡大濠公園教会が創立八十周年を迎えたことは、印象深いことです。一九二八（昭和三年）に、折滝先生によつて福岡に蒔かれた福音の種が、八幡、戸畑へと増え広がり、私達もその実に与かるようになったことは、主の大きいなる御業と恵みであると思ひます。
- ◎ 私達も信仰を持って御言に従い、その証しが「ぶどうの木」に綴られ、残されることは、次代の方々にも主の御業を伝え、広げて行く新しい使徒行伝になると思ひます。

(S)

発行 二〇〇九年三月

発行者 福岡市中央区鳥飼二―二―二六

基督伝道隊 福岡大濠公園教会
牧師 榎本 和義

発行所 基督伝道隊

八幡前田教会
福岡大濠公園教会
戸畑教会

印刷製本 北九州印刷株式会社